

埋蔵文化財調査報告書 100

国史跡 大高城跡 附 丸根砦跡 鷺津砦跡

2024

名古屋市教育委員会

例言

- 1 本書は愛知県名古屋市緑区大高町に所在する国史跡 大高城跡 附 丸根砦跡 鷲津砦跡の発掘調査報告書である。
- 2 本書では、令和元（2019）年から令和6（2024）年に名古屋市教育委員会が実施した埋蔵文化財調査について報告する。
- 3 各調査の位置・面積・期間は第1章第1-1-1表にまとめている。調査に関する調整事務および現地調査は名古屋市教育委員会文化財保護室が実施した。各調査（監督）は文化財保護室学芸員の岡千明、片桐妃奈子、竹内宇哲、水野裕之、安田彩音が担当した。
- 4 本書の執筆・編集は岡が行った。なお、大高城跡地中レーダー探査は株式会社中野技術に、大高城跡発掘調査に伴う自然科学分析は株式会社パレオ・ラボに、大高城跡地形測量は松岡測量設計株式会社に、丸根砦跡および鷲津砦跡地形測量は株式会社中部テクノスに委託して実施し、成果の一部を収録した。
- 5 参考図版1～3は、名古屋市蓬左文庫所蔵の絵図を掲載した。
- 6 本書で示す方位・座標は国土座標第Ⅶ系（世界測地系）に、水準値は東京湾平均水面（T.P.）に基づく。一部の図は磁北を使用し、表記している。
- 7 土層の色調は『新版標準土色帖』（日本色研事業株式会社）による。
- 8 調査の記録・出土遺物等は名古屋市教育委員会文化財保護室で保管している。
- 9 調査および整理作業の一部については、国宝重要文化財等保存整備費補助金を使用して実施した。
- 10 令和2年度より「史跡大高城跡の調査・保存活用に関する懇談会」を設置し、調査について以下の構成員にご指導いただいた。
岡寺良 佐藤正和 鈴木正貴 藤田達生
また、オブザーバーとして愛知県文化芸術課文化財室技師、名古屋市博物館学芸員にご協力いただいた。
岡村弘子 藤原哲 山内良祐
- 11 現地調査にあたり大高学区および大高北学区、城山八幡社に多大なご協力を賜りました。特に大高小学校の教職員、児童のみなさまにご協力賜り、授業の一環として発掘調査を見学していただきました。また、現地調査・報告書作成に際し、上記委員・オブザーバーのほか、下記の諸氏、諸機関にご教示・ご協力を賜りました。深く感謝申し上げます。
赤羽一郎 小栗康寛 金子健一 河合君近 近藤光男 千田嘉博 中井均 中野晴久 宮武正登
山本智子
名古屋市緑区土木局 名古屋城調査研究センター 名古屋市緑区役所
（整理作業）
安藤明子 入谷敦子 小川敦子 小浦美生 酒井史子 仲間理恵 樋上佐知子 村木望子 六十菊緑
山本雅代

目次

例言

第1章 経緯と経過	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 国史跡指定に係る基礎情報	2
第2章 位置と環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	4
第3章 大高城跡	8
第1節 経緯および現況	8
第2節 地形測量	8
第3節 地中レーダー探査	(株式会社中野技術 小林由典・清水理央) 12
第4節 発掘調査	19
(1) 既往の調査	19
(2) 調査の経過	20
(3) 発掘調査の成果	25
第5節 自然科学分析	49
(1) 放射性炭素年代測定	(株式会社パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ) 49
(2) 堀土層Ⅱ出土の赤色塗膜分析	(株式会社パレオ・ラボ 竹原弘展・藤根久・米田恭子・三谷智広) 51
(3) 花粉分析	(株式会社パレオ・ラボ 森将志) 53
第6節 小結	58
(1) 城の構造	58
(2) 土地利用の変遷	59
(3) 「知多郡大高村古城絵図」及び地中レーダー探査成果との整合性について	59
第4章 丸根砦跡	61
第1節 経緯および現況	61
第2節 地形測量	62
第5章 鷲津砦跡	66
第1節 経緯および現況	66
第2節 地形測量	66
第6章 総括	69
写真図版	
参考図版	
報告書抄録	

挿図目次

第 2-1-1 図	国史跡 大高城跡 附 丸根砦跡 鷲津砦跡の位置	3
第 2-2-1 図	周辺の埋蔵文化財包蔵地	5
第 3-2-1 図	大高城跡地形測量図 (令和 5 年度名古屋市教育局委員会作成)	9
第 3-2-2 図	大高城跡地形測量図 傾斜変換ライン加筆 (令和 5 年度名古屋市教育局委員会作成)	10
第 3-2-3 図	大高城跡着色立体地図 (令和 5 年度名古屋市教育局委員会作成)	11
第 3-3-1 図	地中レーダー探査地区・測線配置図	12
第 3-3-2 図	A 地区 (上) 測線 019 (x = 9.0m)、(下) 測線 014 (x = 6.5m) プロファイル図	15
第 3-3-3 図	A 地区 測線 092 (x = 45.5m) プロファイル図	16
第 3-3-4 図	B 地区 測線 023 (x = 12.0m) プロファイル図	16
第 3-3-5 図	C 地区 測線 022 (x = 10.5m) プロファイル図	17
第 3-3-6 図	A 地区 深度 83 ~ 100cm TS 平面図	17
第 3-3-7 図	GPR 探査結果図	18
第 3-4-1 図	高田徹氏作図大高城跡縄張図 (加筆・修正)	19
第 3-4-2 図	平成 18・19 年度立会調査および平成 28・29 年度試掘調査 位置と土層断面図	21
第 3-4-3 図	調査位置図	23
第 3-4-4 図	調査位置とレーダー探査成果図・知多郡大高村古城絵図墨線 重ね合わせ図	24
第 3-4-5 図	調査平面図	27・28
第 3-4-6 図	堀土層断面図および遺物出土分布図	29・30
第 3-4-7 図	本丸礎や石の分布状況	32
第 3-4-8 図	本丸北壁・西壁土層断面図	33
第 3-4-9 図	本丸東壁土層断面図	34
第 3-4-10 図	本丸出土遺物	35
第 3-4-11 図	堀土層 I 出土遺物 (1)	39
第 3-4-12 図	堀土層 I 出土遺物 (2)	40
第 3-4-13 図	堀土層 II 出土遺物 (1)	41
第 3-4-14 図	堀土層 II 出土遺物 (2)	42
第 3-4-15 図	堀土層 III 出土遺物	43
第 3-4-16 図	堀土層 IV ほか出土遺物	44
第 3-5-1 図	暦年較正の結果	50
第 3-5-2 図	赤色塗膜の赤外吸収スペクトル	52
第 3-5-3 図	花粉分布図	56
第 3-6-1 図	本丸から帯曲輪横断面 (東壁)	58
第 3-6-2 図	調査成果とレーダー探査成果図・知多郡大高村古城絵図墨線 重ね合わせ図	60
第 4-1-1 図	平成 2 年度試掘調査 位置と土層断面図	62

第 4-2-1 図	丸根砦跡地形測量図（令和 3 年度名古屋市教育委員会作成）	63
第 4-2-2 図	丸根砦跡地形測量図 傾斜変換ライン加筆（令和 3 年度名古屋市教育委員会作成）	64
第 4-2-3 図	丸根砦跡着色立体地図（令和 3 年度名古屋市教育委員会作成）	65
第 5-2-1 図	鷺津砦跡地形測量図（令和 4 年度名古屋市教育委員会作成）	67
第 5-2-2 図	大高城跡周辺着色立体地図（令和 4 年度名古屋市教育委員会作成）	68

表目次

第 1-1-1 表	令和元年度～5 年度 国史跡 大高城跡 附 丸根砦跡 鷺津砦跡の調査一覧	1
第 2-2-1 表	大高城跡関連資料	7
第 3-3-1 表	使用機器仕様	15
第 3-4-1 表	堀土層断面（第 3-4-6 図上）土層観察表	31
第 3-4-2 表	遺物観察表	45～48
第 3-5-1 表	測定試料および処理	49
第 3-5-2 表	放射性炭素年代測定および暦年校正の結果	50
第 3-5-3 表	生漆の赤外吸収位置とその強度	51
第 3-5-4 表	塗膜層の X 線分析結果（酸化物換算、mass%）	52
第 3-5-5 表	塗膜分析結果	52
第 3-5-6 表	分析試料一覧	53
第 3-5-7 表	産出花粉胞子一覧表	55

写真目次

第 3-3-1 写真	（左）使用機器・（右）作業風景	13
第 3-4-1 写真	弥生土器出土状況（南西より）	31
第 3-4-2 写真	内耳鍋（62）出土状況（北から）	37
第 3-5-1 写真	漆器の塗膜分析	53
第 3-5-2 写真	No.2 から算出した花粉化石	57

写真図版目次

写真図版 1	中世包含層 A 検出状況（東から）	写真図版 3	堀完掘状況（北から）
	中世包含層 A 検出状況（北西から）		堀完掘状況（北西から）
写真図版 2	本丸西壁土層断面（1）	写真図版 4	堀断面北側（南西から）
	本丸東壁土層断面（1）		堀南肩（北西から）
	本丸東壁土層断面（2）		堀北肩平坦面（北東から）
	本丸東壁土層断面（3）		堀断面下位北側（西から）
	本丸東壁土層断面（4）		堀断面下位南側（西から）

- | | | | |
|-------|--|--------|----------------------------|
| 写真図版5 | 堀埋土下方北側（北西から）
播鉢（48）・徳利（52）出土状況
（北西から）
漆膜①出土状況（南から）
俎板（73）出土状況（西から）
帯曲輪（北西から） | 写真図版7 | 本丸出土遺物
堀土層Ⅰ出土遺物（1） |
| 写真図版6 | 堀 出土遺物
播鉢（28・48）
有耳壺（56）
土師器（60）
石飛磔（43） | 写真図版8 | 堀土層Ⅰ出土遺物（2）
堀土層Ⅱ出土遺物 |
| | | 写真図版9 | 堀土層Ⅱ出土遺物（2）
堀土層Ⅱ出土遺物（3） |
| | | 写真図版10 | 堀土層Ⅲ出土遺物（1）
堀土層Ⅲ出土遺物（2） |
| | | 写真図版11 | 堀土層Ⅳ出土遺物
堀土層Ⅴほか出土遺物 |

参考図版目次

- 参考図版1 知多郡大高村古城絵図（部分）名古屋市蓬左文庫所蔵
- 参考図版2 尾州知多郡大高之内鷲津丸根古城図（大高兵糧入）（部分）名古屋市蓬左文庫所蔵（上：丸根砦跡、下：鷲津砦跡）
- 参考図版3 桶狭間合戦之図 名古屋市蓬左文庫所蔵

第1章 経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

大高城跡 附 丸根砦跡 鷺津砦跡は、名古屋市緑区大高町に所在する中世城館および砦跡である。町の旧名は知多郡大高町で、伊勢湾に突き出す知多半島の付け根西側に位置する。昭和13（1938）年12月14日に文部省告示第360号で指定された国史跡である。

大高城跡は中世の平山城であり、戦国時代の合戦でも特に著名な永禄3（1560）年の「桶狭間の戦い」に関連が深い城跡として知られている。城は「桶狭間の戦い」時には駿河を本拠地とした今川義元の勢力下であり、その配下だった松平元康（徳川家康）が兵糧の運び入れを行ったという。この大高城跡に対抗し織田信長が永禄2（1559）年に築いたとされるのが丸根砦跡、鷺津砦跡である。

令和6（2024）年現在、昭和39（1964）年の大高町の名古屋市への編入を経て、史跡指定から86年もの月日が経過している。史跡は主に都市公園などとして利用され市街地にありながら適切に保存されてきたが、これまで保存活用への考え方やその具体的な取り組み方針については未整理であった。平成30（2018）年の文化財保護法改正により、個別の文化財についても所有者や管理団体、その他関係者が文化財を適切に保存活用するための共通事項を明らかにし将来方針を決める保存活用計画の認定が制度化され、本史跡についても今後保存活用を進めていくにあたって計画策定が課題となった。

計画策定のためには、史跡を構成する遺構の基本的な情報や残存状況を確認する必要があることから、名古屋市教育委員会は令和元年度より第1-1-1表の通り調査を実施した。本報告は、この一連の調査について成果を報告するものである。なお、令和2年度からは「史跡大高城跡の調査・保存活用に関する懇談会」を設置し、各調査について有識者よりご指導いただいた。

第1-1-1表 令和元年度～5年度 国史跡 大高城跡 附 丸根砦跡 鷺津砦跡の調査一覧

年度	位置	調査内容	調査期間	調査面積	調査・監督担当	実施事業者
令和元年度	大高城跡	地中レーダー探査 (本丸地区・二之丸地区)	2021.01.21 ～ 2021.03.31	1,800㎡	片桐	株式会社中野技術
令和2年度	大高城跡	地中レーダー探査 (三之丸地区)	2021.12.15 ～ 2022.03.31	1,800㎡	片桐	株式会社中野技術
令和3年度	大高城跡	発掘調査（第1次）	2022.01.17 ～ 2022.03.11	54㎡	岡・安田	
	丸根砦跡	現況地形測量	2021.08.18 ～ 2021.12.28	3,500㎡	岡	株式会社中部テクノス
令和4年度	大高城跡	発掘調査（第2次）	2023.01.16 ～ 2023.03.10	65㎡	安田・水野	
	鷺津砦跡	現況地形測量	2022.12.27 ～ 2023.03.31	13,662㎡	竹内	株式会社中部テクノス
令和5年度	大高城跡	現況地形測量	2023.11.21 ～ 2024.02.29	26,578㎡	岡	松岡測量設計株式会社

第2節 国史跡指定に係る基礎情報

大高城跡 附 丸根砦跡 鷲津砦跡は、旧大高町時代の昭和13（1938）年に史跡指定された。戦前の指定であり、指定に至る経緯など当時の記録は未整理である。

以下に、文部省告示の情報を示す。

種別 史蹟

指定年月日 昭和13年12月14日

告示番号 文部省告示第360号

名称 大高城跡附丸根砦跡鷲津砦跡

管理者氏名及指定年月日

大高町 昭和15年4月18日附愛宗23号ヲ以テ管理者ニ指定

所在地地目地積

知多郡大高町字城山、江明、田中、向山、本町（丸根砦跡）同字丸根、（鷲津砦跡）同字鷲津山
指定地積、国有一筆、民有八十三筆（大高城跡）民有九筆内実測二反八畝二十二歩六合六勺（丸根砦跡）
国有一筆内実測一千六百八十七坪、民有一筆内実測五反六畝十六歩（鷲津砦跡）

説明

知多半島丘陵部ノ最北端二位シ最モ形勝ノ地ニアリ、室町時代ニ花井備中守ノ居城タリシガ後水野氏ノ居城トナリ永祿年間今川義元ノ屬城トナルニ及ビ韃靼長照ヲシテ守ラシメ以テ織田信長ノ軍ニ備ヘタリ城跡ハ桶狭間戦役ニ最モ深キ関係ヲ有シ又松平元康（徳川家康）初陣兵糧入ノ遺跡トシテ人口ニ喧傳セラル、義元敗死ノ後廢絶スルニ至レリ、城構ハ本丸ニ之丸等ヨリ成レリ、本丸跡ニ大高城跡碑及其ノ西隣ニハ八幡社ノ社殿アリ、城跡ハ今殆ド山林畑地宅地トナリテ土居ハ亦破壊サレタルモ壕跡尚存シ舊規模ヲ窺フニ足レリ、

丸根、鷲津ノ両砦跡ハ大高城跡ノ東北方數町ヲ距テタル丘陵上ニアリ、共ニ織田氏ガ大高城ニ備ヘシ所ニシテ丸根砦ハ朝比奈泰能ノ爲ニ鷲津ノ砦ハ松平元康等ノ爲ニ攻メ陥サレタリ、後廢絶セルモ壕跡尚存シ亦舊態ヲ偲ビ得ラル

指定事由保存ノ要件

保存要目 中史蹟ノ部第四ニ依ル

公益上必要ニムヲ得ザル場合ノ外現状ノ變更ハ之ヲ許可セザルコトヲ要ス

なお、指定された地番は付け替え等が行われており、指定時の地籍図と現在の地籍図とでは形状・位置に相違があるため指定範囲の特定には検討を要する。特に大高城跡においては大部分が公有地化されているが、現在も一部に寺社地など民有地が含まれている。

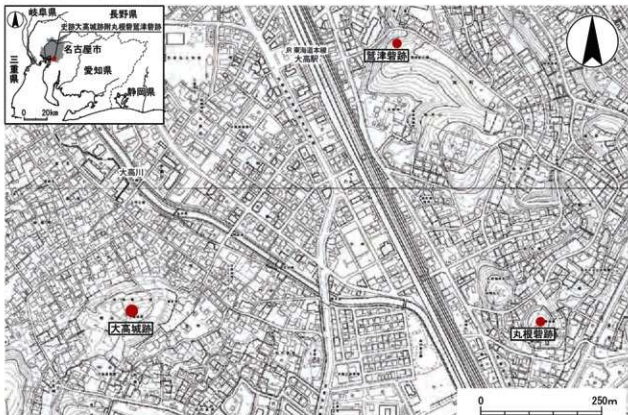
第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

大高城跡 附 丸根砦跡 鷺津砦跡は、緑区大高町の丘陵上に立地する。大高城跡は大高町字城山ほかにもあり、J R東海道本線大高駅の南西約700mに位置する。知多半島を構成する知多丘陵の最北端に位置し、標高約20mと丘陵としては低いが北側に広がる大高町中心部(本町)との比高差は15m以上あり、展望がきく土地である。丸根砦跡・鷺津砦跡は、大高城跡から大高川とJ R東海道本線を挟んだ東側に位置する。丸根砦跡は標高約35mの丘陵の南端に位置する。鷺津砦跡は北西方向に伸びる丘陵の南向き斜面を中心に、標高26m付近に所在する。丸根砦跡・鷺津砦跡はそれぞれ大高城跡から約800m離れた位置し、丸根砦跡と鷺津砦跡は約600mの距離がある。

城および砦が築かれた名古屋市北東部から知多半島に連なる丘陵は、東山丘陵、鳴海丘陵、知多丘陵などと呼ばれる。丘陵は大高一府を結ぶ直線状の谷(大高断面層)で大きく区切られるが、大高城跡、丸根砦跡、鷺津砦跡はこの谷に臨む。丘陵は主に東海層群と呼ばれる新生代第三紀鮮新世の地層から構成され、粘土・シルト・砂を主体とし、下位には瀬戸や知多における窯業生産の成立基盤となった良質な粘土層がある。その上位(丘陵頂部)には第四紀更新世に形成された砂礫主体の地層、八事層が広がるが、浸食等を受けて既に削れてしまった部分が多い。

丘陵一帯の西側は、伊勢湾に流れ込む天白川左岸の沖積地である。樹枝状に発達した丘陵の谷底には小河川が流れ、細長い沖積地が広がる。大高城跡の北を流れる大高川も水主ヶ池を水源に北流し、天白川に流れ込む。なお、天白川沿いは、中世期かなり北方まで海が湾入していたと考えられている。



第2-1-1 図 国史跡 大高城跡 附 丸根砦跡 鷺津砦跡の位置

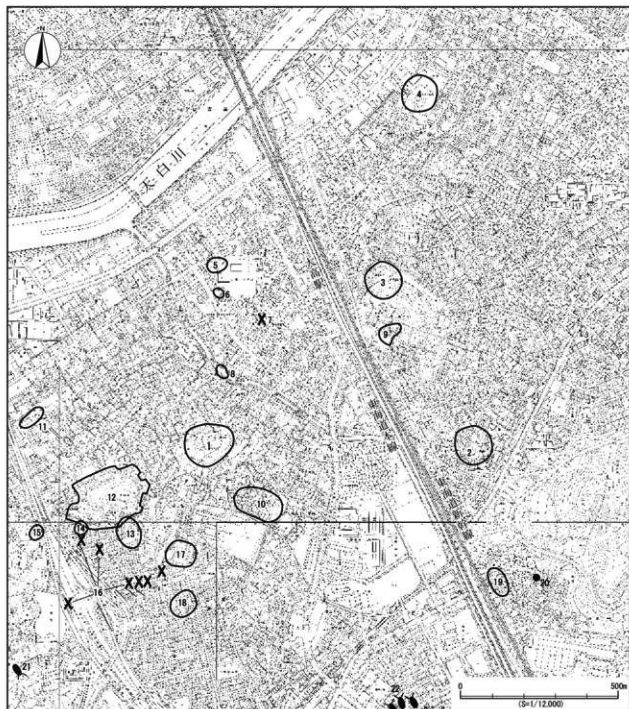
第2節 歴史的環境

周辺は、丘陵上または天白川左岸の沖積地に遺跡が分布している。内容が明らかになっているのは丘陵上の遺跡が中心である。現在に至るまでの地形変化は大きく、丘陵上の造成と共に失われた遺跡や埋没し未だ発見されていない遺跡も多いと思われる。

周辺で確認された最古の遺物は、馬背遺跡や大高町深谷で採集された旧石器時代のナイフ形石器である。廟所遺跡・平野遺跡も旧石器時代の遺物散布地であるが、この地域の旧石器から縄文時代にかけての生活痕跡は明確でない。縄文時代晩期頃になると、名古屋市と東海市の境に近い氷上・齋山（ひかみ いつきやま）に小規模な貝塚が形成された。貝塚の立地状況は、緑区鳴海町などに分布する天白川沿いの丘陵縁部部の貝塚群と共通する。なお、この氷上・齋山の地は、延喜式内社・氷上姉子神社が立地する。

弥生時代には、大高城跡の南西隣の丘陵上にある姥神遺跡で弥生時代後期の環濠とみられる溝が見つかっており、集落が営まれていたと推測されている。石神遺跡でも弥生時代中期の竪穴住居跡が検出されており、伊勢湾（あゆち湾）に近い丘陵頂部には、弥生時代中期後葉以降、広く集落が営まれていたようである。古墳時代になると氷上周辺から東海市名和町にかけての丘陵上には前期古墳とみられる齋山古墳・兜山古墳・三ツ山古墳が営まれた。なお、氷上姉子神社は熱田神宮の元宮とされ、縁起にはヤマトタケルが東征の帰路に草薙剣を託した妃ミヤズヒメの館跡だったとされる。ミヤズヒメは、古代、あゆち湾を経済基盤として力を誇った豪族・尾張氏の一族であった。古墳時代、当地域が政治的・経済的な要衝の地であったことが推測される。なお、石神遺跡で横穴式石室を持つ後期古墳が確認されている。西大高廃寺・猫塚遺跡は奈良時代の寺院跡と目されており、姥神遺跡でも古代瓦が採集されているが詳細は明らかでない。周辺は良質な粘土層が採集される地域であり、奈良時代（8世紀）以降は須恵器・灰軸陶器を焼成した窯跡も分布する。遡る古墳時代中期に始まったとされる猿投窯は、東山地区から時代を経て広域に展開していった。この周辺は特に13～14世紀頃の山茶碗窯が操業し、地域には窯業に従事した人々や流通・運搬に携わった人々の村落があったとみられる。

当地が政治・軍事・交通・経済の要衝であったことを如実に表すのが本報告の中心となる戦国時代であろう。なお、鎌倉時代から戦国時代にかけて、大高町を含む名古屋市中心部は、丘陵上を中心に多数の城館が築かれたことが知られている。大高城跡・丸根砦跡・鷲津砦跡の東側に広がる丘陵一帯が、永禄3（1560）年5月19日に起こった「桶狭間の戦い」の主戦場とされ、扇川より北側の緑区鳴海町では、大高城跡と同じく今川方の城であった鳴海城跡が、また、その鳴海城跡に対抗して築かれた丹下砦跡（清水寺遺跡）、善照寺砦跡、中島砦跡が位置する。三王山遺跡でも15世紀後半の溝等が確認され『信長公記』に記された「三の山」の地と推定されている。なお、丸根砦跡南西に位置する藤塚、十三塚は「桶狭間の戦い」における戦死者を埋葬した塚と伝えられる。ほかにも、姥神遺跡では室町時代頃の大規模な堀や土地造成が確認されている。石神遺跡では、墓とみられる土坑や火葬遺構、古墳の石室石材を御神体として利用した土壇等が確認されており14～15世紀頃の祭祀場だった可能性が指摘されている。江戸時代の地誌「張州雑志」に描かれる石神社に連なるものとみられる。いずれも大高城跡に近接し、同時期の遺跡であり、関連性が強いと思われる。



- | | |
|--|-------------------------|
| 1 大高城跡(城館跡,中世) | 12 姥神遺跡(遺物散布地,弥生~平安) |
| 2 丸根砦跡(城館跡,中世) | 13 石神遺跡(遺物散布地・貝塚,平安~中世) |
| 3 鷺津砦跡(城館跡,中世) | 14 平野池下遺跡(遺物散布地,古墳~中世) |
| 4 前之輪遺跡(遺物散布地,弥生~古墳・中世) | 15 米上神社下遺跡(遺物散布地,時代不明) |
| 5 島戸遺跡(遺物散布地,古墳・中世・近世) | 16 廂所遺跡・平野遺跡(遺物散布地,旧石器) |
| 6 町屋川遺跡(遺物散布地,古墳・中世・近世) | 17 神宮戸遺跡(遺物散布地,古墳~中世) |
| 7 北鶴田遺跡(遺物散布地,弥生または古墳) | 18 馬青遺跡(遺物散布地,古墳) |
| 8 江明遺跡(遺物散布地,時代不明) | 19 十三塚(塚,中世) |
| 9 鷺津山遺跡(遺物散布地,時代不明) | 20 藤塚(古塚,中世) |
| 10 西大高庵寺・猫塚遺跡(西側)・西大高遺跡(東側)(寺院跡・遺物散布地,弥生~中世) | 21 天楽山古窯(窯業遺跡,中世) |
| 11 大砂子(偽長)遺跡(遺物散布地,弥生・古墳・中世・近世) | 22 NA324号窯群(窯業遺跡,平安・中世) |

第 2-2-1 図 周辺の埋蔵文化財包蔵地

資料に残る大高城跡（丸根砦跡・鷲津砦跡）の沿革

大高城は、永正6（1509）年頃に大高城主花井備中守を記した記録が残り、築城は16世紀初頭には遡るとみられる。なお、花井備中守は尾張国守護を任じられた土岐氏の老臣と言われる。

天文年間（1532～1555）の城主は水野氏で、織田信秀の勢力下にあったという。城は天文17（1548）年には、今川義元の命で野々山政兼によって攻められるが、今川方が敗退している。なお、水野氏は尾張・三河の国境周辺を支配した領主で、大高城の東方にある緒川（知多郡東蒲）を本拠地に、16世紀前半には、西は大高や戸田（名古屋市南区）、東は三河・刈谷地域にまで勢力を拡大していた。

天文21（1552）年頃に織田信秀が死去し、信長が家督を継ぐと、鳴海城城主山口氏は織田氏に敵対姿勢を示し、今川方についた。その後、大高城と沓掛城は山口氏に調略されて同じく今川勢力下に置かれた。この時、大高城と鳴海城は駿河から遠江・三河と西側へ領地を広げた今川氏にとって最西端に位置し、領地拡大政策上の重要地点だったと考えられる。大高城と鳴海城は、天白川とあゆち海に近く防衛に優れ、交通・物流の面からも拠点となりえた。永禄2（1559）年には、大高城に今川義元より城代として朝比奈泰能が置かれ、朝比奈氏に大高城に在城のための所領が与えられている。なお城代は永禄3（1560）年の「桶狭間の戦い」時には鶴殿長照であったという。

一方、織田信長は、永禄2（1559）年には尾張北部を支配していた織田伊勢守家の拠点である岩倉城を攻略した。尾張国の統一を目前に控え、信長は大高と鳴海の間に鷲津砦、大高城の東に丸根砦を築いた。鳴海城の周りには丹下砦・善照寺砦・中島砦を築き、これに対し、永禄2（1559）年10月、義元は、奥平定勝、菅沼久助に命じ大高城に軍勢と兵糧を送っている。

緊張関係がピークに達する中、義元は永禄3（1560）年5月12日に駿府から出陣し、三河を経由して5月18日に沓掛城に入城した。今川義元の配下にあった松平元康は、18日に義元の命令で大高城に兵糧を運び込み、翌19日には丸根砦・鷲津砦を攻撃し、人馬の休憩のため大高城に在城した。この19日、義元は桶狭間まで進出し「桶狭間の戦い」に至った。

この戦いで義元が討ち死にし、今川軍は尾張南部に確保していたほとんどの城から撤退を余儀なくされた。大高城は、桶狭間の戦いののちに廃城になったというが、永禄10（1567）年に連歌師・里村紹巴（りむら じょうぱ）が富士見物の際に城を訪れており、また、天正10～11（1582～83）年には織田信勝分限帳に大高城主とみられる水野大膳の名があることから、引き続き城として機能していた可能性もある。

以上の通り、大高を含む尾張・三河国境周辺地帯は対立する東西勢力に大きく翻弄され不安定であった。この地域を取り巻く長年の政治状況を背景として永禄3（1560）年の「桶狭間の戦い」が発生したと言え、大高城は今川対織田の勢力争いに最も直接的な影響を受けた城の一つであった。城および丸根砦・鷲津砦は、立地や構造などに今川・織田双方の意図が濃淡はありつつも反映されていると推測される。

なお、江戸時代に入り、元和2（1616）年になると大高城の三之丸には尾張藩家老の志水家の屋敷が構えられた。屋敷の南には馬場訓練場を設けたという。志水家の生活記録は定かでないが、寛文10（1670）年には、本丸に所在する城山八幡石に石灯笼を寄進している。廃藩置県を経て、明治3（1870）年には志水屋敷は取り壊され、土地が民間に売り払われると、明治13・14（1880・81）年には本丸の東側に茶席若葉亭が建築された。明治22（1889）年には町村制施行に伴い、知多郡大高村が発足しており、明治42（1909）年には二之丸において古城園山荘が建築されたという。

第3章 大高城跡

第1節 経緯および現況

大高城跡は、JR東海道本線大高駅南西約700m地点の、知多半島から伸びる知多丘陵の最北端標高約20mに位置する。現在、城跡はその大半が「大高城跡公園」として保存されているが、推定範囲は周辺の民有地にも及ぶ。史跡指定地範囲は、指定された地番の付け変えなどがあり現時点で明確でない。

昭和13（1938）年12月に、丸根砦跡、鷲津砦跡とともに国史跡に指定される。昭和41（1966）年10月13日に2.3haを都市計画公園として告示され、昭和47（1972）年に公園境界測量を行った。

昭和50（1975）年頃には、昭和44（1969）年の急傾斜地の崩壊による災害の防止に関する法律の施行を受けて地元住民から大高城跡公園南側について急傾斜地崩壊危険区域への指定、また、防護壁の設置に係る要望があったことから市は県への働きかけを行い、同時に現地測量を実施した。

昭和51（1976）年3月17日付愛知県告示第256号で、名古屋市区大高町字城山区域として急傾斜地崩壊危険区域に指定され、昭和54（1979）年2月26日には、急傾斜地崩壊危険区域への追加指定がされた。昭和55（1980）年、城跡内北西隅で公園整備工事を行っている。そのほか昭和60（1985）年にかけて排水・柵・石積みなどの整備工事や植栽、ゲートボール場の設置を行っている。

都市計画線大高町線との関わりのなかで公園事業認可区域と史跡指定地について不整合することがわかり、昭和60（1985）年に市農政緑地局は公園区域の確定測量を実施し、公園地形測量図を作成している平成元（1989）年より県土木事務所が急傾斜地工事に着手し、市農政緑地局が公有地化している。

現在、城跡公園の入り口は北側と西側の2ヶ所である。公園中央に最も標高が高い平坦面があり、この平坦面の西部に城山八幡社が建立されている。その南側は東西方向に伸びる広場がある。広場西方から北へ進むとベンチのある東屋がある。その東側には、ブランコやシーソー、ベンチなど簡易の遊具が設置されている。東西方向に伸びる広場の西部には土橋があり、土橋を渡って西へ進むと北、西それぞれに広場がある。

第2節 地形測量

名古屋市教育委員会は、令和5年度に、詳細な地形状況を把握するため新たに地形測量をおこなった。城跡周辺を含む約26,578㎡を対象に、地上レーザーにより三次元データを取得し、地形図および着色立体地図を作成した。また、現地を踏査し、残存する傾斜変換の上端ラインを赤、下端ラインを緑で示したものが第3-2-3図である。



第 3-2-1 図 大高城跡地形測量図 (令和 5 年度名古屋市教育委員会作成)



第 3-2-2 図 大高城跡地形測量図 傾斜変換ライン加筆 (令和 5 年度名古屋市教育局委員会作成)



第 3-2-3 图 大高城跡着色立体地图 (令和 5 年度名古屋市教育委员会作成)

第3節 地中レーダー探査

株式会社 中野技術

小林由典・清水理史

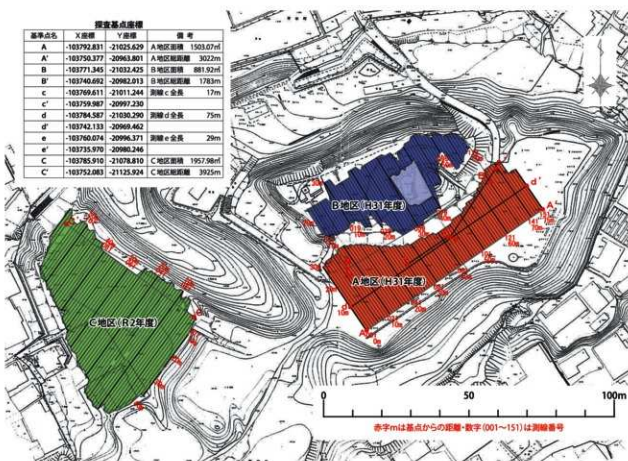
1. はじめに

地中レーダー探査は平成31年度、令和2年度の2回実施した。平成31年度は「知多郡大高村古城絵図」(以下、「古城絵図」)に残された本丸、二之丸及び芝・堀部分、令和2年度は三之丸について堀や建物跡、屋敷跡等の存在を探ることを目的として行われた(第3-3-1図)。

2. 地中レーダー探査の概説

地中レーダー(Ground Penetrating Radar: GPR)探査(以下、GPR探査)は、地表面のアンテナ(箱形の電磁波送受信器)からマイクロ波(電磁波)を地中に放射し、媒体が変化する面で生じる反射波の変化を捉えることで、地中の異物を検知し、埋設・埋没物や地層の境界を物理的に探査する手法である。GPR探査は、地中の状況を非破壊的に把握できることが最大の特長で、既存埋設物検知や路面下空洞化調査など、幅広い分野で利用されている。

埋蔵文化財の遺跡調査におけるGPR探査の応用としては、広範囲を対象として、非破壊的に短時間で遺構の分布状況や規模を推定できることから、発掘調査や史跡整備に先立つ事前調査として活用されている。



第3-3-1図 地中レーダー探査地区・測線配置図

る。反面、現段階の精度では、小規模な遺構プランや、埋設物の具体的な素材、あるいは僅かな土質の違いについては、捕捉することが難しい点を考慮しながら利用する必要がある。

GPR 探査の有効探査深度と解像度は使用するアンテナにより異なり、埋蔵文化財の探査においては中心周波数 200～400MHz が多く使用される。周波数の高いアンテナは、探査可能深度は浅いが解像度が高く、周波数の低いアンテナは、探査可能深度は深いが解像度が低くなる特徴があるため、まず局所的に低周波のアンテナを用いて遺構面の深さを確認する作業を行い、その結果により、有効な探査深度と解像度をもつアンテナを選択する必要がある。

3. GPR 探査の方法

GPR 探査は、調査区の状況に応じて一定間隔で測線を設定し、測線上に張られたメジャーに沿ってアンテナを移動させて走査する。今回の探査では現在の地形に合わせ測線設定を行い、その基点の観測を行い平面図上に合わせている。

アンテナ走査により得られた地中の断面画像データ(以下、プロファイル図)から、タイムスライス(Time Slice)という手法を用いて平面画像(タイムスライス平面図、以下、TS 平面図)を作成する。TS 平面図は、プロファイルから特定の時間(深度)のデータを取り出し、平面上に置いていくことで作成する。溝や濠、道路などは平面上、直線的な画像として表れることが多く、円形や楕円形にまとまる線形も遺構の有無を推定する手がかりとなる。しかし、得られたプロファイル図は、必ずしも遺構や遺物を直接表す形状とならないことがあるため注意が必要である。上方から放射された電磁波は、強く反射される媒体表面の直下には届かず、例えば断面が円形の埋設管の場合、縦に連続した山形の画像として表れる。また、判読の際には、TS 平面図とプロファイル図を合わせて考えることが必要である。さらに GPR 探査による 2 つのデータだけではなく、周辺の地形や古地図、過去の発掘調査、電気探査などを複合的に組み合わせることが、その土地の履歴を知るうえで有効となる。

遺構の深さは、電波の土中における伝搬速度と伝搬時間により決定する。基本土層における伝搬速度は、5.1cm/ns (ns: ナノセカンド= 10 億分の 1 秒) を使用した。

GPR 探査は第 3-3-1 写真・第 3-3-1 表の機器を用いて実施し、データ解析ソフトは GPR-Slice V7 を使用している。



第 3-3-1 写真 (左) 使用機器・(右) 作業風景

第 3-3-1 表 使用機器仕様

名 称	仕 様
コントロールユニット SIR3000 (アメリカ・GSSI 社製)	プロセッサ：32 ビット チャンネル：1ch 送受信 時間レンジ：0～8,000ns スキャンレート：512 スキャン / 秒 A/D 分解能：8 ビット / 16 ビット データ保存：内蔵ハードディスクまたはフラッシュメモリ モニター：8.4 インチ TFT800 × 600 液晶カラーディスプレイ 電源：内蔵 DC10.8V バッテリー 外形寸法：31.5 × 22.0 × 10.5cm 重量：約 4.1kg (バッテリー含む)
アンテナ Model50400S (アメリカ・GSSI 社製)	中心周波数：400MHz/270MHz アンテナ形式：2 アンテナ一体型電磁シールドタイプ 電源：コントロールユニットからの供給による 外形寸法：30 × 30 × 17cm/45 × 45 × 17cm 重量：約 5.6kg/約 9.6kg

4. GPR 探査区と測線の設定

GPR 探査は令和 2 (2021) 年 2 月 26～28 日に本丸、二之丸、芝・堀部分、令和 3 (2022) 年 1 月 27、28 日に三之丸を対象として実施した。いずれの日も霜等もなく恵まれた条件であった。二之丸、芝・堀部分を A 地区、本丸を B 地区、三之丸を C 地区とし、それぞれの地形に合わせ探査区を設定したため、測線の向きは方位、公共座標値には一致していない任意点となる。各探査区の起点については第 3-3-1 図内にまとめている。

A 地区は二之丸、芝・堀部分を対象とする。南西隅を起点 A ($x, y = 0, 0$) として北東方向へ 75.0m の地点を基点 A ($x, y = 75, 0$) とした。測線は起点と基点を結んだ線から北西方向 (y 方向) へ 29.0m の範囲に 0.5m 間隔で設定した。また、北西—南東方向の測線に直交する形で測線 c、d、地形に沿う形で測線 e と計 3 本の補助測線を設定している。

B 地区は本丸部分である。北西には神社、東側は低木草が生い茂っている。事前に篠竹等の伐採を行い、中央やや東側の大きく窪んだ部分を除き範囲とした。解析の処理の都合上、探査区を方形に見立て、その南西隅を基点 B ($x, y = 1, 0$) とし、北東方向へ 60m の地点 (観測は 59.5m まで) を基点 B' ($x, y = 60, 0$) とした。測線は起点と基点を結んだ線 ($y = 0$) からとし、北西方向 (y 方向) へ 30.0m の範囲に 0.5m 間隔で設定した。 $x = 0$ m の測線は障害が多く観測不能であったため、 $x = 1$ m が実質的な始点となる。

C 地区は三之丸を対象とする。地形に合わせ調査区内に基点 C ($x, y = 2, 5$) と起点 C、を設置し、測線の基準となる線 ($y = 5$) をまず設定した。測線は基準線と直行する形で 0.50m 間隔で設定した。解析の処理の都合上、探査区を方形に見立てており、起点 ($x, y = 0, 0$) は調査区外に求めた。測線は起点から北西方向 (x 方向) へ 58.0m の範囲に設定した。

今回の GPR 探査におけるアンテナの選択については、A 地区は堀の幅、深さを考慮し、より深い深度まで探査可能な 270MHz のアンテナ、B、C 地区は建物跡等の詳細な情報を得るため 400MHz のアンテナを使用した。

5. GPR 探査の結果

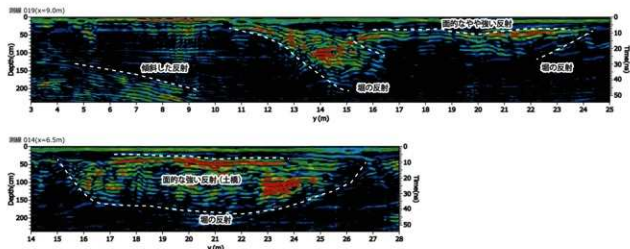
○ A 地区

堀と考えられる反射はプロファイル図の測線 011 ($x = 5.0\text{m}$) から顕著に認められるようになり、測線 075 ($x = 37.0\text{m}$) 付近まで確認することができる。第 3-3-2 図は測線 019 ($x = 9.0\text{m}$) のプロファイル図である。約 11m ~ 23m 付近まで堀状の落ち込みが確認される。電磁波の届く距離に限界があり 200cm 以下のデータについてははっきりしないが、他のプロファイル図から判断すると、表土からの深度は 200cm 以上であると推察される。

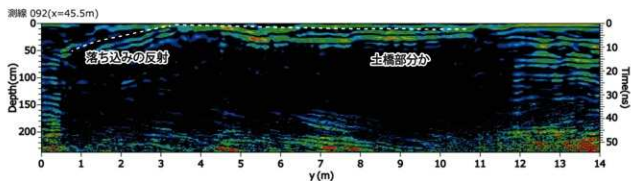
堀の南側の肩部分に見られる強い反射をプロファイル図で見ていくと、西側の方が強く、東側へいくにつれて目立たなくなる。測線 016 ($x = 7.5\text{m}$) から確認することができ、測線 080 ($x = 39.5\text{m}$) を境に不明瞭となる。 $x = 40\text{m}$ 付近には地境の比高差が現在も残っており、「古城絵図」に残されているようにこの辺りで堀が止まっていると考えられる。

西側では他に堀の西側端部に相当する部分である測線 011 ~ 015 にかけて土橋と考えられる反射が認められる。第 3-3-2 図は測線 014 ($x = 6.5\text{m}$) の距離 14 ~ 28m 付近のプロファイル図である。距離 15 ~ 27m にかけて深度 180cm 程の堀と思われる掘り込みが確認される。その掘り込み堆積土中にも 23 ~ 50cm の深度において強い反射を示す平坦面を確認することができる。「古城絵図」に見られる土橋の位置と合致していることから、この強い面的な反射は土橋の反射であると推察される。TS 平面図で明瞭に土橋の形状を見出すことはできないが、深度 36 ~ 64cm ($x = 3 \sim 8\text{m}$, $y = 18 \sim 23\text{m}$) 付近に強い反射の広がり確認できる。

東側 $x = 40\text{m}$ 付近は「古城絵図」では土橋が存在し、堀が続いて描かれている。該当部のプロファイル図では $x = 45.0 \sim 51.0\text{m}$ (測線 091 ~ 103) 付近において土橋に相当すると考えられる反射が認められる。第 3-3-3 図は測線 092 ($x = 45.5\text{m}$) のプロファイル図だが、西側の土橋で確認されたような強い反射は認められないが、地表面近くに平坦面の反射が認められる。この反射を見る限り、掘り込んで作られたような反射は確認されないことから、この場所が堀と堀の間を掘り残す形の土橋であったと想定される。なおこの場所は現在も本丸へとつながる道となっており、このことからプロファイル図で確認される平坦面の反射深度も 10cm 程度と浅くなっている。



第 3-3-2 図 A 地区 (上) 測線 019 ($x = 9.0\text{m}$)、(下) 測線 014 ($x = 6.5\text{m}$) プロファイル図

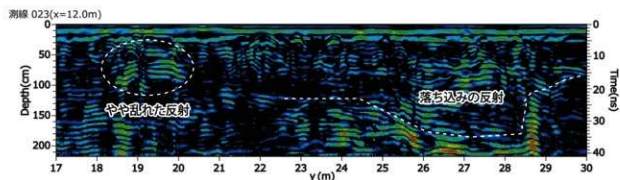


第 3-3-3 図 A 地区 測線 092 ($x = 45.5\text{m}$) プロファイル図

○ B 地区

B 地区は本丸に相当し、建物等遺構の存在が予想される地点である。プロファイル図ではやや強い反射などが確認されるが規模が小さく、木々の根の影響を少なからず受けていると考えられる。

第 3-3-4 図は測線 023 ($x = 12.0\text{m}$) 付近のプロファイル図である。距離 25m、深度 120cm 付近から落ち込み 29m 付近で立ち上がるようなプランが見出せる。25m 付近から落ち込んでいく反射は測線 021 ~ 041 において確認することができ 10m に渡る。測線 039 に見られるような反射は堀の形状を示しているようにも感じられる。北側については、現在は崖となって落ち込んでいるが、「古城絵図」を見ると本丸北側に堀が存在している。プロファイル上で確認される反射は「古城絵図」の堀の規模を比較するとやや貧弱で規模が小さいようにも感じられるが、可能性の一つとしてあげたい。



第 3-3-4 図 B 地区 測線 023 ($x = 12.0\text{m}$) プロファイル図

○ C 地区

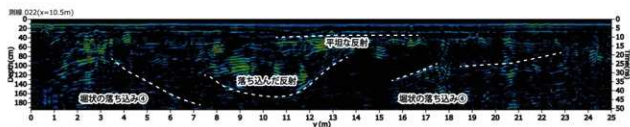
C 地区では、城の時期と異なる土地利用が明らかであるが、遺構等を想起させる反射を取り上げる。ほぼ全域で深度 20cm ほどが整地され、特に民家があった付近では地下 60cm 程度まで影響を受けている可能性があることが推察されるため、考慮する必要がある。

探査区の北東、現存の堀切に平行するような形で落ち込んだ堀状の反射が確認される。この反射は測線 009 ($x = 4.0\text{m}$) 付近から、途中判然としない部分もあるが測線 041 ($x = 20.0\text{m}$) 付近まで連続して確認することができる。深度 80cm 付近から緩やかな角度で掘り込まれ、上幅は約 14 ~ 20m と規模が大きく、深度についても 200cm より深く掘り込まれている可能性も考えられる。立ち上がりのはっきりとしない箇所もあるが、堀の内部と想定されるところでは弱い反射を示している場合もある。

第 3-3-5 図は測線 022 ($x = 10.5\text{m}$) のプロファイル図である。堀と想定される反射は深度 100cm

付近、 $y = 4 \sim 18\text{m}$ にかけて上幅14mの規模で確認され、深度は200cm以上を示している。その内部に深度80～160cm付近、 $y = 7 \sim 14\text{m}$ にかけて上幅7mの規模で落ち込んだ反射が確認される。この反射については掘り直しや別遺構である可能性が考慮される。この堀の延伸部分は測線042付近で判断としないものとなる。

「古城絵図」を見ると南東～北西方向に堀が存在するのがわかるが、これらの反射はプロファイル図、TS平面図では明瞭な反射として捉えることはできなかった。



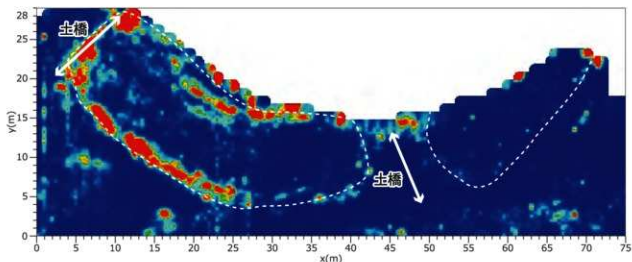
第3-3-5図 C地区 測線022 ($x = 10.5\text{m}$) プロファイル図

6. まとめ

A地区では「古城絵図」に描かれた堀・土橋の姿をプロファイル図、TS平面図で再現できた。堀は埋没過程で異物が入りこみ、その後、堀の北側から掘り直されたように見えるプロファイル図が確認される一方で、掘り直しは行われていないような堆積状況を示しているプロファイル図も確認されることから発掘調査で検証されることが期待される。第3-3-6図は深度83～100cmのTS平面図である。プロファイル図上で確認された堀、土橋の位置を書き込んでいるが、絵図にある地形を裏付けるような反射が示されている。

B地区では根の影響もあり、はっきりと当時の遺構を抽出することができなかったが、強い反射が確認された部分については遺構の可能性を考慮し、発掘調査を進めることでより多くの情報が得られることが期待される。

8:深度83～100cm



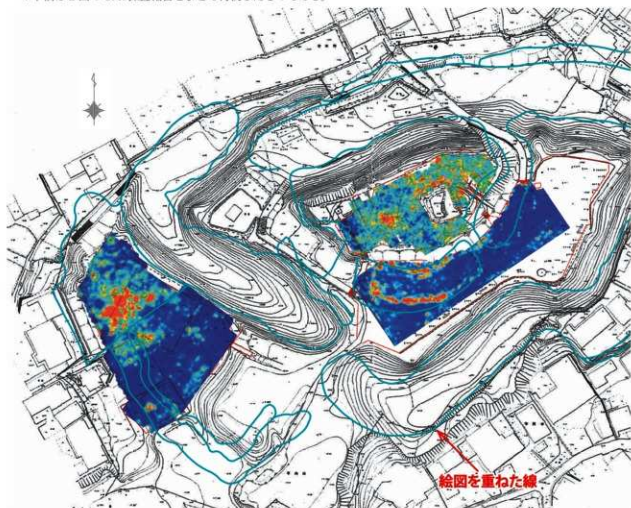
第3-3-6図 A地区 深度83～100cm TS平面図

C地区ではゲートボール場の整地面、民家の痕跡、「古城絵図」に描かれている屋敷地等の反射を認識することができた。一方で絵図に描かれている堀跡の存在については一部で可能性がある反射を見出すのみであった。プロファイルで深い落ち込みがある部分と「古城絵図」の堀部分が2ヶ所で重なることから、この反射については堀のものと想定される。また、「古城絵図」にない堀と思われる落ち込みを確認した。C地区の南東部において顕著に認められる落ち込んだ反射は、途中確認できない部分があるが測線061($x = 30.0\text{m}$)付近からやや強い範囲として確認される。その後、途切れ北西方向へと伸びるような形を示している。途中落ち込みの反射が確認されない測線041($x = 20.0\text{m}$)～測線061($x = 30.0\text{m}$)付近の安定した反射部分は、土橋状に残されていたことを示している可能性も考慮される。

地中レーダー探査は地下の変化を探ることができても、その変化が何によって生じているかを知ることには不適である。その中で今回のGPR探査は絵図資料が残されていたこともあり、A地区での堀、土橋の存在やC地区における時期の異なる遺構や建物等の痕跡を指摘することができたことは成果としてあげられる。今後、考古学的な発掘調査による実際の状況との比較や考古学の成果から改めてGPR探査結果について検証作業を進めていくことでGPR探査の精度向上につなげていくことが求められる。

今後の大高城跡を考えていく上で、非破壊調査であるGPR探査の果たす役割も大きく、また、発掘調査の参考となることが望まれる。

※本稿は2回のGPR探査報告をまとめ再校したものである。



第3-3-7 図 GPR探査結果図

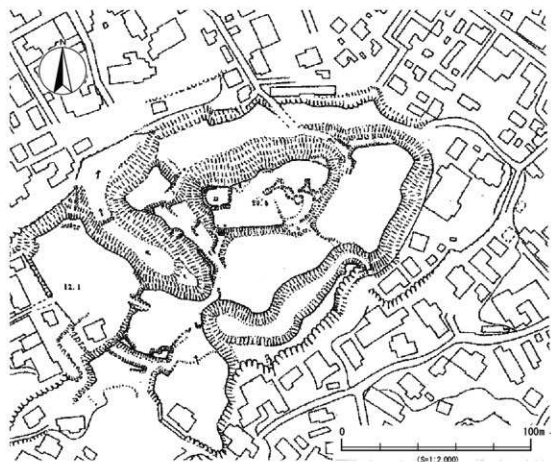
第4節 発掘調査

(1) 既往の調査

大高城跡は、永禄3(1560)年「桶狭間の戦い」に関連して広く知られていながらこれまで個別の調査研究は少なかった。大高城跡に関する記録類としては尾張藩が江戸時代前期に作成し、現在は蓬左文庫が所蔵する「知多郡大高村古城絵図」(以下、「古城絵図」)、また、江戸時代中期に編纂が盛んになった数々の地誌類があり、特に「古城絵図」については、城の構造や城周辺の地形、測量値や作成当時の土地利用状況が注記されるなど作成当時の大高城跡の状況が詳細に描かれ、戦国時代の城館構造を復元する上で重要な史料として知られている(参考図版1)。

昭和4(1929)年、愛知県史跡名勝天然記念物調査委員の若山善三郎は『愛知県史跡名勝天然記念物調査報告』第7で、大高城の城主および城の歴史的経緯に係る情報を整理し、上記の「古城絵図」と地誌類を参考に、当時の遺構の残存状況について考察を加えている。

平成3(1991)年、愛知県は『愛知県中世城館調査報告(尾張地区)』において大高城跡を含む各城館跡について地誌類の内容を整理し、明治期の地籍図に描かれた地割と土地の種別を解析し、城の位置や範囲を復元検討している。また、遠藤才文・川井啓介・鈴木正貴は「古城絵図」を含む蓬左文庫所蔵城絵図18枚について検討し、作成年代や作成意図について論じている。平成12(2000)年、高田徹は現況の



第3-4-1 図 高田徹氏作図大高城跡縄張り図(加筆・修正)

遺構から城の縄張り図を作成したうえで「古城絵図」を参考に構造について検討を行っている。曲輪とみられる5つの平坦面、また堀、土橋など付属施設について配置や規模等を記録し「古城絵図」と不整合の箇所を指摘したものである。なお、高田は岡村弘子と共同で、平成20(2008)年にも「古城絵図」に残るヘラ描きや墨線等下書き線に関する検討を行っている。なお、平成25(2013)年発行の『新修名古屋市史資料編考古2』は高田氏の調査成果を踏襲して報告している。

名古屋市教育局は、今回の発掘調査に至るまでに立会調査や試掘調査を複数回行っている。いずれもこれまで未報告であるので、以下に詳細を記す。

昭和55(1980)年、城内北西隅で公園整備工事に伴い、事前に掘削調査を行っている。遺構面は確認されていない。

平成3(1991)年には、城跡南東側で台風による擁壁崩壊に伴い復旧工事の立会調査を行っている。崩壊は造成土露出にとどまり城跡に関わる土層等は確認できなかった。

平成18(2006)年10月～平成19(2007)年4月にかけては、城跡南東に位置する擁壁部分について改修工事に伴う立会調査を実施している。施工中、戦国時代の堀と土塁と推定される痕跡が確認されている(第3-4-2図)。堀の埋土とみられる土の分布は幅約15mで、その外側に土塁の肩部がし字状に確認されている。観察では、海岸寺境内については全体的に盛土されており、堀や土塁が地下に埋没して残存すると考えられる。

平成28(2016)年7月・10月、平成29(2017)年12月に城外縁部にあたる北側で、大高城跡の北側に敷設される予定がある都市計画道路大高町線の影響確認のため試掘調査を行っている(第3-4-2図トレンチ①～⑤)。

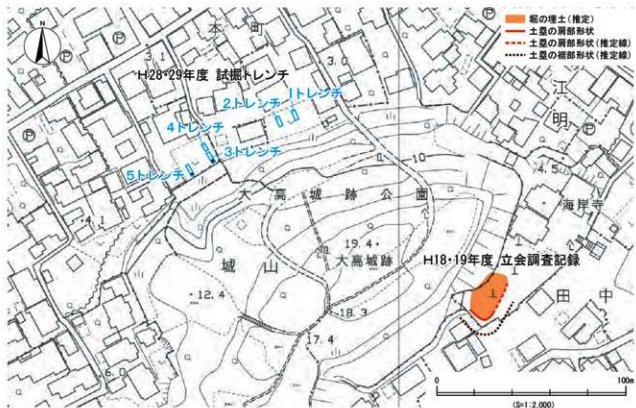
①・②は、長さ5m×幅2mの試掘坑で、城跡に伴う明確な遺構や土層は確認できなかった。①では地表面から約100cm下までが表土層(盛土)、その直下に無遺物層の黒灰色シルト層が30cm堆積し、以下は160cm下まで地山と考えられる灰白色砂層となった。②は地表面から約90～110cm下までが表土層(盛土)、その直下に無遺物層の黒灰色シルト層が約20～35cm堆積し、以下は170cm下まで地山と考えられる灰白色砂層だった。

③は、長さ6m×幅1.5mの試掘坑である。表土である橙色砂シルト(山砂)と暗灰色砂シルトが地表面から約60～80cm下まで堆積する。その下の地山と推測される青灰色砂層は、城跡側(南側)に向かって緩やかに落ち込むことが確認された。城跡に伴う堀の外側肩の可能性もある。なお、落ち込みに堆積した青灰色砂層からは遺物は出土していない。④は、③の延長線上に設定された試掘坑で長さは4mである。表土は地表面から約90～110cm下まで堆積する。

⑤は、長さ6m×幅1.2mの試掘坑で、③と同様に地山とみられる土層が城跡側(南側)に向かって落ち込むことを確認している。地表面から約60cmまで耕作土、淡黄褐色土があり、以下に遺物包含層である暗灰色シルトと淡灰色砂が互層状に堆積する。地表面から約80cm以下は地山とみられる灰色粘質土である。落ち込みは③と比較すると急角度であった。

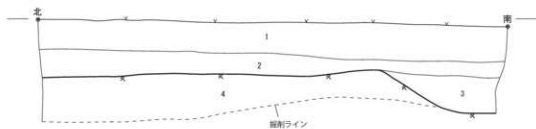
(2) 調査の経過

現在、大高城跡公園のほぼ中央に、西側に城山八幡社が立地する東西約70m南北約30mの区画がある。

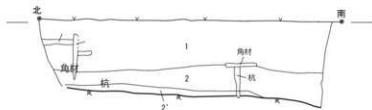


トレンチ位置図

3トレンチ(東壁)

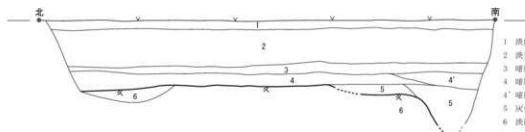


4トレンチ(東壁)



- 1 表土(腐土) 褐色砂シルト(山砂)
- 2 表土(腐土) 褐色砂シルト
- 2' 2層より有機質少ない
- 3 黒色ブロックを含む青灰色砂層 堀の部分か 遺物なし
- 4 青灰色砂層 堀山層と推定

5トレンチ(東壁)



- 1 赤灰色粘質土 堀の土
- 2 赤黄褐色土 遺構土
- 3 褐色シルト(上層) 赤灰色砂(下層) 互層状
- 4 褐色シルト(上層) 灰褐色砂
- 4' 褐色シルト 集中
- 5 灰色粘質土 粘質強い
- 6 赤灰色砂 堀山



第3-4-2図 平成18・19年度立会調査および平成28・29年度試掘調査 位置と土層断面図

この区画は標高約20mと公園内では最も高く、「古城絵図」に本丸と書かれている地点である（以下、この区画を本丸地区と呼ぶ）。本丸地区は全周にわたって崖状斜面で区切られており、この斜面部分を中心に樹木が生い茂っている。本丸地区の南側は、比高差約2.5mの斜面を挟んで、東西約100m南北約30mの広場がある。「古城絵図」によると広場の東側が二之丸で、絵図には本丸と二之丸をつなぐ土橋が描かれている。現在、広場の中央北寄りには土橋推定位置にあたりこの地表面は周囲よりやや高く、これを目安に西側が「古城絵図」に描かれる芝・堀にあたる。

令和元年度に行った地中レーダー探査では、本丸地区と広場で探査が行われた（第3章第3節を参照）。特に広場部分では堀状の強い反応が認められ、この反応と「古城絵図」に描かれた堀の外郭ラインが概ね重なることから、地下に堀が埋没している可能性が高いことがわかった。令和3年度はこの堀の有無とその規模に関わる情報を得ることを目的に広場で発掘調査を行った。なお、トレンチの軸は、令和元年度に行った地中レーダー探査で示された堀の検出ラインを目安に定めた。第2回目の令和4年度は、令和3年度調査の延長線上において堀の北側肩部分から本丸部分について発掘調査を行った。調査は、本丸部分の遺構の有無を確認すること、堀の北側肩および土塁の有無などの情報を得ること、地中レーダー探査の反射の要因を確認することを目的とした。

各調査の経過は、以下のとおりである。

○令和3年度（第1次発掘調査） 調査期間：令和4（2022）年1月17日（火）～3月11日（金）

幅3m、長さ18mのトレンチ約54㎡を調査対象とした。トレンチ内は3×3mのグリッドを設定し、北から順にA～F区とした。また、各グリッドは4分割し、北西・北東・南西・南東の順で1～4区とした。

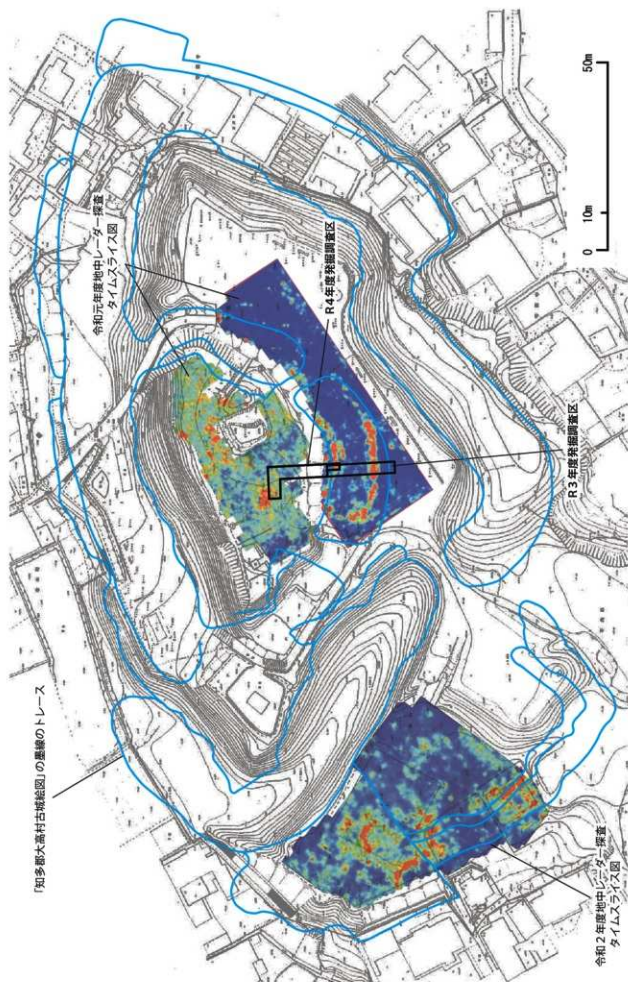
各土層の性質や厚さを確認したのち、小型重機を併用して人力で土の除去を行った。比較的早い段階で各土層がトレンチ中央（C区付近）に向かって厚く堆積することが確認され、堀状の窪みがあることが判明した。土量が多いことから、堀の南肩を確認した後は東半分を中心に掘削した。なお、北側の掘削はA区より外側に広がることがわかった。埋土を地表面から約200cm下げた時点でさらに下方へ続くことが判明し、壁面の崩落を防ぐため東壁から余地を取ってトレンチの中央付近をサブトレンチ状に設定し、この箇所をさらに坪掘り状にして埋土を掘り下げた。

なお、調査中、大高小学校の児童・教諭を対象に発掘調査見学会を行った。一方で、一般市民向けの現地説明会は新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、やむなく中止した。

○令和4年度（第2次発掘調査） 調査期間：令和5（2023）年1月16日（月）～3月10日（金）

L字状のトレンチで約65㎡を調査対象とした。西に張り出した部分をA区、南北方向の部分は3mのグリッドで北から順にB～F区とし、グリッドはA区は北西から6分割、そのほかは1回目と同様4分割にした。令和3年度調査区と重複する部分をG区とした。

本丸地区平坦面に当たるA～C区から調査を始めたところ、表土を除去すると直下で突き固めた灰白色粘土が広がることが確認された。この灰白色粘土が戦国時代の土層である可能性が高かったことから、面的な掘削は表土のみとした。壁際にはサブトレンチを設定し、土層の確認をしながら掘削を進め、サブトレンチでは地山をまで掘削を行っている。G区では、令和3年度調査で確認した堀底の再確認を目的に再精査した。現地説明会は、2月18日（土）に実施し、参加者は250名であった。



第3-4-4図 調査位置とレーダー探査成果図・知多郡大高村古城絵図墨線 重ね合わせ図

(3) 発掘調査の成果

2年度にわたる発掘調査の成果は互に関連するため、ここでは合わせて報告する。調査区は全体で見ればL字状に配置したもので、長軸方向約33m、短軸方向約8mに及んだ。なお、樹木の影響により一部未掘部分がある。

調査の結果、2つの曲輪と堀を確認した。北側の曲輪は「古城絵図」の示す本丸であることから、以下は本丸として報告する。堀を挟み、南側の曲輪は帯曲輪と見られる。なお、出土遺物は総数コンテナ20箱で、多くは堀埋土から出土した遺物である。

基本層序を堆積順に概観すると、

〈本丸〉上から

表土（暗灰黄色土）

中世包含層A（主体は灰白色粘土）

中世包含層B（灰黄褐色土）

弥生包含層（オリーブ褐色土）

基盤層：地山（明橙色粘土や灰白色粘土）

〈堀〉下から

基盤層：地山（青灰～灰白色粘土）

土層Ⅰ（戦国期、暗オリーブ灰色～灰色粘土・砂シルト・オリーブ黒色砂シルト）

土層Ⅱ（江戸期、主体は灰色粘土）

土層Ⅲ（江戸期、黄灰色土～灰白色土）

土層Ⅳ（近代、黄橙色～灰白色粘土）

土層Ⅴ（昭和～現代）

である。なお、帯曲輪は、土層Ⅴ（昭和～現代）を除去すると明橙色粘土の地山となる。詳細は後述するが、本丸で確認された中世包含層Aは盛土で、堀埋土の土層Ⅱの大部分は中世包含層Aがその供給源と考えられる。

本丸

本丸部分の面的な掘削は中世包含層Aの上面で留めた。以下の土層状況は、壁際に設置したサブトレンチで確認した。

中世包含層A

表土直下で確認された盛土層で、約10～40cmの厚みがある。しまりが非常に強い層である。平面では、南北方向で少なくとも9.9mの範囲で確認できた。構成する土は灰白色粘土が主体で、灰黄褐色粘土や灰白色砂質土などが混じる。なお、調査区の西壁では粘土層・砂層・粘土層と互層になっており、部分的には版築状に造成したとみられる（第3-4-8図、SP2-1の3～7層）。

中世包含層Aの上面で最も高いところは標高20.55m付近を測った。この盛土を掘り込む柱六列は確認できなかったが、検出面において砂利が集中する範囲3か所と、石の分布が認められた。砂利や石の上

面は標高 20.3～20.4m 付近とほぼ同一で、意図的に高さを揃えているようにみえるため礎石や地固めの砂利として利用した可能性がある。ただし、中世包含層 A を覆っていた表土は場所によっては 5cm 程度と非常に薄く、中世包含層 A は本来はさらに高い位置まで盛られていたと考える方が自然であり、検出面＝一時的な地表面とは考えにくい。

出土した遺物はいずれも小破片で、図示したものは 3 点である（第 3-4-10 図）。盛土や版築時に、後述する中世包含層 B から混入したと思われる遺物が多い。14 世紀末～15 世紀前半頃の山茶碗片や古瀬戸製品などが含まれており、また、それより新しい時期に比定される遺物は全く入らないため、本丸の盛土は 15 世紀以降である（なお、以下に記述する通り、中世包含層 B の状況から 15 世紀後半以降が想定される）。

中世包含層 A を構成する灰白色粘土と、本丸南側堀の調査時に標高約 17.6m 以下で確認できた地山の灰白色粘土は似通っていた。堀は規模が大きく、構築時に排出される土もかなりの土量だったと推測されるが、この排出土を本丸の盛土として利用した可能性がある。

中世包含層 B

中世包含層 B は中世包含層 A に覆われた土層で、厚いところで 15cm 程度が残存する。灰黄褐色土である。出土した遺物はいずれも小破片で、中世包含層 B は整地された土であろう。図示したものは 3 点である。14 世紀末～15 世紀前半頃に比定されるものが複数あり、また、それより新しい時期のものは入らず、中世包含層 B と中世包含層 A に含まれる遺物に大きな時期差は認められない。一方で、中世包含層 B にはこの層に構築するピットが複数確認できる（第 3-4-9 図 SP8-11 の 10・11 層を埋土にするピット、第 3-4-9 図・SP7-6 の 3 層を埋土にするピット）。中世包含層 B を地表面とした期間が一定程度あったと推測される。なお、各ピットは上位が中世包含層 A で覆われる状況にある。中世包含層 B を地表とした時期を出土遺物を踏まえ 15 世紀前半頃と考えると、それを中世包含層 A で覆う造成の時期は 15 世紀後半以降が想定される。

また、中世包含層 B で整地される以前にも、ピットが構築されている。調査区の東壁で、弥生包含層や地山に構築するピットが確認できる（第 3-4-9 図 SP7-6 の 5・6 層を埋土にするピットなど）。調査区全体で山茶碗が比較的多く出土することから、時期は 12 世紀後半～14 世紀頃を想定しておきたい。

弥生包含層や基盤層

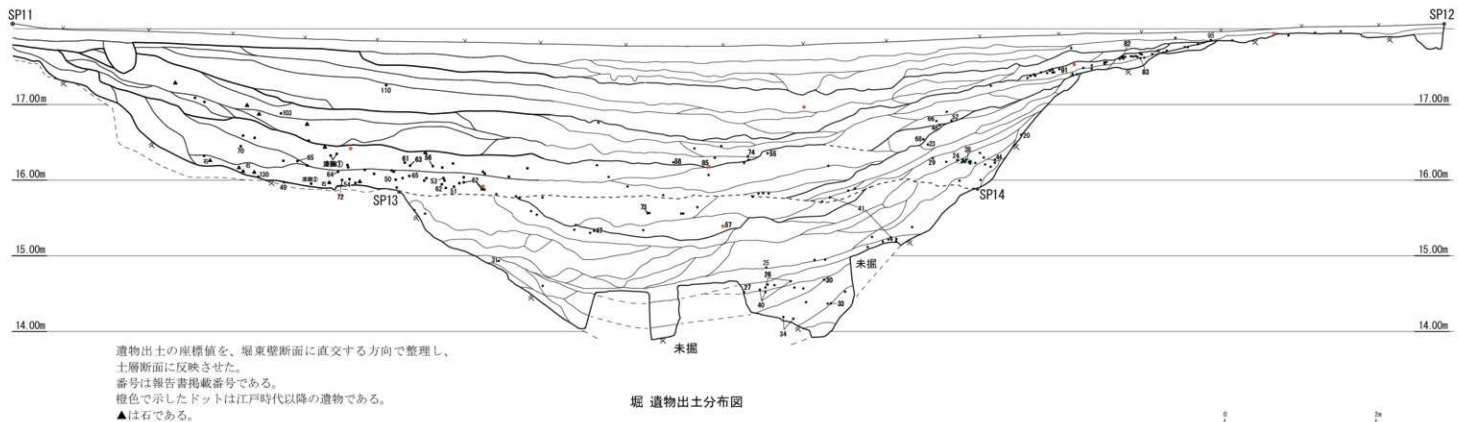
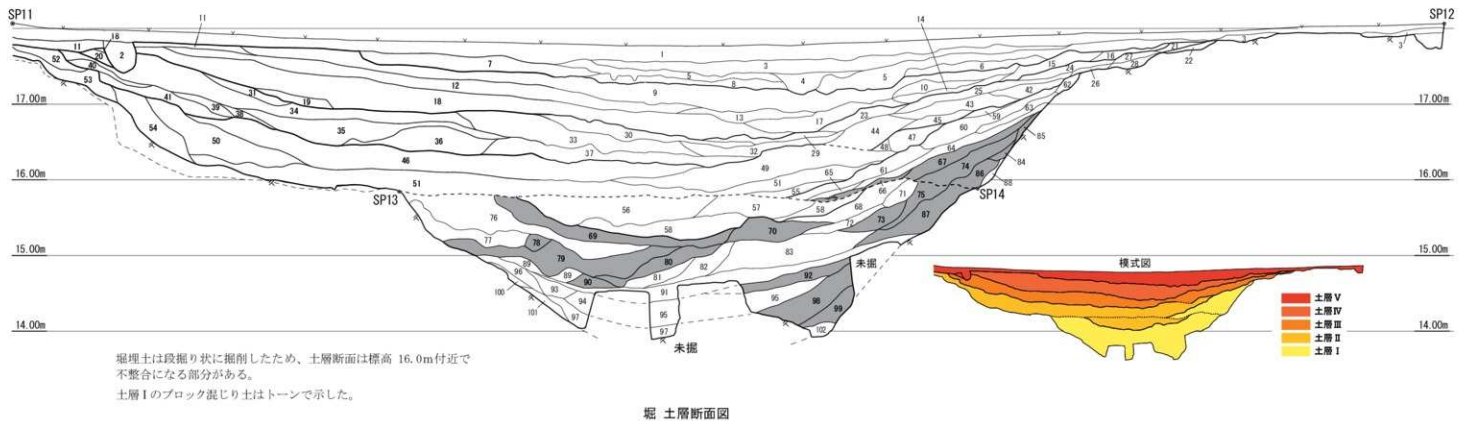
本丸平坦面では、基盤層は標高 20.0m 付近で確認された。地山面では、弥生時代中期後葉～末の住居跡とみられる遺構が確認されている（第 3-4-9 図 SP8-11 の 16～20 層）。また、地山直上で弥生土器が出土している。

地山は現在の状況と同じように斜面が南に向かって下がり、傾斜部分に弥生包含層、中世包含層 B が厚く堆積する。

また、調査地点北端から南に約 10m 地点より、地山は凹凸状に斜面をなし本丸南側堀跡につながるが、この凹凸に中世期に関連づけられる痕跡は確認



第 3-4-1 写真 弥生土器出土状況（南西より）

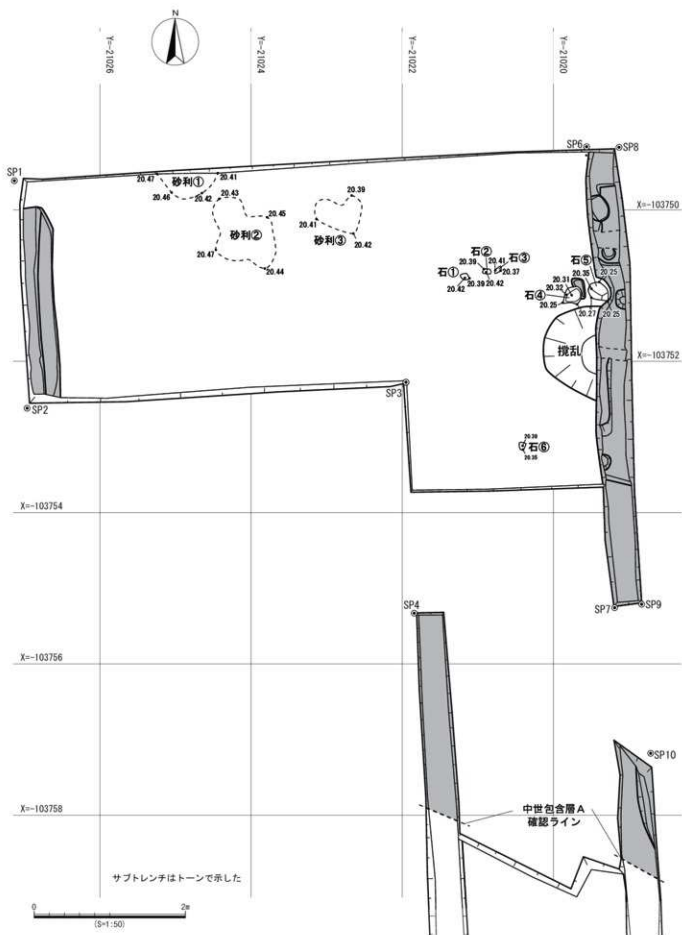


第 3-4-6 図 堀土層断面図および遺物出土分布図

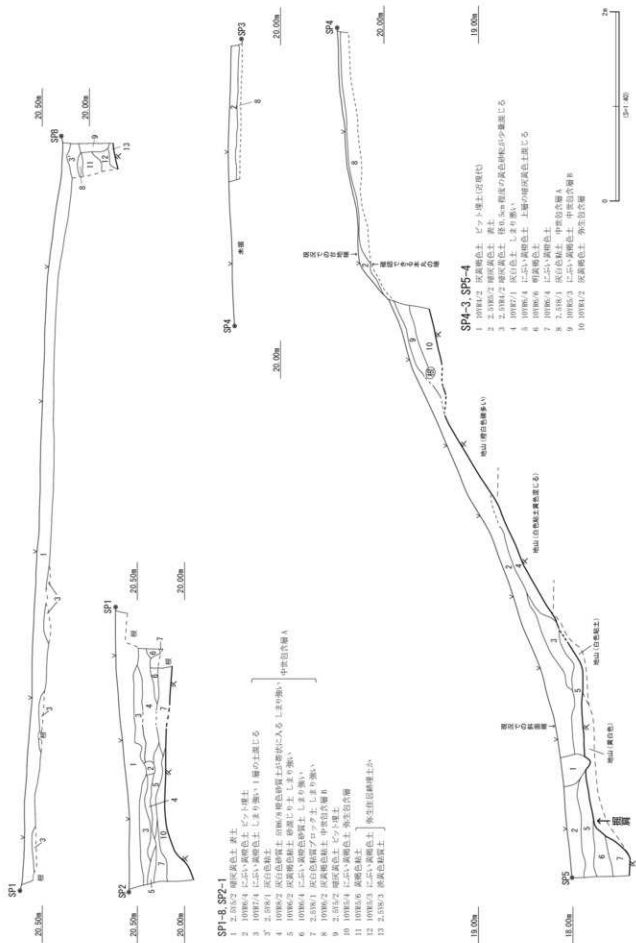
第3-4-1表 掘土層断面(第3-4-6図)土層観察表

1	2.5Y5/2 暗灰黄色土 表土
2	2.5Y8/6 黄色土 根腐乱 しまり悪い
3	5Y6/1 ~ 5/1 灰白～灰白色砂質土 7.5YR7/4 に近い褐色土ブロック混 5層より粘質あり
4	10YR8/1 ~ 8/2 灰白～灰にふい、黄褐色砂質土に 10YR/1 灰白色ブロック混 礫 1 ~ 5cm混
5	5Y6/1 ~ 5/1 灰白～灰白色砂質土 炭化物粒 0.5 ~ 1cm多混 地山白色ブロック極少混 7・8層より暗い色
6	2.5Y7/2 ~ 6/2 灰黄色砂質土 礫 0.5 ~ 1cm少混
7	10YR5/4 に近い、黄褐色土
8	10YR8/3 浅黄褐色砂質土 礫 0.5 ~ 1cm少混 地山白色ブロック少混
9	7.5YR8/2 灰白色粘質土に 10YR/1 灰白色土ブロック多混 5YR7/6 褐色粘土粒少混 しまり悪い
10	2.5Y6/3 に近い、黄色砂質土
11	10YR7/4 に近い、黄褐色土 0.5cm程度の 10YR7/8 黄褐色土含む
12	7.5YR6/6 褐色砂質土 砂粒多い 10YR/1 灰白色土小ブロック少混 風化礫層片よく入る
13	7.5YR6/1 暗灰色粘質土に 7.5YR6/6 褐色土多混 礫 1cm混
14	2.5Y5/2 暗灰黄色粘質土
15	2.5Y6/3 ~ 6/4 に近い、黄色砂質土 礫 1cm混 しまりやや良い
16	7.5YR7/4 に近い、褐色砂質土
17	10YR5/1 暗灰色粘質土に 10YR7/3 に近い、黄褐色土ブロック混
18	7.5YR8/2 灰白色粘質土に 10YR/1 灰白色土ブロック多混 5YR7/6 褐色粘土粒少混 しまり悪い 9層によく混る
19	18層より混るがより白色味が強い、下部層に鉄分沈着あり 10YR/1 灰白色土ブロックが 18層より多く混ざる
20	2.5Y5/4 黄褐色土
21	10YR6/4 に近い、黄褐色砂質土
22	10YR7/6 明黄褐色粘質土に 10YR5/1 暗灰色土ブロック混 礫 1cm少混
23	2.5Y7/1 灰白色粘質土 しまりやや悪い 礫 5cm混 29層より砂粒多い
24	2.5Y6/3 に近い、黄色砂質土に礫 0.5 ~ 2cm少混
25	2.5Y5/2 暗灰黄色砂質土 礫 2cm多混
26	28層によく混るが礫入らない
27	2.5Y6/3 に近い、黄色砂質土に 1 ~ 5cm礫多混 砂粒層
28	2.5Y6/3 に近い、黄色砂質土に 2.5Y5/2 暗灰黄色土ブロック混 27層より礫少混 砂粒層
29	2.5Y6/1 ~ 5/1 黄灰色粘質土 砂粒混ざる
30	2.5Y7/2 ~ 7/1 灰黄色～灰白色砂質土 礫 1 ~ 3cm混 33層より砂質強い
31	2.5Y7/2 灰黄色土
32	2.5Y6/1 黄灰色粘質土 33層より粘質強い
33	2.5Y7/2 灰黄色砂質土 しまりやや悪い 礫 1 ~ 3cm混 鉄分沈着少量
34	10YR7/2 に近い、黄褐色土
35	7.5YR/1 灰白色粘土 鉄分沈着あり
36	2.5Y6/1 黄灰色粘土 黄褐色粘土・砂粒・礫 2cm混
37	2.5Y6/1 ~ 6/2 灰黄～灰黄色粘土 砂粒目立つ 礫 0.5 ~ 5cmよく入る
38	10YR8/3 浅黄褐色土 しまり良い
39	10YR7/1 灰白色砂質土
40	2.5Y6/3 に近い、黄色砂質土 しまり良い
41	2.5YR/1 灰白色砂質土 しまり良い
42	2.5Y6/2 灰黄色砂質土 礫 0.5 ~ 2cm混
43	2.5Y6/3 に近い、黄色砂質土に 10Y6/1 灰白色土ブロック少混
44	10Y6/1 灰白色粘土 鉄分沈着多 しまりなし
45	10Y6/1 灰白色粘土に 2.5Y7/2 灰黄色砂質土入る
46	7.5Y6/1 灰白色粘土 鉄分沈着あり
47	10Y6/1 灰白色シルト 礫 5cm混 砂質あり
48	10Y6/1 灰白色粘土 鉄分沈着多 やや均質
49	10Y5/1 ~ 4/1 灰白色粘土 鉄分沈着あり 46層より粘土質強い
50	7.5Y7/1 灰白色砂質土
51	7.5Y6/1 灰白色粘土 46・49層より少ないが鉄分沈着あり
52	10YR5/8 黄褐色砂質土 茶色・白色砂粒混る
53	10YR8/8 黄褐色ブロック土 しまり悪い
54	7.5Y7/1 灰白色粘質土 しまりやや悪い
55	10Y4/1 ~ 3/1 灰白～オリーブ黒色粘土 鉄分沈着

56	10YR6/1 暗灰色粘土 鉄分沈着多 潜水時の隙(N3/1 暗灰色)が少なくとも 10 以上入る
57	10YR5/1 暗灰色粘土 鉄分沈着少ない
58	10Y3/1 灰白色粘土
59	10Y6/1 ~ 5/1 灰白色粘土 60 層よりやや暗い
60	10Y6/1 灰白色シルト 粘質強い しまりやや悪い
61	7.5YR6/1 灰白色粘土 粘土質強い 鉄分沈着少量あり
62	10Y6/1 砂質土に 2.5Y7/6 明黄褐色土混 礫混
63	10Y6/1 ~ 7/1 灰白～灰白色粘質土 しまりやや悪い
64	7.5Y6/1 灰白色粘土に細粒砂入る
65	10Y3/1 灰白色粘土
66	10Y5/1 灰白色粘土に 10YR/1 灰白色粘土ブロック混 10Y3/1 オリーブ黒色土ブロック混
67	10Y5/1 灰白色粘質土に 10YR/1 ~ 8/2 灰白色土ブロックやや多混 炭化物粒 0.5 ~ 1cm少混
68	7.5YR8/1 灰白色シルトに 10Y4/1 灰白色土少混
69	10Y3/1 灰白色粘土に 10Y7/2 灰白色砂ブロック混ざる
70	10Y4/1 ~ 5/1 灰白色粘土に 10Y7/2 灰白色砂ブロック混ざる
71	10Y6/1 灰白色粘土
72	10Y3/1 オリーブ黄色砂質土
73	10Y6/1 灰白色粘土に 10Y3/1 オリーブ黒色砂多混
74	10Y5/1 灰白色粘土に 10YR/1 ~ 8/2 灰白色土大ブロック多混 67 層より粘質強い
75	10Y3/1 オリーブ黒色シルト(シルト質)多に 10Y7/1 灰白色粘土ブロック混ざる
76	10Y7/1 灰白色シルト 鉄分沈着あり
77	7.5YR4/1 暗灰色砂シルト
78	10Y7/1 灰白色粘土に 7.5YR4/1 暗灰色土ブロックが混ざる 粘土質強い
79	10Y7/1 灰白色シルトに 10Y7/2 灰白色土ブロックが混ざる シルト質強い
80	7.5YR4/1 ~ 3/1 暗灰色～黒褐色シルトに 10Y7/1 灰白色シルトブロック混ざる
81	7.5Y6/1 灰白色シルト層 シルト質強い
82	10YR/1 ~ 7/1 灰白色シルト 砂っぽさ強い 鉄分沈着あり
83	10YR/1 ~ 7/1 灰白色シルト 粘質強い 砂は粘土質
84	10Y3/1 オリーブ黒色粘土 礫混 7.5Y7/1 灰白色土ブロック混ざる
85	7.5YR/1 ~ 8/2 灰白色粘土に 10Y6/1 灰白色土ブロック混ざる
86	10Y4/1 灰白色粘質土 礫 0.5 ~ 2cmやや多混 7.5Y7/1 灰白色土ブロック混ざる
87	10Y4/1 ~ 3/1 灰白～オリーブ黒色シルト 10YR/1 灰白色粘土ブロック少し混ざる
88	7.5Y7/1 灰白色シルトに 10Y3/1 オリーブ黒色粘土質混ざる
89	10Y6/1 ~ 5/1 灰白色シルト 砂っぽさ強い
90	10Y6/1 ~ 5/1 灰白色粘土に 2.5Y7/6 明黄褐色粘土ブロック混ざる 礫 1cm入る
91	10Y3/1 オリーブ黒色シルト しまりややなし
92	7.5Y7/1 明黄褐色シルトに 10YR/1 灰白色粘土ブロック混ざる 砂は粘土質強い
93	7.5Y6/1 暗灰色粘土と 7.5Y7/1 礫砂が互層になる
94	7.5Y5/1 暗灰色粘土 しまりなし
95	7.5Y5/1 ~ 4/1 暗灰色～暗褐色粘土
96	10YR/1 灰白色砂に 2.5Y4/1 暗オリーブ灰白色粘土少混 5YR6/6 褐色混(鉄分沈着)
97	7.5Y5/3 1 暗褐色粘土
98	7.5Y7/1 明黄褐色砂に 10Y3/1 ~ 2/1 オリーブ黒色・黒色大ブロック多混
99	98 層に混るが砂質強い
100	10YR/1 灰白色砂に 2.5Y4/1 暗オリーブ灰白色粘土混ざる
101	2.5Y4/1 暗オリーブ灰白色粘土に 7.5YR6/6 褐色砂混ざる
102	7.5Y7/1 明黄褐色シルト

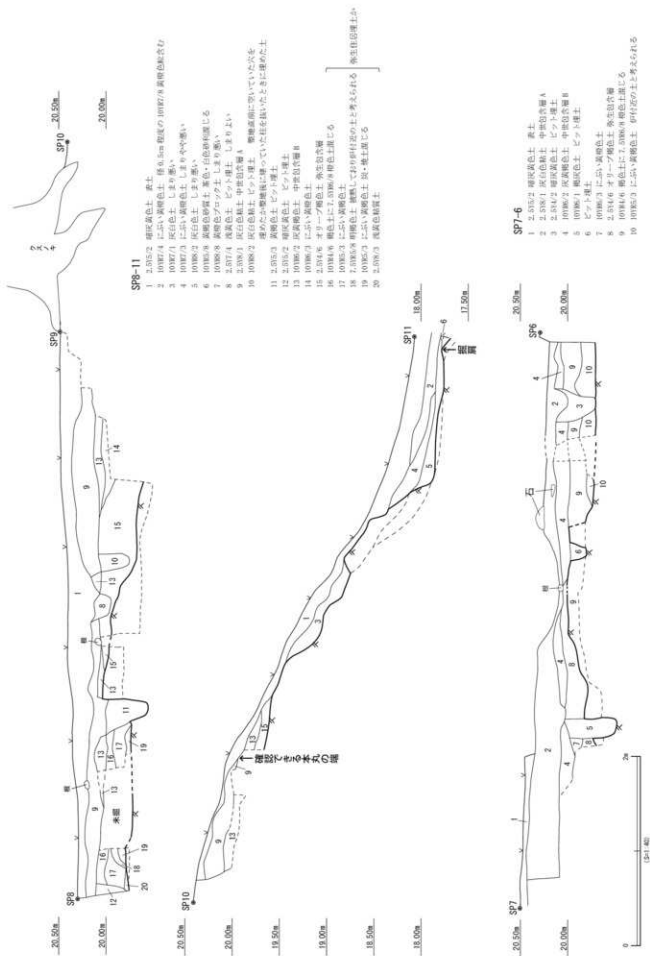


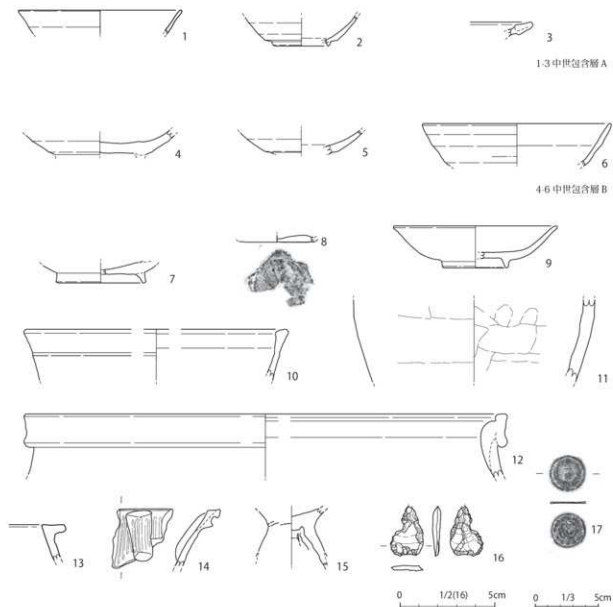
第 3-4-7 図 本丸礫や石の分布状況



第 3-4-8 図 本丸北壁・西壁土層断面図

第 3-4-9 図 本丸東壁土層断面図





第3-4-10図 本丸出土遺物

されず、自然作用によるものと判断した。南に約13m地点付近で確認された2.2mほどの平坦面は人為的な造作と思われるが、堀埋土を切っており堀構築時以降の造作と判断した。

表土などから出土した遺物は、中世包含層A・Bの時期に比定されるもののほか、江戸後期から近代の遺物が出土した。第3-4-10図の17は、明治19年発行の一銭銅貨である。また、弥生土器片も出土している。

堀

堀は、掘方の最上部については後世の影響を受けているが、幅約15m、深さは4m以上を測る。埋土は作業工程の都合上、東半分を中心に掘り下げた。また、安全管理上、段堀りとするため、標高16.0m付近以下は、東壁から余地を取り中央付近をサブトレンチ状に掘削した。掘削深度が深くなったことから、

さらにサブトレレンチ内で坪掘りした。

後述するように、堀底を埋めた土（土層Ⅰ）には16世紀半ば頃に時期比定される遺物が含まれる。この頃まで堀底が開いた状態だったことから、堀は永禄3（1560）年の「桶狭間の戦い」時には機能していたとみられる。堀の掘削時期ははっきりしないが、機能していた時期から推定すると16世紀代と考えるのが妥当であろう。なお、明確な掘り直しの痕跡は確認できなかった。本丸の中世包含層Aは15世紀後半以降の盛土と推測しており、中世包含層Aがもとは堀構築時の排出土であったとしても矛盾はない。

断面形状は葉研堀である。帯曲輪側にあたる南側肩は、角度約50度を測り、特に上方では60度ほどと急傾斜である。一方、本丸側（北側）は、深さ半分ほどのところ（標高約16.0m付近）において、傾斜がかなり緩く平坦に近い面が確認できる。幅1.8mほどである。この面を挟み上位部分の肩角度は約25度、下位部分の肩角度は約35～40度で、南側に比べ緩やかである。

堀の埋土は、大きく5つに分けられる。なお、特に土層Ⅲ（江戸期、黄灰色土～灰白色土）以下は、出土位置がわかる遺物ではできる限り座標で記録し、取り上げた。なお、第3-4-6図下で示した遺物出土分布図は、3次元の座標値を東壁断面に直交する方向で整理・調整し、土層断面に載せたものである。つまり土層は見通し図であり、取り上げ位置と土層番号が正確に整合するとは限らないが、ドットと土層Ⅰ～Ⅴの大分類は概ね対応し、土層ごとに遺物出土位置の傾向が表れている。また、第3-4-6図上方では土層Ⅰは、南側の標高16.0m付近で分層線に段差があって不自然に見えるが、段掘り状に掘った影響が反映したもので、実際は自然な土層堆積である。

土層Ⅰ

埋土の最下層である。暗オリーブ灰色～灰色粘土・砂シルト・オリーブ黒色砂シルトを中心とした土で、ブロック土が混ざる。土塊の大きさや割合などで細かく分層しているが、基本的に一括の土層である。

堀下方のV字状部分の全体を覆うが、南側肩を高い位置から覆っている。遺物の出土も南側が中心で、土層Ⅰの下位で遺物出土ドットが集散的に落ちる様子が確認でき、主に帯曲輪側から不要になった土器類とともに人為的に埋めた土層と考えられる。

土層Ⅰから出土した遺物を第3-4-11・12図に示した。21は、15世紀代とみられる山茶碗の碗。23～26は古瀬戸製品である。23・24は緑釉小皿で、後Ⅰ（古）期（14世紀後葉）と後Ⅳ（古）期（15世紀半ば）の製品。23は二次被熱している。26は後Ⅳ（新）期（15世紀後葉頃）の腰締めめの瓶子で、鉄軸が流し掛けされる。27～29は大窯製品で16世紀前葉頃に比定されるもの。27は鉄軸が厚く掛かる天目茶碗。大窯第1段階後半に比定される。28は大窯第1段階の擂鉢だが、かなり使用され内面はほぼ摩滅し、二次被熱している。29は上端が上に伸び大窯第1段階後半とみられる擂鉢である。30・31は常滑製品で、甕胴部片であるが常滑編年10型式（15世紀後半）に比定される。32～36は土器器皿である。ロクロ成形と手づくねのものが見られるが多くがかなり小片である。39は14世紀後半頃の羽釜。胎土はやや緻密で、鯛が上方に短く突出するもの。40は内耳鍋で、体部下方向の稜線が明確で15世紀後葉から16世紀前葉頃のものと思われる。第3章第5節掲載の付着した煤の自然科学分析では15世紀中～16世紀前半および16世紀後半～17世紀前半の暦年代が示されており、矛盾しない。41は茶釜形の羽釜であるが、土層Ⅰ内の上位層で出土したものと下位層で出土したものが接合した。口縁部は内側に傾きつつも直立し、比較的高さがある。下半部は欠損してわからないが16世紀半ば頃に比定される。43

は円盤状の礫で、石飛礫の可能性はある。黒色片岩で大高城跡周辺では採集できない岩種であり、他地域から持ち込まれたものと推測する。44は筭。全形がほぼ残るが、魚々子彫の中央に小孔が穿たれ、飾具が付いていたとみられる。

以上の通り、出土遺物は15世紀半ばから16世紀代のものが中心で、最も新しいもので16世紀半ば頃のものである。なお、実測に耐えられない小破片についても、1560年代に成立するとされる大窯第3段階および4段階の遺物は確認されなかった。

土層Ⅱ

土層Ⅰを覆うように堆積する灰色粘土が主体の土層である。

下位層の55～58層は上位層よりも褐色や黒味が強く、土層Ⅰが自然の作用により二次的に移動して再堆積したものと推測される。56層は、雨水などの影響を受け滞水したラインが10本以上認められ、標高16m付近が地表だった時期があったとみられる。上位層の灰色粘土は約60cm程度の厚さで、本丸で確認された中世包含層Aが崩れたもの（または崩されたもの）と考えられる。

遺物は、本丸側（北側）の傾斜がかなり緩やかになる面周辺で集中する様子が確認できる。内耳鍋は特にこの周辺で多く出土し、本丸から転がり落ちて堀内で割れたような出土状況であった。土層Ⅱ全体で見ると、垂直方向での偏りは少なく満遍なく出土する傾向にある。また、本丸側で石も出土する（第3-4-6図下▲マーク）。

土層Ⅱから出土した遺物は第3-4-13・14図である。47は、15世紀代とみられる山茶碗。48・49は古瀬戸製品で、48は播鉢で15世紀後葉頃のもの。49は後1期（14世紀後葉頃）の水滴で、外面は底近くまで灰釉が掛かる。50～56は大窯製品で16世紀前葉～中葉のもの。50は大窯第2段階前半に比定される天目茶碗で、二次被熱している。51は天目茶碗を転用した加工円盤で、時期は大窯第1段階。52は大窯第2段階の徳利である。器壁は薄く丁寧な作りで、鉄釉・灰釉が流し掛けられるもの。53～55は播鉢で大窯第1段階から大窯第2段階前半に比定される。56は有耳壺の胴部と見られ、外面は鉄釉。二次被熱する。59は龍泉窯系の青磁筒形碗で、15～16世紀頃のもの。60はロクロ土師器皿で、口縁にタールが付着する。燈明皿として使われたものであろう。61～67は16世紀前半から半ば頃の内耳鍋である。68は直線的に立ち上がる焙烙鍋の形状に中空の柄が付くが、ススの付着は認められなかった。71～73は、下位層で出土した木製品である。73は脚付きの俎板と考えられ、全体に刻み目が残る。樹種同定の結果はマツ属複雑管束亜属である。71は筭、72はヘラ状加工品で、どちらもヒノキ製である。また、第3章第4節掲載の自然科学分析した赤色塗膜はこの層から出土したものである（第3-4-6図下漆膜①）。素地が分解されて判断が難しいが、漆碗と推測する。

なお、57は江戸時代前期の瀬戸美濃窯製品の菊皿である。土層Ⅱ最下層58層のレベルで出土した。土層Ⅱでは、ほかにも常滑窯



第3-4-2写真 内耳鍋(62)出土状況(北から)

産の甕胴部の小破片で江戸期と比定されるものが数点出土している。時期比定できる資料が少数で、土層Ⅱの堆積時期は明確ではないが、現状では18世紀以降のものが認められないため、江戸時代前期頃と判断する。

また、灰色粘土が人為的な堆積か、自然崩落によるものかについては判断材料が少ない。現状では、供給源と推測される本丸・中世包含層Aが非常に堅くしまった層であり、堀内で60cm程度と比較的厚く全体に堆積する状況から、自然崩落によるものとは考えにくい印象である。人為的または自然崩落のどちらの場合でも、堀底が土層Ⅰで埋まったのち江戸時代に至るまでの間、本丸は比較的状态を保ったままだったと推測される。

以上の通り、数点の江戸期のものを除くと、出土遺物の時期は土層Ⅰと差がなく、16世紀紀半ばまでのものが中心である。小破片についても大窯第3・4段階に比定される遺物は確認されなかった。

土層Ⅲ～土層Ⅴ

土層Ⅲは、堀の中位、窪み全体に堆積する層で、灰黄色の砂質土・粘質土・シルトなどが入り混じり、礫が比較的良好に混入する。なお南側肩は特に礫が多く混入し調査時「砂利層」とした。江戸時代中期頃から近代に至るまでに自然堆積した層とみられる。

図化できた出土遺物は、第3-4-16図である。土層Ⅰ・Ⅱと同様、15世紀代から16世紀半ば頃までに時期比定されるものが中心である。103は粘板岩製の硯で、本丸側から出土したもので戦国期の可能性がある。残存が5.3×4.2cmと小さいが完形でもそれほど大きくない品であろう。93・94は江戸時代前期の瀬戸美濃製品。94は登窯第2小期（17世紀第2四半世紀）に比定される志野丸皿。95は登窯5・6小期（17世紀末～18世紀初め頃）に該当する播鉢。

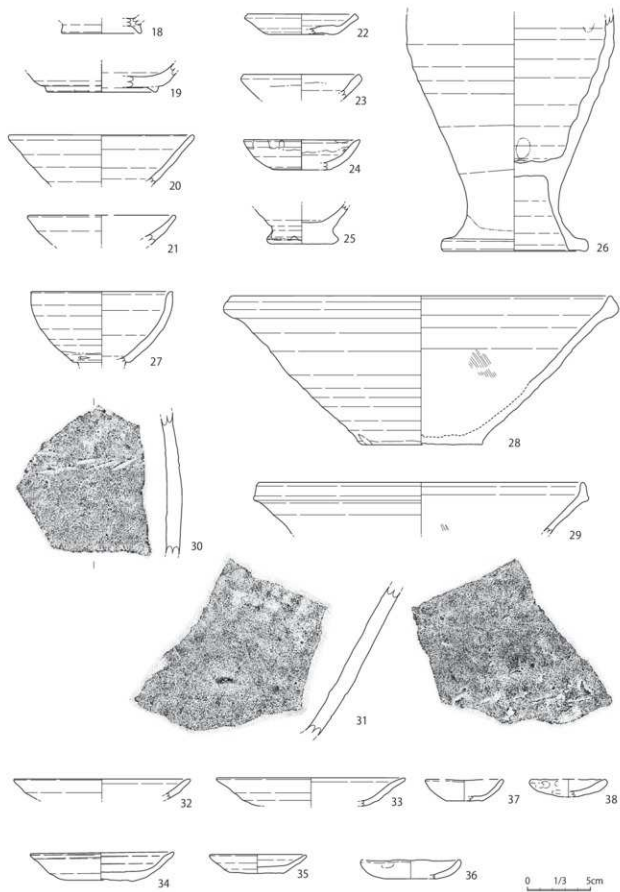
土層Ⅳは地山由来の橙色粘土・灰白色粘土で、明治期に民間に払い下げされ茶席や山荘が建てられる中で堀上位の窪みを比較的短い期間で埋めた層とみられる。なお、上位の土層Ⅴでは明治30年代の銅板転写の碗（第3-4-16図124）が、また、後述する帯曲輪部分で検出されたSK1から明治39年設立の星製菓製ガラス菓瓶（第3-4-16図130）などが出土している。

土層Ⅴは、図化していないが1980年代のペプシ瓶などが入り、史跡指定の前後から公園として利用される現代までの堆積層である。

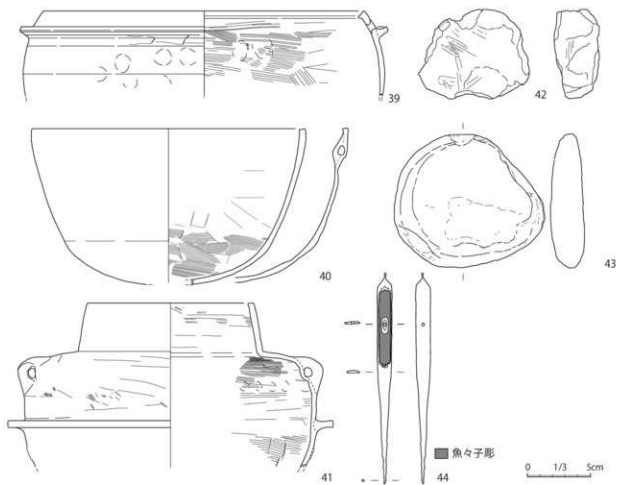
帯曲輪

堀より南側で確認された平坦面、堀と同じ方向に伸びる細長い曲輪である。今回の調査では、南北方向約5mの範囲を確認したのみであるが、現状の地形から推測すると短辺（南北方向）15～20m程度、長辺（東西方向）約100mの曲輪であろう。

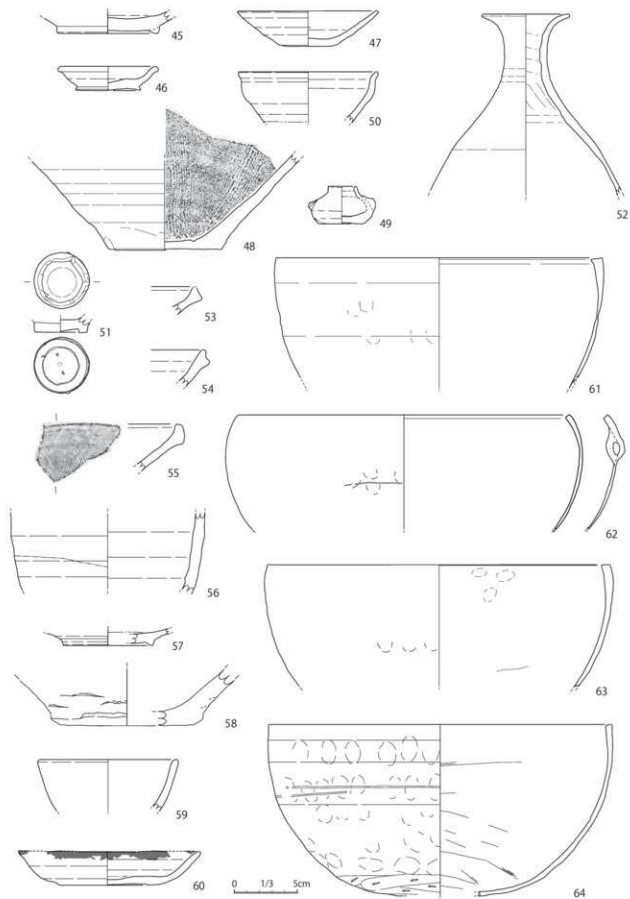
10cm程度の表土直下で明橙色粘土の地山が広がり、遺物包含層はない。地山面ではピットが複数検出された。SK2、SK5とP4を除き埋土は10YR5/1～6/1の褐灰色粘質土で、山茶碗を中心とした中世遺物が含まれるものの小破片であり、明確に中世期の遺構と判断できるものはなかった。なお、SK2、SK5の埋土は7.5YR3/1～4/1の褐灰色～黒褐色粘質土で、P4は埋土が7.5YR2/1黒色粘質土である。弥生土器片が混じり、本丸より一段低い帯曲輪部分でも中世城館が築かれる以前には弥生時代の竪穴住居などが広がっていたことが推測される。



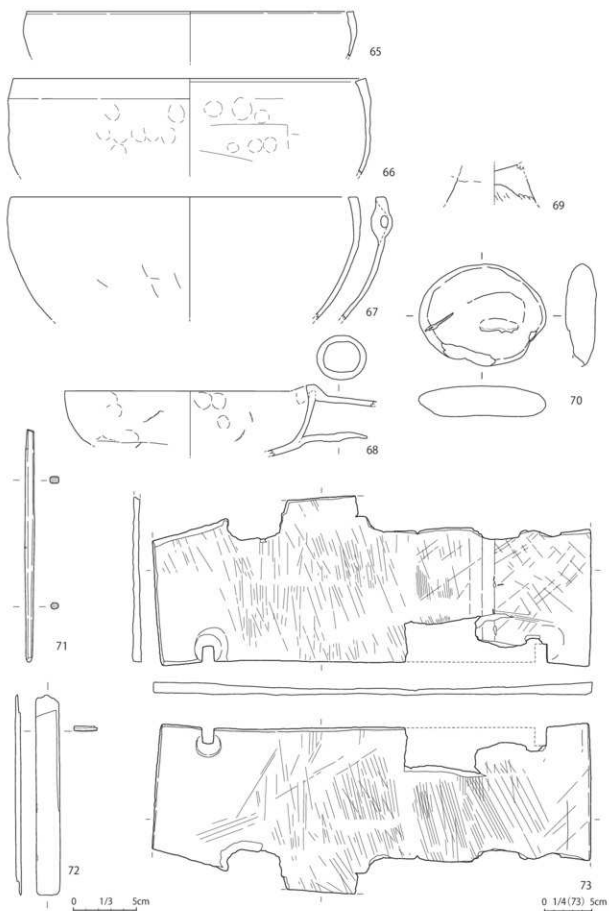
第 3-4-11 图 堀土層 I 出土遺物 (1)



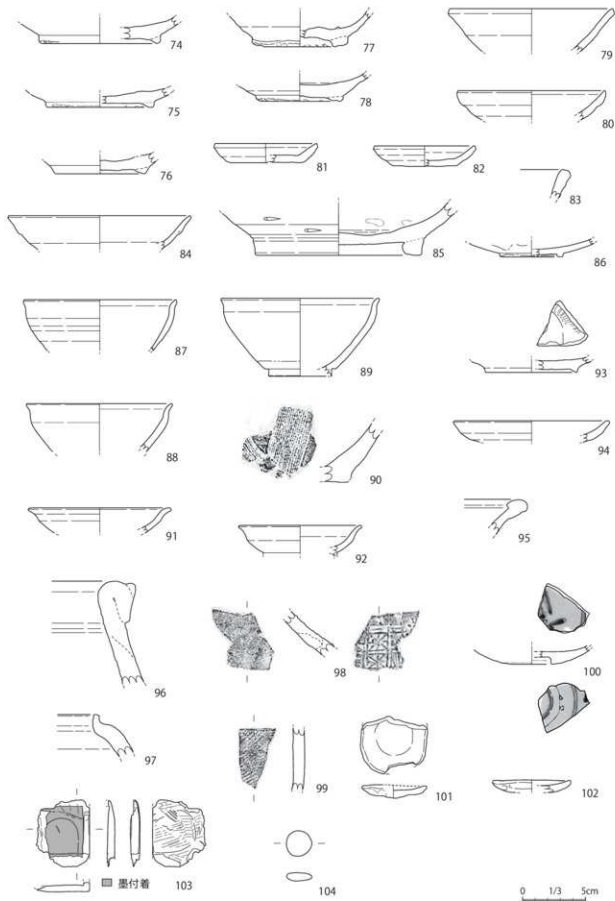
第 3-4-12 図 堀土層 I 出土遺物 (2)



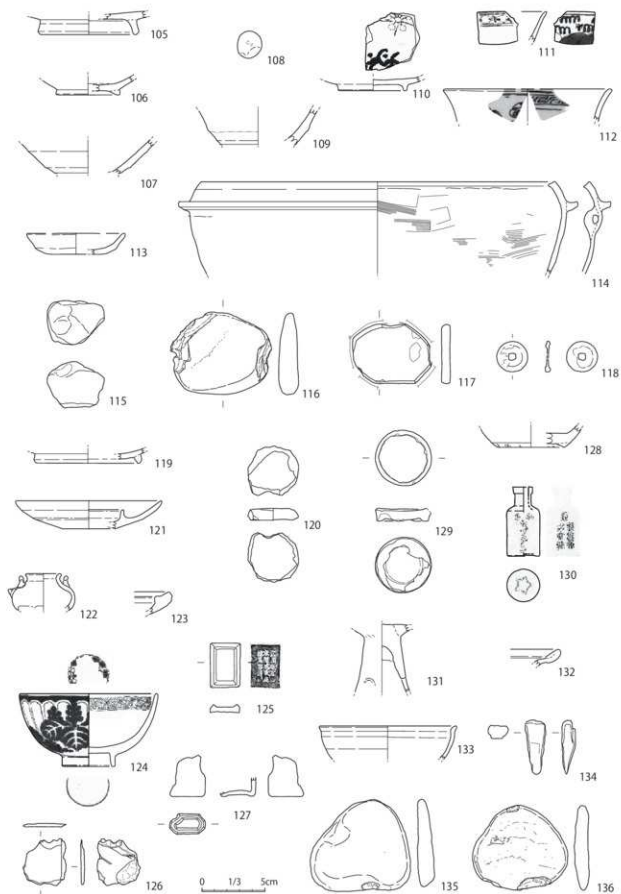
第 3-4-13 图 堀土層 II 出土遺物 (1)



第 3-4-14 图 堀土層 II 出土遺物 (2)



第 3-4-15 図 堀土層Ⅲ出土遺物



第3-4-16図 堀土層IVほか出土遺物

第 3-4-2 表 遺物観察表

観測 番号	区分	群種	遺構		位置 (cm)			築成	地土	色調	残存率	調査	備考
			調査区・グリッド	遺構名・単位層	口徑	直径	高さ						
1	山茶碗	碗	R4_1区西壁サ フトレ	中世包含層A	(12.8)	-	(1.9)	良好	密	5Y7/1 灰白	□ 10%以下	外内: 同磁ナデ 内: 同磁ナデ・同磁系 切り煎	大塚大洞前 大洞裏
2	山茶碗	碗	R4_C4区サフト レ	中世包含層A	-	-	(2.4)	良好	密	N7/0 灰白	-	外: 同磁ナデ・同磁系 切り煎 内: 同磁ナデ	大塚大洞古 新
3	古瀬戸製 品	煎茶碗	R4_C2区サフト レ	中世包含層A	-	-	(1.1)	良好	粗	輪: 5Y7/3 浅黄 胎土: 2.5Y8/1 灰白	□ 10%以下	灰緑	後日期
4	山茶碗	碗	R4_C2区東壁サ フトレ 産地取り上げ	中世包含層B	-	(7.2)	(2.0)	良好	粗	2.5Y7/1 灰白	底 10%	外内: 同磁ナデ・同磁系 切り煎 高台付磁ナデ	5型式
5	山茶碗	碗	R4_C4区サフト レ	中世包含層B	-	-	(2.3)	良好	密	5Y7/1 灰白	-	外内: 同磁ナデ	大塚大洞前
6	古瀬戸製 品	平碗	R4_C2区東壁サ フトレ	中世包含層B	(15.0)	-	(2.9)	良好	やや粗	輪: 2.5Y8/2 灰白 胎土: 2.5Y7/3 浅黄	□ 10%	灰緑	後日期
7	瓦輪陶器	碗	R4_E3区E4区(法 面) 産地取り上げ	表土層	(7.0)	-	(1.7)	良好	やや粗	2.5Y8/1 灰白	底 20%	外: 同磁ナデ・同磁系 切り煎 内: 同磁ナデ	H-72
8	土師器	皿	R4_D3区西壁サ フトレ	表土層	-	-	(0.55)	良好	密	7.5Y8に赤い澱	底 50%	外: 同磁系切り煎	
9	瀬戸美濃 製品	刷毛目碗	R4_A1区 産地取り上げ	表土層	(13.0)	(5.0)	3.4	良好	やや粗	胎土: 2.5Y7/3 浅黄 胎土: 5Y6/4 オリーブ黄	□ 40%	外: 同磁ナデ 内: 同磁ナデ 灰緑・白磁系土	19世紀
10	瀬戸美濃 製品	片口	R4_A～C区	表土層	-	-	(4.1)	良好	やや粗	胎土: 2.5Y8/2 灰白 胎土: 5Y7/3 浅黄	□ 10%	外: 同磁ナデ	19世紀
11	滑石製品	甕	R4_E3区E4区(法 面) 産地取り上げ	表土層	-	-	(6.5)	良好	粗	7.5Y8/1 黒黒	-	外: 磁ナデ 内: ナデ・赤銅正藍	15世紀以降
12	滑石製品	甕	R4_E3区E4区(法 面) 産地取り上げ	表土層	(38.4)	-	(5.0)	不良	粗	10YR8/4 浅黄緑	□ 10%以下	外内: 同磁ナデ	6b型式
13	土師器	火鉢	R4_A6区 産地取り上げ	表土層	-	-	(2.9)	良好	やや粗	5YR5/6 明赤黄	□ 10%以下	外内: 同磁ナデ	近代 二次焼
14	土師器	火鉢	R4_A6区 産地取り上げ	表土層	-	-	(4.5)	良好	やや粗	5YR5/6 明赤黄	□ 10%以下	内: 粘土貼り付け	近代
15	養生土器	白付甕	R4_A～C区	表土層	-	-	(4.4)	やや良	やや粗	外内: 7.5Y8/6 浅黄緑 胎土: 2.5Y4/1 黄灰	-	-	弥生時代後期 瀬戸製
16	石製品	鏡	R4_46区南壁埋 入直上	表土層(中世包 含層A直上)	縦 2.65 横 1.8	厚さ 0.4	-	-	-	-	-	-	赤チャート 重さ 1.7g
17	金属製品	鉄	R4_A～C区	表土層	2.8	厚さ 0.1	-	-	-	-	-	-	一鉄鋼製 明治 19年製
18	瓦輪陶器	碗	R3_3区B区東壁 埋入	埋理土(土層1)	-	(6.2)	(1.2)	良好	やや粗	N7/0 灰白	底 10%	外内: 同磁ナデ	11世紀末
19	山茶碗	碗	R3_3区 産地取り上げ	埋理土(土層1)	-	-	(2.3)	良好	密	5Y8/1 灰白	底 10%以下	外: 同磁ナデ・同磁 系切り煎 内: 同磁ナデ	4～5型式
20	山茶碗	碗	R3_3区 産地取り上げ	埋理土(土層1)	(14.75)	-	(3.95)	良好	密	5Y8/1 灰白	□ 20%	外内: 同磁ナデ	8～9型式
21	山茶碗	碗	R3_3区D4区	埋理土(土層1) 69層	-	-	(2.4)	やや良	やや粗	5Y8/2 灰白	□ 10%以下	外内: 同磁ナデ	10～11型式 二次の焼
22	山茶碗	小碗	R3_3区D4区	埋理土(土層1) 63・64層	(9.0)	(5.0)	1.6	良好	粗	N7/0 灰白	□ 底 20%	外: 同磁ナデ・ 内: 同磁ナデ・同磁系 切り煎	7型式
23	古瀬戸製 品	緑釉小皿	R3_3区 産地取り上げ	埋理土(土層1)	(9.6)	-	2.0	良好	やや粗	胎土: 5Y8/1 浅黄 胎土: 5Y7/3 灰白	□ 10%以下	外内: 同磁ナデ 胎土	後I (古) 期
24	古瀬戸製 品	緑釉小皿	R3_3区 産地取り上げ	埋理土(土層1)	(9.2)	(4.85)	2.4	やや良	密	2.5Y8/1 灰白	□ 20%	外: 同磁ナデ・ユビナ デ・同磁系切り煎	後I (古) 期 二次焼
25	古瀬戸製 品	片口	R3_3区 産地取り上げ	埋理土(土層1)	-	5.7	(3.2)	良好	密	外内: 5Y8/1 灰白 胎土: 7.5Y8/6 浅黄緑	底定形	外: 同磁ナデ・同磁系 切り煎 内: 同磁ナデか 胎土	後IV (新) 期
26	古瀬戸製 品	菓子	R3_3区 産地取り上げ	埋理土(土層1)	-	11.6	(18.8)	良好	やや粗	胎土: 2.5Y8/2 灰白 胎土: 7.5Y7/1 黒	底 75%	外: 同磁ナデ 内: ナデ・同磁ナデ 胎土	後IV (新) 期
27	大次郎製品	天目茶碗	R3_3区 産地取り上げ	埋理土(土層1)	(11.3)	-	(5.9)	良好	密	外: 10YR4/3 に赤い黄 緑 胎土: 2.5Y8/2 灰白	□ 30%	外: 同磁ヘラズリ 胎土 内: 同磁ナデか	大塚1後半
28	大次郎製品	抹茶	R3_3区 産地取り上げ	埋理土(土層1)	(31.4)	10.0	11.8	やや良	やや粗	外: 同磁系切り煎 胎土: 10R4/1 箱赤灰	□ 10%以下 底定形	外: 同磁系切り煎 胎土 内: 磨り目	大塚1 二次の焼 摩り直し
29	大次郎製品	抹茶	R3_3区 産地取り上げ	埋理土(土層1)	(25.8)	-	(4.1)	良好	密	外: 7.5YR3/2 黒黒 胎土: 2.5Y7/2 灰黄	□ 10%以下	外: 同磁ナデ・同磁系 切り煎 内: 同磁ナデ・磨り目 胎土	大塚1後半 磨り
30	滑石製品	甕	R3_3区 産地取り上げ	埋理土(土層1)	-	-	-	良好	粗	7.5Y8/1 黒黒	-	外ナデ・板ナデ・赤銅 正藍 内: ナデ・赤銅正藍	10型式
31	滑石製品	甕	R3_3区 産地取り上げ	埋理土(土層1) 胎土直上	-	-	-	良好	粗	外: 5YR3/1 黒黒 内: 5YR4/2 灰黒 胎土: 5YR6/3 に赤い澱	-	外: 同磁ナデ 内: ユビナデ・赤銅正 藍	10型式
32	土師器	皿	R3_3区 D2 区～ D4 上	埋理土(土層1) 64層	(14.0)	-	(1.6)	やや良	やや粗	10YR7/2 に赤い澱	□ 10%	外内: 同磁ナデ	二次の焼
33	土師器	皿	R3_3区 産地取り上げ	埋理土(土層1)	(15.0)	-	(2.25)	良好	やや粗	外内: 7.5YR3/1 箱赤 胎土: 7.5YR7/1 明灰	□ 10%	外内: 同磁ナデ	二次の焼
34	土師器	皿	R3_3区 産地取り上げ	埋理土(土層1)	(11.4)	5.8	2.3	良好	やや粗	2.5Y7/2 灰黄	□ 10% 底定形	外: 同磁ナデ・同磁系 切り煎 内: 同磁ナデ	
35	土師器	皿	R3_D4区	埋理土(土層1) 63・64層	(7.2)	4.3	1.5	良好	やや粗	7.5Y8/3 に赤い澱	□ 10%以下 底定形	外: 同磁ナデ・同磁系 切り煎	

階層 番号	区分	階層	仕様			活層 (cm)			構成	熟土	色調	残存率	調査	備考
			調査証・グリッド	調査名・掘削区	口径	長さ	幅							
36	土師器	皿	R3_堀D4区 ~ 子2区	伽理士(土層Ⅰ) 7.1区	(8.0)	(4.0)	(1.5)	やや良	やや密	7.5YR8/3 浅黄褐色	□ 10%	子づくね		
37	土師器	皿	R3_堀E2~D4 区	伽理士(土層Ⅰ)	(6.2)	(3.0)	(1.7)	やや良	やや密	10YR8/2 灰白	□ 10%	子づくね		
38	土師器	皿	R3_堀E1区 東壁サツトシ	伽理士(土層Ⅰ)	(6.2)	(2.0)	(1.4)	良好	やや密	10YR7/3 に赤い黄褐色	□ 10%	子づくね		
39	土師器	羽釜	R3_堀D4区	伽理士(土層Ⅰ) 59層	(25.4)	-	(6.75)	良好	やや密	内: 2.5YR/3 浅黄褐色 外: 5YR7/6 褐色	円筒部 20%	外: ヨコナデ・イナナ デ・ヘラナデ・ナ デ押さえ・筒 内: ヨコナ デ	14世紀後半 埋付着	
40	土師器	内耳罎	R3_堀 東壁取り上げ	伽理士(土層Ⅰ)	21.8	-	(12.2)	良好	やや密	内側: 2.5YR/2 灰白 内底: 5Y2/1 灰	円筒部 50%	外: 敷ナデ・ナメハ ケナデ	埋付着	
41	土師器	羽釜 (赤黄粘土)	R3_堀 東壁取り上げ	伽理士(土層Ⅰ)	(13.2)	羽釜分層 (25.75)	(12.0)	良好	やや密	外上層: 10YR8/2 灰白 内: 7.5YR 8/2 内底: 5YR/1 灰白	円筒部 40%	外: ナデ・ヨコ コ・タテ ・チナメハ・筒 内: ヨコ コ・チナメハ カナデ	埋付着	
42	土師器	横成粘土 埴	R3_堀D区	伽理士(土層Ⅰ) 60層	縦 7.1	横 8.8	厚さ 3.6	やや良	粗	5YR6/6 褐色	-	-	-	
43	石製品	石燗甕	R3_堀D4区	伽理士(土層Ⅰ) 59層	縦 10.6	横 12.0	厚さ 2.7	-	-	-	-	-	-	底面片岩(黒 色)付着 厚さ 504.0g
44	金属製品	笥	R3_堀 東壁取り上げ	伽理士(土層Ⅰ)	縦 16.7	横 1.2	厚さ 0.2	-	-	-	-	-	魚ヶ子跡	長さ 11.0g
45	山形土	碗	R3_堀A4区 平坦面部分	伽理士(土層Ⅱ)	-	高台径 (8.1)	(1.7)	良好	密	2.5YR/1 灰白	高台 20%	外: 回転ナデ・回転 糸切り皿 内: 回転ナデ	5型式	
46	山形土	小皿	R3_堀C・D区	伽理士(土層Ⅱ)	(8.0)	(5.0)	1.9	良好	粗	7.5Y7/1 灰白	□ 30% 底 40%	外: 回転ナデ・回転糸 切り皿・回転 糸切	6型式	
47	山形土	碗	R3_堀 東壁取り上げ	伽理士(土層Ⅱ)	(11.2)	(3.8)	2.8	良好	やや密	7.5Y7/1 灰白	□ 20% 底 40%	外: 回転ナ デ・回転 糸切	12型式	
48	古瀬戸製品	楕鉢	R3_堀 東壁取り上げ	伽理士(土層Ⅱ)	-	(9.1)	(7.55)	やや 不良	やや密	筋土: 10YR8/3 浅黄褐色 輪: 2.5YR/1 赤灰	底 100%	外内: 磨 り筋 筋土	他9 (新) 期	
49	古瀬戸製品	小皿	R3_堀 東壁取り上げ	伽理士(土層Ⅱ)	2.3	3.7	3.0	良好	やや密	筋土: 2.5YR/1 灰白 輪: 5YR/2 灰白	ほぼ完全	外内: 磨 り筋 筋土	他1期	
50	大塚製品	天目茶碗	R2_堀 東壁取り上げ	伽理士(土層Ⅱ)	(11.05)	-	(4.05)	良好	緻密	外: 2.5YR2/1 赤黒 褐色 内: 2.5YR/1 灰白	□ 30%	外: 回転ナ デ	大塚2 前半 二次焼	
51	大塚製品	加工目録 (天目茶碗 転用)	R3_堀 東壁取り上げ	伽理士(土層Ⅱ)	直径 4.5	-	厚さ 1.2	良好	密	外: 2.5Y5/1 灰白 内: 7.5Y3/2 灰黄 底: 2.5Y7/2 灰白	底 100%	外: ヘラナ デ	長さ 26.3g 大塚1	
52	大塚製品	楕鉢	R3_堀 東壁取り上げ	伽理士(土層Ⅱ)	(7.0)	-	(14.4)	良好	やや密	筋土: 5Y5/1 灰 内: 7.5Y4/3 黒 N2.0底	□ 15% 胴部 100%	外: 回転ナ デ・回転 糸切	大塚2	
53	大塚製品	楕鉢	R4_堀 東壁取り上げ	伽理士(土層Ⅱ)	-	-	(2.2)	やや良	やや密	筋土: 10YR8/3 浅黄褐色 輪: 5YR3/1 黒黄	□ 10%以下	外: 回転ナ デ・回転 ヘ ラナ デ	大塚1	
54	大塚製品	楕鉢	R3_堀 東壁取り上げ	伽理士(土層Ⅱ)	-	-	(2.9)	やや良	密	外: 5YR/1 黄灰	□ 10%以下	外: 回転ナ デ・回転 ヘ ラナ デ	大塚1 後半	
55	大塚製品	楕鉢	R3_堀 東壁取り上げ	伽理士(土層Ⅱ)	-	-	(4.1)	やや良	やや密	筋土: 10YR8/3 浅黄褐色 輪: 10R3/1 赤赤灰	□ 10%以下	外: 回転ナ デ・回転 ヘ ラナ デ	大塚2 前半 磨耗激しい	
56	大塚製品	右耳罎	R3_堀 東壁取り上げ	伽理士(土層Ⅱ)	-	-	(6.1)	良好	やや密	7.5YR7/4 に赤い 筋土: 10YR3/2 灰白	-	内: 回転ナ デ	大塚1 ~ 2 二次焼	
57	瀬戸瓦製品	菊皿	R3_堀 東壁取り上げ	伽理士(土層Ⅱ)	-	(7.15)	(1.3)	良好	密	内: 2.5YR/1 灰白 外: 7.5YR6/2 灰黄 内底: N5.0 底	高台 10%	外内: 回転 ナ デ	江戸前期	
58	滑石製品	盤	R3_堀 東壁取り上げ	伽理士(土層Ⅱ)	-	(12.1)	(4.5)	良好	粗	筋土: N7.0 灰 底: 淡青緑	底 10%	-	磨耗激しい 15 ~ 16 世紀 徳島窯系	
59	青磁	四角碗	R3_堀C4区	伽理士(土層Ⅱ)	(11.2)	-	(4.1)	良好	やや密	筋土: 10YR7/2 に赤い黄褐色 底: 淡青緑	□ 10% 底 10%	外: 回転ナ デ・回転 糸 切	二次焼	
60	土師器	皿	R3_堀 東壁取り上げ	伽理士(土層Ⅱ)	(14.5)	8.0	2.7	良好	やや良	10YR7/2 に赤い黄褐色 底: 淡青緑	□ 10% 底 10%	外: 回転ナ デ・回転 糸 切	二次焼	
61	土師器	内耳罎	R3_堀 東壁取り上げ	伽理士(土層Ⅱ)	(26.0)	-	(9.55)	良好	やや密	内: 7.5YR7/4 に赤い 筋土: 10YR8/2 灰白	円筒部 30%	外: ナデ押 さえ	埋付着	
62	土師器	内耳罎	R3_堀 東壁取り上げ	伽理士(土層Ⅱ)	(26.4)	-	(9.1)	良好	やや密	7.5YR8/4 浅黄褐色	円筒部 25%	外: 浅 黄	埋付着 磨耗激しい	
63	土師器	内耳罎	R3_堀 東壁取り上げ	伽理士(土層Ⅱ)	(27.15)	-	(9.65)	良好	やや密	内: 10YR3/2 灰黄褐色 筋土: 10YR7/3 に赤い黄 褐色	円筒部 20%	外: ナデ押 さえ	埋付着	
64	土師器	内耳罎	R3_堀 東壁取り上げ	伽理士(土層Ⅱ)	(27.2)	-	(13.6)	良好	やや密	内: 10YR6/2 筋土: 7.5YR7/4 に赤い 筋土	円筒部 40%	外: ナデ押 さえ・ヨ コ ナ デ・ヘ ラ ウ ズ リ 内: ヘ ラ ウ ズ リ	埋付着	
65	土師器	内耳罎	R4_堀 東壁取り上げ	伽理士(土層Ⅱ)	(23.0)	-	(3.6)	良好	やや密	10YR7/2 に赤い黄褐色	円筒部 10%	外内: 敷 ナ デ	埋付着	
66	土師器	内耳罎	R3_堀 東壁取り上げ	伽理士(土層Ⅱ)	(28.0)	-	(7.65)	良好	やや密	内側: 7.5YR7/4 に赤い 筋土	円筒部 20%	外内: ナ デ 押 さ え	埋付着 磨耗激しい	
67	土師器	内耳罎	R3_堀A4区	伽理士(土層Ⅱ)	(27.4)	-	(9.8)	良好	やや密	内: 10YR3/3 に赤い黄 褐色 内上層: 10YR3/3 黒黄 褐色 外: 10YR7/2 に赤い黄 褐色・10YR5/1 赤灰 底: 5YR6/6 褐色	円筒部 15%	外内: ナ デ 押 さ え	埋付着 磨耗激しい	
68	土師器	把手付楕 鉢	R3_堀 東壁取り上げ	伽理士(土層Ⅱ)	(19.0)	-	(5.6)	良好	やや密	外内: 10YR7/2 に赤い黄 褐色・10YR5/1 赤灰 底: 5YR6/6 褐色	□ 20%	外: ナ デ 押 さ え ・ 高 台 向 の ヘ ラ ウ ズ リ	埋付着 磨耗激しい	
69	衛生土器	台付甕	R3_堀A4区	伽理士(土層Ⅱ)	-	-	(3.0)	良好	粗	外内: 7.5YR8/2 灰白 底: N4.0 底	-	外内: ナ デ	磨耗激しい	

階層 番号	区分	名称	規格			寸法 (cm)			構成	積土	色調	残存率	調査	備考
			調査区・グリッド	産地名・産出層	口径	長さ	壁厚							
70	石製品	石燗罐	R3_堀 産採取り上付	陶師土(土層II)	縦 8.0	横 10.1	厚さ 2.4	-	-	-	-	-	-	産さ 281.0g 黒色片
71	木製品	箸	R3_堀C区	陶師土(土層II) 56～58層	長さ 18.4	幅 0.7	厚さ 0.5	-	-	-	-	-	-	-
72	木製品	ヘラ状加工 品	R3_堀C区	陶師土(土層II) 56～58層	長さ 15.9	幅 1.9	厚さ 0.4	-	-	-	-	-	-	-
73	木製品	加板	R3_堀 産採取り上付	陶師土(土層II)	長さ 46.2	幅 17.4	厚さ 1.4	-	-	-	-	-	-	本目 5本 / 1 m (一番 端 ま った部分) 一部あり
74	山茶碗	碗	R3_堀 産採取り上付	陶師土(土層II)	-	(9.6)	(2.1)	良好	粗	2.5Y7/1 灰白	底 10%	外: 回転ナデ・回転系 切り面・縁部直 内: 回転ナデ	5型式	-
75	山茶碗	碗	R3_堀 D3区 ～E1区	陶師土(土層II)	-	(8.6)	(1.3)	良好	粗	2.5Y7/1 灰白	底 10%	外: 回転ナデ・縁部直 内: 回転ナデ	5型式	-
76	山茶碗	碗	R3_堀A区 断ち取り	陶師土(土層II)	-	(8.0)	(1.6)	良好	やや粗	2.5Y7/1 灰白	底 10%	外: 回転ナデ・回転系 切り面 内: 回転ナデ	5型式	-
77	山茶碗	碗	R3_堀A区 断ち取り	陶師土(土層II)	-	(7.4)	(2.8)	良好	粗	2.5Y7/1 灰白	底 30%	外: 回転ナデ・縁部直 内: 回転ナデ・回転系 切り面	6型式	-
78	山茶碗	碗	R3_堀C区	陶師土(土層II)	-	(7.0)	(2.2)	良好	粗	2.5Y8/1 灰白	底 10%	外: 回転ナデ・縁部直 内: 回転系切り面 回転系切り面 内: 回転ナデ	6型式	-
79	山茶碗	碗	R3_堀B区 内帯 掘サツトレ	陶師土(土層II)	(13.2)	-	(3.4)	良好	粗	10YR7/1 灰白	口 10%	外内: 回転ナデ	9型式	-
80	山茶碗	碗	R3_堀E1区	陶師土(土層II) 28層	(11.8)	-	(2.3)	不良	粗	2.5Y8/1 灰白	口 10%	外内: 回転ナデ	10型式	-
81	山茶碗	小皿	R3_堀E1区	陶師土(土層II) 28層	(8.2)	(6.2)	1.5	良好	粗	2.5Y8/1 灰白	口 20% 底 20%	外: 回転ナデ・回転系 切り面 内: 回転ナデ	6型式	-
82	山茶碗	小皿	R3_堀 産採取り上付	陶師土(土層II)	(8.2)	(5.0)	1.7	良好	粗	5Y7/1 灰白	口 10%以下 底 20%	外: 回転ナデ・回転系 切り面・縁部直 内: 回転ナデ・赤 土	6～7型式	-
83	山茶碗	片口鉢	R3_堀 産採取り上付	陶師土(土層II)	-	-	(2.3)	良好	粗	5Y7/1 灰白	口 10%以下	外: 回転ナデ	-	-
84	古瀬戸製 品	小鉢	R3_堀A4区 断ち取り	陶師土(土層II)	-	-	(2.7)	良好	やや粗	胎土: 5Y8/1 灰白 釉: 10Y6/2 オリーブ 灰色	口 10%以下	外: 回転ナデ 底施	既V (古) 期	-
85	古瀬戸製 品	鉢	R3_堀 産採取り上付	陶師土(土層II)	-	(13.2)	(3.2)	良好	やや粗	胎土: 2.5Y8/2 灰白 釉: 2.5YR4/3 に ぶい 赤黒	底 30%	外内: 回転ナデ・回 転系ナ ズリ	既V (新) 期 二次焼	-
86	大塚製品	平碗	R3_堀A4区	陶師土(土層II) 35層	-	(5.0)	(1.4)	良好	やや粗	胎土: 2.5Y8/2 灰白 釉: 5YR3/3 赤赤黒	底 20%	外: 回転ナデ・高台 作り出し	大塚 1	-
87	大塚製品	天目茶碗	R3_堀C・D区	陶師土(土層II)	(12.2)	-	(4.0)	不良	やや粗	胎土: 10YR8/2 灰白 釉: 10YR4/4 黒	口 20%	底施	大塚 1	-
88	大塚製品	天目茶碗	R3_堀	陶師土(土層II)	(11.6)	-	(3.7)	良好	やや粗	胎土: 10YR8/2 灰白 釉: 10YR3/2 黒黒	口 10%以下	底施	大塚 2	-
89	大塚製品	天目茶碗	R3_堀 E1・E4 区	陶師土(土層II)	(12.4)	(5.0)	6.2	やや 不良	やや粗	胎土: 10YR8/1 灰白 釉: 5YR5/3 に ぶい 赤黒 底施: 5YR4/2 灰黒	口 20%	底施・底施	大塚 2 前半	-
90	大塚製品	抹茶	R3_堀C区	陶師土(土層II)	-	-	(4.75)	良好	やや粗	胎土: 2.5Y8/1 灰白 釉: 5YR4/1 黒灰	底 10%以下	内: 張り目 底施	大塚 1～2	-
91	大塚製品	碗反皿	R3_堀 E2区 ～ D4区南端	陶師土(土層II)	-	-	(2.0)	良好	やや粗	胎土: 10YR7/2 に ぶい 黄粉 釉: 7.5Y7/3 黄黒	口 10%以下	外内: 回転ナデ 底施	大塚 1 後半	-
92	大塚製品	碗反皿	R3_堀E4区	陶師土(土層II) 26・28層	(9.8)	-	(2.4)	やや粗	やや粗	胎土: 5Y8/1 灰白 釉: 5Y7/2 黄黒	口 20%	外内: 回転ナデ 底施	大塚 1 前半	-
93	瀬戸美濃 製品	椀	R3_堀C区	陶師土(土層II)	-	(7.4)	(1.1)	良好	やや粗	胎土: 5Y8/1 灰白 釉: 5Y7/2 灰白	底 20%	外: 回転ナデ・回転系 ナズリ 底施	江戸前期	-
94	瀬戸美濃 製品	土器丸皿	R3_堀B区	陶師土(土層II)	(12.4)	-	(1.8)	良好	やや粗	胎土: 2.5Y8/1 灰白 釉: 10YR8/1 灰白	口 10%以下	長石釉	伊勢 2 小皿	-
95	瀬戸美濃 製品	抹茶	R3_堀 産採取り上付	陶師土(土層II)	-	-	(2.8)	良好	やや粗	胎土: 10YR7/2 に ぶい 黄粉 釉: 7.5YR3/4 黄黒	口 10%以下	底施	伊勢 5～6 小 皿	-
96	常滑製品	甕	R3_堀 産採取り上付	陶師土(土層II)	-	-	(8.2)	良好	粗	外: 7.5YR4/2 灰黒 内: 7.5YR4/3 灰黒 断: 2.5YR5/3 に ぶい 赤黒	口 10%以下	外内: ココナデ	9型式	-
97	常滑製品	瓶片	R3_堀 E3区 内帯サツトレ	陶師土(土層II)	-	-	(3.35)	良好	粗	外内: 2.5YR3/2 赤 黒 断: 5Y6/1 灰 内: 7.5YR1/1 灰白 内: 2.5YR6/1 灰灰 断: 7.5YR5/3 に ぶい 黒	口 10%以下	外内: 回転ナデ	15～16 世紀	-
98	常滑製品	甕	R3_堀 E2区 ～ D4区	陶師土(土層II)	-	-	(3.5)	良好	やや粗	胎土: 7.5YR4/1 灰黒 断: 10R4/2 灰赤	-	外: 回転ナデ・押出 内: ナデ・筒部直	-	-
99	常滑製品	甕	R3_堀A区	陶師土(土層II)	-	-	(4.9)	良好	やや粗	外内: 7.5YR4/1 灰黒 断: 10R4/2 灰赤	-	外: 格子タキ 内: 板ナデ	-	-
100	磁器	皿	R3_堀E1区 前半	陶師土(土層II) 28層	-	-	(1.45)	良好	密	胎土: NR/0 灰白 釉: 7.5GY8/1 黄緑灰	底 25%	外: 回転系ナズリ 底施	-	-
101	土師器	皿	R3_堀E4区	陶師土(土層II) 25層	5.1	-	1.1	やや粗	やや粗	7.5YR7/4 に ぶい 赤	口 40%	外: 赤面直 すつこね	-	-

掲載 番号	区分	器種	通機		寸法 (cm)		構成	熟土	色調	残存率	調査	備考	
			調査区・グリッド	通機名・掘出層	口径	高さ							口径
102	土師器	皿	R3_ 堀D4区	堀理土(土層II) 4区	φ(2)	-	(1.0)	良好	密	10YR8/3 浅黄褐色	□ 10%	外: 肌面直線 平づくね	
103	石製品	碗	R3_ 堀 岸埋取リ上坪	堀理土(土層II)	縦(5.3)	横(4.2)	厚さ 7.0	-	-	-	-	-	部付着 重さ 19.1g
104	石製品	碁石か	R3_ 堀A4区	堀理土(土層II)	縦 2.0	横 2.0	厚さ 0.7	-	-	-	-	-	重さ 4.8g
105	灰陶器	深碗	R3_ 堀D区	堀理土(土層II)	-	-	(8.0)	(1.8)	良好	密	2.5YR/1 灰白	高台 20%	外内: 回転ナデ
106	山岳土	小碗	R3_ 堀B区	堀理土(土層II)	-	(5.05)	(1.5)	良好	密	5YR/1 灰白	高台 20%	外: 回転ナデ・糸切り 内: 回転ナデ	
107	古瀬戸製品	平碗	R3_ 堀B区	堀理土(土層II)	-	-	(2.7)	良好	やや密	胎土: 2.5Y7/3 浅黄褐色 施: 10Y7/2 灰白	-	外: 回転ケズリ 内: 回転ナデ	焼付(新)期
108	陶器	陶丸	R3_ 堀A・B区	堀理土(土層II)	縦 2.1	横 2.0	高さ 1.9	良好	粗	2.5YR/1 灰白	-	-	-
109	大塚製品	天目茶碗	R4_ 堀 岸埋取リ上坪	堀理土(土層II)	-	-	(2.8)	良好	やや密	胎土: 10YR8/2 灰白 施: 7.5YR2/1 黒	-	外: 回転ケズリ 鉄施	大塚 1-2
110	瀬戸美濃製品	皿	R3_ 堀E区	堀理土(土層II)	-	(5.4)	(1.15)	良好	やや密	胎土: 5YR/1 灰白 施: 7.5YR/2 灰白	底 25%	灰褐色 胎土・白化粧土	
111	磁器	碗	R3_ 堀D区中央	堀理土(土層II)	-	-	(2.4)	良好	密	NR/0 灰白	□ 10%以下	外内: 染付 透明釉	
112	磁器	碗反碗	R3_ 堀西側サブ トレ	堀理土(土層II)	-	-	(2.6)	やや良	やや密	胎土: 10YR8/1 灰白 施: 10YR/1 灰白	□ 10%以下	透明釉・青花 染付	清州産 15世紀代か
113	土師器	皿	R3_ 堀E区東側 サブトレ	堀理土(土層II)	-	-	(1.8)	良好	やや密	10YR8/3 浅黄褐色	□ 10%以下	外: 回転ナデ・筋面 内: 回転ナデ	
114	土師器	平鉢	R3_ 堀D4区	堀理土(土層II)	(2.81)	-	(7.3)	良好	やや密	外: 10YR8/2 灰白 内: 10YR8/3 浅黄褐色 施: 5YR7/6 褐色	□ 15%	外: ナデ・ココナデ 内: 板ナデ・ハケメ 内耳あり	埋付着
115	土製品	模成粘土 塊	R3_ 堀D4区	堀理土(土層II)	縦 3.5	横 4.5	高さ 3.6	やや 不良	粗	内面: 7.5YR7/4 に ぶ い粉 真ん中: 10YR8/2 灰白	-	-	-
116	石製品	石燗罐	R3_ 堀D4区	堀理土(土層II)	縦 6.5	横 8.0	厚さ 1.6	-	-	-	-	-	灰質片岩 (黒色内付) 重さ 11.4g
117	石製品	碁石	R3_ 堀D4区	堀理土(土層II)	縦 4.8	横 6.3	厚さ 0.7	-	-	2.5YR/1 灰白	-	-	碁石石(白)
118	金属製品	銭	R3_ 堀E区西側 掘岸埋取リ上坪	堀理土(土層II)	径 2.4	-	厚さ (0.4)	-	-	-	-	-	重さ 1.7g
119	灰陶器	碗	R3_ 堀B区	堀理土(土層II)	-	(8.55)	1.15	不良	密	5YR/1 灰白	高台 20%	外内: 回転ナデ	
120	山岳土	加工円盤	R3_ 堀F区	堀理土(土層II)	縦 3.8	横 4.0	高さ 0.9	良好	粗	10YR7/1 灰白	-	-	重さ 15.9
121	瀬戸美濃製品	石皿	R3_ 堀E区	堀理土(土層II)	(11.6)	(4.2)	2.2	良好	やや密	胎土: 2.5YR/2 灰白 施: 10YR/2 灰白	□ 10%	外: 回転ナデ・回転ケ ズリ 内: 回転ナデ	
122	瀬戸美濃製品	水筒	R3_ 堀E区中央 北端	堀理土(土層II)	(2.8)	-	(2.9)	良好	やや密	胎土: 2.5YR/1 灰白 施: 10YR3/3 暗褐色	□ 70%	外: 回転ケズリ 鉄施	
123	土師器	楕円	R3_ 堀E区	堀理土(土層II)	-	-	(1.8)	良好	やや密	7.5YR7/4 にぶい粉	□ 10%以下	外内: 回転ナデ	
124	磁器	碗	R3_ 堀D区南端	堀理土(土層II)	(11.0)	(4.2)	5.8	良好	密	NR/0 灰白	□ 20% 底 40%	外: 回転ナデ 染付・透明釉	明治 30年代 製造か
125	磁器	-	R3_ 堀D区	堀理土(土層II) 4層	縦 3.5	横 2.4	高さ 0.6	-	-	-	-	-	表面染付・貴 州産茶末茶式 改良 磁 具 容 器
126	石製品	碁石	R3_ 堀E区	堀理土(土層II)	縦(3.7)	横(3.4)	厚さ (0.3)	-	-	-	-	-	重さ 5.0g
127	ガラス製品	茶瓶	R3_ 堀A区	堀理土(土層II)	縦 1.6	横 2.8	高さ (3.3)	-	-	-	-	-	表: 黒鉛「□ 目黒」 裏: 黒鉛「□ 黒」
128	山岳土	碗	R3_ F区 SK1	SK1 埋土	-	(6.2)	(1.8)	良好	粗	10YR8/1 灰白	底 20%	外: 回転ナデ・回転ケ ズリ・糸切り筋 内: 回転ナデ	6型式
129	大塚製品	加工円盤 (天目茶碗 転用)	R3_ F区 SK1	SK1 埋土	径 4.1	-	(1.0)	良好	やや密	胎土: 10YR8/1 灰白 鉄施: 10YR7/1 黒 鉄施: 5YR5/2 灰褐色	底完形	鉄施	大塚 1
130	ガラス製品	茶瓶	R3_ F区 SK1	SK1 埋土	1.6	2.6	高さ 5.5	-	-	-	完形	-	外部「ホシセ ブロン」(早 稲 株式会社) 底部「ムニマ ク」
131	養生土器	高坪脚盤	R3_ F区 SK5	SK5 埋土	-	-	(5.5)	やや良	やや密	5YR8/2 灰白	-	外内: ナデ 中央 3 方向	赤土時代後期
132	土師器	伊勢型碗	R3_ F区 P4	P4 埋土	-	-	(1.3)	良好	やや密	外内: 7.5YR7/3 に ぶ い粉 施: NR/0 暗褐色	□ 10%以下	外内: 回転ナデ	
133	大塚製品	天目茶碗	埋土	-	(10.9)	-	(2.65)	良好	密	外: 5YR3/2 暗赤褐色 内: 5YR/1 灰白	□ 10%	内: 回転ナデか 鉄施	大塚 1
134	金属製品	釘	R3_ F区	-	縦(4.3)	横(1.6)	厚さ (1.1)	-	-	-	-	-	戦国期の釘の 形状
135	石製品	石燗罐	堀理土	-	縦 7.3	横 7.95	厚さ 1.4	-	-	-	-	-	灰質片岩(白 濁時多い) 重さ 128.0g
136	石製品	石燗罐	堀理土	-	縦 6.8	横 7.5	厚さ 1.15	-	-	-	-	-	灰質片岩(白 濁母虫雲母が 目立つ) 重さ 89.0g

第5節 自然科学分析

(1) 放射性炭素年代測定

パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ

伊藤 茂・加藤和浩・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・Zaur Lomtadze・小林克也

1. はじめに

大高城跡から出土した試料について、加速器質量分析法（AMS 法）による放射性炭素年代測定を行った。

2. 試料と方法

試料は、土器付着炭化物と生材各 1 点の、計 2 点である。測定試料の情報、調製データは第 3-4-1 表のとおりである。土器付着炭化物は、内耳鍋（第 3-4-12 図の 40）の底部外面付着炭化物（試料 No.1：PLD-51830）である。生材は、堀 C 区中央・土層Ⅱで出土した棒状木製品（試料 No.2：PLD-51831）である。試料の樹種はケヤキで、最終形成年輪が残っていた。試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクト AMS：NEC 製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、 ^{14}C 年代、暦年代を算出した。

第 3-5-1 表 測定試料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-51830	試料 No.1 第 3-4-12 図の 40	種類：土器付着炭化物 器種：内耳ナベ 部位：底部外面 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L、 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L、塩酸：1.2 mol/L）
PLD-51831	試料 No.2 調査区：C 区中央 遺構：堀底サプトレ 層位：土層Ⅱ 56～58 層 分析 No. 木-⑨	種類：生材（ケヤキ） 試料の性状：最終形成年輪 器種：棒状木製品 状態：wet	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L、 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L、塩酸：1.2 mol/L）

3. 結果

第 3-5-2 表に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（ $\delta^{13}\text{C}$ ）、同位体分別効果の補正を行った暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した ^{14}C 年代、第 3-5-1 図に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下 1 桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C 年代は AD1950 年を基点にして何年前かを示した年代である。 ^{14}C 年代 (yrBP) の算出には、 ^{14}C の半減期として Libby の半減期 5568 年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差 ($\pm 1\sigma$) は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が 68.27% であることを示す。

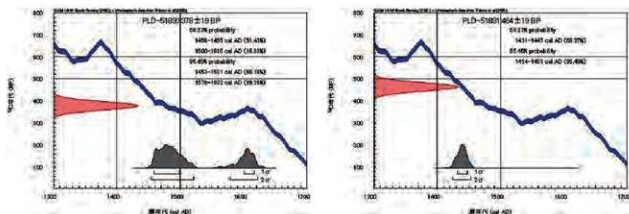
なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、および半減期の違い（ ^{14}C の半減期 5730 \pm 40 年）を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C 年代の暦年較正にはOxCal4.4(較正曲線データ: IntCal20)を使用した。なお、1 σ 暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された14C年代誤差に相当する68.27%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に2 σ 暦年代範囲は95.45%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

第3-5-2表 放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
PLD-51830 試料 No.1	-27.68 \pm 0.17	378 \pm 19	380 \pm 20	1458-1499 cal AD (51.43%) 1600-1616 cal AD (16.83%)	1453-1521 cal AD (66.19%) 1578-1622 cal AD (29.26%)
PLD-51831 試料 No.2	-27.37 \pm 0.22	464 \pm 19	465 \pm 20	1431-1447 cal AD (68.27%)	1424-1453 cal AD (95.45%)



第3-5-1図 暦年較正の結果

4. 考察

以下、2 σ 暦年代範囲(確率95.45%)に着目して結果を整理する。

内耳鍋(第3-4-12図の40)の底部外面付着炭化物(試料No.1: PLD-51830)は、1453-1521 cal AD (66.19%) および 1578-1622 cal AD (29.26%) で、15世紀中頃～16世紀前半および16世紀後半～17世紀前半の暦年代を示した。これは、室町時代～江戸時代前期に相当する。試料は底部外面に付着した炭化材であり、15世紀中頃～16世紀前半および16世紀後半～17世紀前半に煮炊きが行われていたと考えられる。試料No.2 (PLD-51831)は、1424-1453 cal AD (95.45%) で、15世紀前半～中頃の暦年代を示した。これは、室町時代に相当する。なお、試料は最終形成年輪を含めて測定が行われており、測定結果は枯死もしくは伐採年代を示す。

参考文献

- Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51 (1), 337-360.
 中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎。日本先史時代の14C年代編集委員会編「日本先史時代の14C年代」: 3-20, 日本第四紀学会。
 Reimer, P.J., Austin, W.E.N., Bard, E., Bayliss, A., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Butzin, M., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kromer, B., Manning, S.W., Muscheler, R., Palmer, J.G., Pearson, C., van der Plicht, J., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Turney, C.S.M., Wacker, L., Adolph, F., Bäumgen, U., Capano, M., Fahrni, S.M., Fogtmann-Schulz, A., Friedrich, R., Köhler, P., Kudsk, S.,

(2) 堀土層Ⅱ出土の赤色塗膜分析

株式会社パレオ・ラボ 竹原弘展・藤根 久・米田恭子・三谷智広

1. はじめに

大高城跡から出土した漆器の一部とみられる赤色塗膜について、塗膜薄片を作製し、塗膜構造と材料について検討した。

2. 試料と方法

分析対象は、本丸南側に掘られた堀の埋土より出土した、漆器の一部とみられる赤色塗膜1点である(第3-4-2図下「塗膜①」)。残存が非常に悪く、胎部はほとんど消失して表面が赤色の塗膜のみに近い状態となっている。塗膜片を少量採取し、分析試料とした(第3-5-1写真1、2)。なお、分析にあたっては、三谷が試料採取、藤根が赤外分光分析、米田・竹原が薄片作製、竹原が顕微鏡観察・X線分析を行い、竹原が報告をまとめた。

分析は、漆成分を調べるために赤外分光分析を行った。また、塗膜構造を調べるために薄片を作製して、光学顕微鏡と走査型電子顕微鏡による観察、およびX線分析を行った。

赤外分光分析は、手術用メスを用いて塗膜小片を採取し、ダイヤモンドセルに載せて薄く延ばして、測定試料とした。分析装置は日本分光株式会社製フーリエ変換型顕微赤外分光光度計 FT/IR-4X、IRT-5200-16 を使用し、標準光源を用いて範囲 100 × 100 μ m、測定時間 200 秒の条件で、透過法により赤外吸収スペクトルを測定した。材質は、生漆などの赤外吸収スペクトルと比較した。

塗膜観察用の薄片は、高透明エポキシ樹脂を使用して包埋し、薄片作製機および精密研磨フィルム(#1000)を用いて厚さ約 50 μ m 前後に仕上げ、まず走査型電子顕微鏡(日本電子株式会社製 JSM-IT200)による低真空モードでの反射電子像観察を行った。さらに、電子顕微鏡に付属するエネルギー分散型 X 線分析装置(オックスフォード・インストルメンツ株式会社製 AZtecOne システム)による定性・半定量分析を行った。その後、再度精密研磨フィルム(#1000)を用いて厚さ約 20 μ m 前後に調整した後、生物顕微鏡を用いて塗膜構造の観察を行った。

3. 結果および考察

第3-5-1写真3に塗膜薄片の生物顕微鏡写真を、第3-5-1写真4に走査型電子顕微鏡反射電子像を示す。第3-5-2図に、赤外吸収スペクトルを示す。第3-5-2図の縦軸は透過率(%T)、横軸は波数(Wavenumber (cm⁻¹);カイザー)である。吸収スペクトルに示した数字は、生漆の赤外吸収位置を示す(第3-5-3表)。また、第3-5-1写真に示した i ~ iv の位置の X 線分析による半定量分析結果を、第3-5-4表に示す。

第3-5-3表 生漆の赤外吸収位置とその強度

吸収 No.	生漆		ウルシ成分
	位置	強度	
1	2925.48	28.5337	
2	2854.13	36.2174	
3	1710.55	42.0346	
4	1633.41	48.8327	
5	1454.06	47.1946	
6	1351.86	50.8030	ウルシオール
7	1270.86	46.3336	ウルシオール
8	1218.79	47.5362	ウルシオール
9	1087.66	53.8428	
10	727.03	75.3890	

塗膜薄片では、木胎 a 層、炭粉と柿渋からなるとみられる下地 b 層、赤色漆層 c 層が観察された（第 3-5-1 写真 3、4）。

第 3-5-4 表 塗膜層の X 線分析結果（酸化物換算、mass%）

測定位置	CO ₂	Na ₂ O	MgO	Al ₂ O ₃	SiO ₂	P ₂ O ₅	SO ₃	Cl	K ₂ O	CaO	TiO ₂	Fe ₂ O ₃	HgO	備考
i	58.79	0.17	0.18	11.26	25.10		0.95	0.18	0.69	0.13	0.18	1.13	1.22	c 層直上の粘土
ii	80.36			0.28	0.92	0.06	5.38	0.06				0.06	12.87	赤色漆 c 層
iii	59.01	0.11	0.19	11.96	25.56		0.70	0.16	0.60	0.13	0.36	1.22		下地 b 層中の粘土
iv	95.48			0.81	1.76	0.04	1.49	0.30	0.04			0.07		下地 b 層 or 木胎 a 層

赤色漆層 c 層からは、X 線分析で水銀 (HgO) と硫黄 (SO₃) が検出され（第 3-5-4 表の ii）、水銀朱の使用が確認された。赤外分光分析では、炭化水素の吸収（吸収 No.1 と No.2）は確認されなかった。また、漆を特徴づけるウルシオール（吸収 No.6～8）も確認できなかった（第 3-5-2 図）。劣化の激しい試料であり、漆成分は消失したと考えられる。なお、粘土鉱物カオリンの複数の吸収（3695.9cm⁻¹ と 3616.8cm⁻¹、1007.6cm⁻¹、918.0cm⁻¹、799.4cm⁻¹）が明瞭に見られた（第 3-5-2 図）。下地 b 層中には、白色粘土の層が観察されるが（第 3-5-1 写真 4 の iii）、c 層直上の白色粘土（第 3-5-1 写真 4 の i）と似た化学組成であり（第 3-5-4 表の i、iii）、劣化して剥離した b 層の空隙に、埋藏中に充填された粘土と考えられる。なお、c 層と b 層の間の空隙（包埋樹脂充填部）は、出土後の剥離である。漆器本来の下地である b 層は、残存が悪いがクラックの多く入った褐色透明の層に黒色物が多く混ざるといった特徴から（岡田, 1995）、炭粉と柿渋からなる下地と推定される。

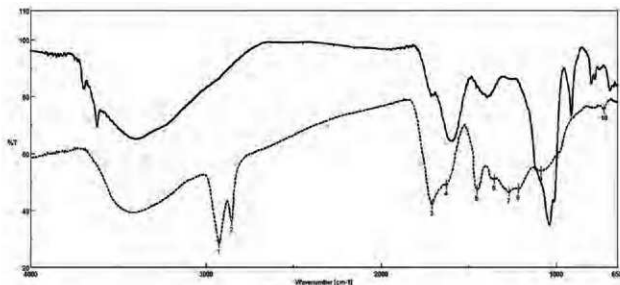
第 3-5-5 表に塗膜分析の結果を示す。

第 3-5-5 表 塗膜分析結果

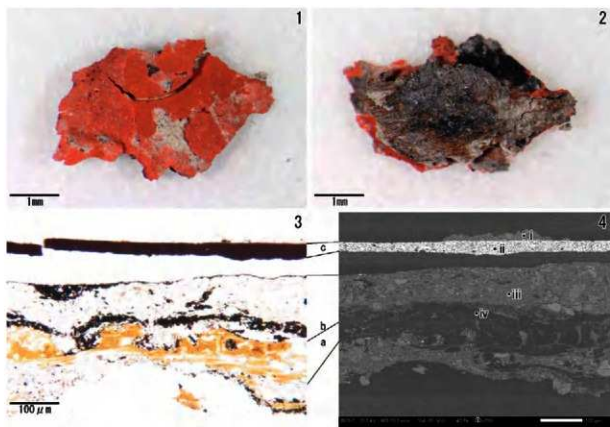
器種	採取塗膜	下地	塗膜層
器種不明 木胎漆器	赤色塗膜	炭粉渋下地 (劣化して空隙に粘土流入)	1 層 赤色漆層 (水銀朱)

4. おわりに

大高城跡から出土した漆器とみられる赤色塗膜について塗膜分析を行い、塗膜構造や材料について検討した。その結果、炭粉渋下地の上に、水銀朱を用いた赤色漆が 1 層塗られる構造と考えられた。



第 3-5-2 図 赤色塗膜の赤外吸収スペクトル
（実線：分析試料、点線：生漆、数字：生漆の主な赤外吸収位置）



第 3-5-1 写真 漆器の塗膜分析

1. 採取試料表面 2. 採取試料裏面 3. 断面生物顕微鏡写真 4. 断面 SEM 反射電子像と X 線分析位置

引用文献

岡田文明（1995）古代出土漆器の研究。190p, 京都書院。

(3) 花粉分析

株式会社パレオ・ラボ 森 将志

1. はじめに

大高城跡において、古環境を検討するために堆積物試料が採取された。以下では、堆積物試料の花粉分析の結果を示し、当時の古植生について検討した。

2. 試料と方法

分析試料は、堀から採取された 3 試料である（表 3-5-6）。

これらの試料について、以下の手順で分析を行った。

試料（湿重量約 3～4g）を遠沈管にとり、10% 水酸化カリウム溶液を加え、10 分間湯煎する。水洗後、46% フッ化水素酸溶液を加え、1 時間放置する。水洗後、比重分離（比重 2.1 に調整した臭化亜鉛溶液を加え遠心分離）を行い、浮遊物を回収し、水洗する。水洗後、酢酸処理を行い、続けてアセトリシス処理

第 3-5-6 表 分析試料一覧

サンプル名	遺構	第 3-4-6 図 土層番号	特徴
2	堀土層 I	91	オリーブ黒色 (10Y3/1) 砂シルト
4		98	明緑灰色 (7.5GY7/1) 砂シルト
3		102	明緑灰色 (7.5GY7/1) 砂にオリーブ黒色土ブロック混

(無水酢酸 9 : 濃硫酸 1 の割合の混酸を加え 20 分間湯煎) を行う。水洗後、残渣にグリセリンを滴下し、保存用とする。検鏡は、この残渣より適宜プレパラートを作製して行った。プレパラートは樹木花粉が 200 を超えるまでカウントし、その間に現れる草本花粉、胞子を全て数えた。なお、十分な量の花粉化石が含まれていない試料については、プレパラート 1 枚の全面を検鏡するに留めた。また、保存状態の良い花粉を選んで単体標本 (PLC.4024 ~ 4030) を作製した。

3. 結果

検鏡の結果、3 試料から検出された花粉の分類群数は、樹木花粉 26、草本花粉 24 の、形態分類のシダ植物胞子 1 の総計 51 である。これらの花粉の一覧表を第 3-5-7 表に、分布図を第 3-5-3 図に示した。分布図における樹木花粉の産出率は樹木花粉総数を基数とした百分率で、草本花粉の産出率は産出花粉総数を基数とした百分率で示してある。図表においてハイフン (-) で結んだ分類群は、それらの分類群間の区別が困難なものを示す。また、クワ科とバラ科の花粉には樹木起源と草本起源の分類群があるが、各々に分けるのが困難なため、便宜的に草本花粉に一括して入れてある。

No.3 では十分な量の樹木花粉化石が得られなかったが、No.2 と No.4 では十分な量の樹木花粉化石が得られた。No.2 の樹木花粉ではエノキ属 - ムクノキ属やサイカチ属、草本花粉ではイネ科やアカザ科 - ヒユ科、ブタクサ属 - オナモミ属の産出が目立つ。No.4 の樹木花粉ではマツ属複維管束亜属やコナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、草本花粉ではイネ科、アカザ科 - ヒユ科の産出が目立つ。

4. 考察

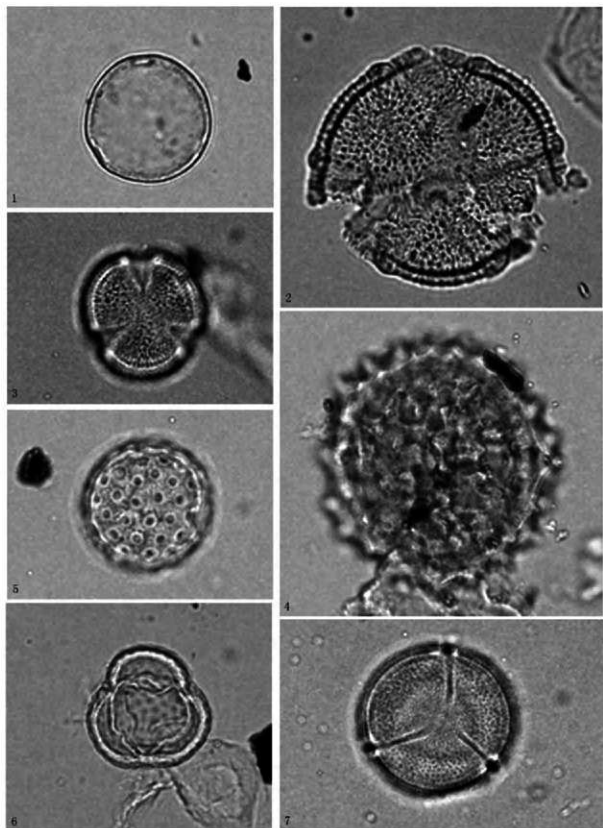
No.3 では十分な量の樹木花粉が得られなかった。一般的に、花粉は湿乾を繰り返す環境に弱く、酸化的環境下で堆積すると紫外線や土壌バクテリアなどによって分解され、消失してしまう。したがって、堆積物が酸素と接触する機会が多い堆積環境では、花粉化石が残りにくい。同一試料で行った珪藻分析においても十分な量の珪藻化石が得られておらず、絶えず水を湛えた堆積環境ではなかったと推測されている。よって、試料採取地点は酸化的環境に晒されたために、花粉化石が分解・消失してしまった可能性がある。そうした中、草本花粉は比較的良好に得られており、イネ科やアカザ科 - ヒユ科の産出が多い。No.3 堆積時の堀周辺にはイネ科やアカザ科 - ヒユ科が分布を広げていたと考えられる。

No.4 では、マツ属複維管束亜属の産出率が高く、コナラ属コナラ亜属やクリ属を伴っている。これらの分類群は二次林要素の分類群として知られているため、堀周辺にはニヨウマツ類やコナラ、クリなどからなる二次林が分布していた可能性がある。また、コナラ属アカガシ亜属も産出しており、周辺にカシ類からなる照葉樹林も分布していたと考えられる。草本類では、依然としてイネ科やアカザ科 - ヒユ科の産出が多いため、堀周辺にイネ科やアカザ科 - ヒユ科が分布を広げていたと考えられる。なお、No.4 ではソバ属やベニバナ属といった栽培植物の産出が確認できた。No.4 堆積時の堀周辺では、ソバやベニバナ栽培が行われていた可能性がある。また、オモダカ属やキカシグサ属といった好湿性植物の産出が見られるため、堀周辺に生育していた可能性があるが、これらの分類群は水田雑草を含む分類群としても知られており、イネ科の高率な産出と合わせて考えると、周辺に水田が存在していた可能性もある。

珪藻分析の結果によると、No.2 は滞水環境であったと考えられている。No.2 では、河畔林要素のエノキ属 - ムクノキ属の産出率が高く、堀周辺の湿潤な場所に生育していたと考えられる。また、草本類ではヒシ属の産出も見られ、堀内にヒシ属が生育していた可能性がある。さらに、イネ科やアカザ科 - ヒユ科、

第 3-5-7 表 産出花粉胞子一覧表

学名	和名	2	4	3
樹木				
<i>Podocarpus</i>	マキ属	1	1	-
<i>Abies</i>	モミ属	-	1	-
<i>Tsuga</i>	ツガ属	-	3	-
<i>Pinus subgen. Diploxylon</i>	マツ属複雑管束亜属	25	106	12
<i>Sciadopitys</i>	コウヤマキ属	1	3	-
<i>Cryptomeria</i>	スギ属	-	6	2
<i>Pterocarya - Juglans</i>	サワグルミ属-クルミ属	-	2	-
<i>Carpinus - Ostrya</i>	クマシデ属-アサダ属	-	6	1
<i>Corylus</i>	ハシバミ属	-	1	1
<i>Betula</i>	カバノキ属	2	4	-
<i>Alnus</i>	ハンノキ属	2	12	-
<i>Fagus</i>	ブナ属	3	3	-
<i>Quercus subgen. Lepidobalanus</i>	コナラ属コナラ亜属	9	18	4
<i>Quercus subgen. Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	1	16	1
<i>Castanea</i>	クリ属	-	6	-
<i>Castanopsis - Pasania</i>	シイノキ属-マテバシイ属	-	1	-
<i>Ulmus - Zelkova</i>	ニレ属-ケヤキ属	1	1	-
<i>Celtis - Aphananthe</i>	エノキ属-ムクノキ属	68	1	-
<i>Gleditsia</i>	サイカチ属	95	1	1
<i>Caesalpinia</i>	ジャケツイバラ属	2	-	-
<i>Mallotus</i>	アカメガシワ属	-	1	-
<i>Celastraceae</i>	ニシキギ科	1	-	-
<i>Vitis</i>	ブドウ属	-	3	-
<i>Elaeagnus</i>	グミ属	-	1	2
<i>Ericaceae</i>	ツツジ科	1	1	1
<i>Lonicera</i>	スイカズラ属	-	2	-
草本				
<i>Sagittaria</i>	オモダカ属	-	1	-
Gramineae	イネ科	130	370	127
Cyperaceae	カヤツリグサ科	1	-	-
Moraceae	クワ科	4	6	1
<i>Rumex</i>	ギシギシ属	2	13	2
<i>Polygonum sect. Persicaria - Echinocaulon</i>	サナエタテ節-ウナギツカミ節	22	7	1
<i>Polygonum sect. Reynoutria</i>	イタドリ節	2	-	-
<i>Fagopyrum</i>	ソバ属	5	2	-
Chenopodiaceae - Amaranthaceae	アカザ科-ヒユ科	88	252	76
Caryophyllaceae	ナデシコ科	3	41	-
Ranunculaceae	キンポウゲ科	-	1	-
Brassicaceae	アブラナ科	-	15	-
Rosaceae	バラ科	1	-	-
<i>Rotala</i>	キカシグサ属	-	2	-
<i>Trapa</i>	ヒシ属	1	-	-
<i>Haloragis</i>	アリノトウグサ属	-	5	1
Apiaceae	セリ科	-	5	-
<i>Solanum</i>	ナス属	-	20	2
<i>Plantago</i>	オオバコ属	1	1	1
<i>Ambrosia - Xanthium</i>	ブタクサ属-オナモミ属	67	5	-
<i>Carthamus</i>	ベニバナ属	1	6	-
<i>Artemisia</i>	ヨモギ属	5	27	6
Tubuliflorae	キク亜科	6	5	2
Liguliflorae	タンポポ亜科	5	19	3
シダ植物				
trilete type spore	三条溝胞子	-	8	2
Arboreal pollen	樹木花粉	212	200	25
Nonarboreal pollen	草本花粉	344	803	222
Spores	シダ植物胞子	-	8	2
Total Pollen & Spores	花粉・胞子総数	556	1011	249
unknown	不明	6	11	2



第3-5-2写真 No.2から産出した花粉化石

1. エノキ属-ムクノキ属 (PLC.4024)

3. サイカチ属 (PLC.4026)

5. アカザ科-ヒユ科 (PLC.4028)

7. ギシギシ属 (PLC.4030)

2. ジャケツイバラ属 (PLC.4025)

4. ベニバナ属 (PLC.4027)

6. ブタクサ属-オナモミ属 (PLC.4029)

第6節 小結

今回の調査で、大高城跡は地下遺構が良好な状態で保存されていることを確認した。発掘調査では戦国時代に遡る遺構を確認し、「桶狭間の戦い」段階と推測される城の構造の一部が明らかになった。また、弥生時代から現代に至るまでの当地の土地利用の変遷について概略を捉えられるようになった。部分的ではあるが、地中レーダー探査の成果および「知多郡大高村古城絵図」（以下、「古城絵図」）の内容を考古学的手法で確認できた。

(1) 城の構造

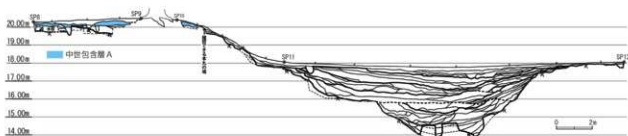
今回の発掘調査では、「古城絵図」に描かれた本丸、本丸の南側を囲む堀、その南側に帯曲輪が確認された。本丸を盛土造成する点、発掘調査で検出された堀や現地表で目視できる外堀の規模から、大高城の築城にはかなりの人員が投入されたことが伺える。これら土木工事が行われたと推定される15世紀後半頃から16世紀代に、城は防備を固める必要に迫られたと推測する。

本丸 大高城跡の中心に位置し、城内で最も標高の高い場所にある平坦面である。灰白色粘土（中世包含層A）を盛土し突き固めて造成したものである。今回の調査では盛土は南北方向で少なくとも9.9mの範囲で確認できた。なお、本調査では土塁は確認できなかった。盛土は本丸の南側を防御する堀を掘削した際の排出土を利用した可能性がある。

堀 本丸の南側を画する横堀である。規模が大きく、幅約15m、深さ4m以上である。堀底を埋めた土（土層I）には16世紀半ば頃に時期比定される遺物が含まれ、この頃まで堀底が開いた状態だったことから「桶狭間の戦い」時には機能していたとみられる。機能していた時期から推測すると掘削時期は16世紀代とみられる。断面形は葉研堀状である。帯曲輪側の斜面は角度約50～60度と急傾斜であるが、本丸側では深さ半分ほどの地点で傾斜がかなり緩くなり平坦面に近い箇所が確認された。法面の角度を抑えることにより本丸の崩落を防ごうとしたものと推測する。なお、堀底と残存する本丸部分の盛土の比高差は6m以上ある。

帯曲輪 堀の南側にある、帯曲輪とみられる平坦面である。現況地形から南北方向15～20m、東西方向約100mの細長い曲輪と推測される。また、帯曲輪側から埋めたとみられる堀埋土にサイカチ属などの花粉が確認されており、茎に棘のある植物が植栽されていた可能性がある。

築城時期と存続期間 築城時期は現段階では特定できない。上記で見た城の構造は、中世包含層Bやその前後に構築された遺構群を覆うように造られており、もともと城館として機能していた場所を再整備し



第3-6-1図 本丸から帯曲輪横断面（東壁）

た結果の可能性もあるためである。出土遺物からは、中心時期である15世紀半ばから16世紀半ば頃まで城館の役割を果たしていたと考えるのが自然であるが、瀬戸窯産の施釉陶器などは使用期間の問題を踏まえる必要があるため、特に開始期については時期比定が困難である。

その他 堀埋土からは内耳竈や俎板など生活用品が多数出土している。堀埋土の花粉から城内でソバやペニバナの栽培がされていた可能性がある。城の外縁と城内に巨大な堀を配置し要塞のような構造を備えながらも居城としての役割をある程度果たすとみられる。なお、今回の調査では、堀埋土の上位から出土するものや、小破片も含めて戦国期の出土遺物は16世紀前半頃までのもので、1560年代に成立するとされる大塚第3・4段階の遺物は確認できなかった。また、天正12(1584)年の小牧・長久手の戦いの頃に想定される改修の痕跡も確認できなかった。

(2) 土地利用の変遷

大高城跡が築かれた丘陵は、古くから開発が行われていた。弥生時代中期後葉から末期の土器片が調査区全体で出土し、この地に竪穴住居跡などが広がっていた様子が伺える。集落は古墳時代には消滅したようであるが、古墳時代後期頃の須恵器は少量出土しており、南側の支丘陵にある石神遺跡(後期古墳)が築かれた時期の生活痕跡が認められる。

再び生活域となったのは山茶碗の出土量が増大する12世紀後半頃であろう。以降14世紀代にかけて本丸地区には柱穴などが掘られ、建物等が建っていたと思われる。その後、15世紀前半頃に整地が行われた(中世包含層Bが形成された)。中世包含層Bを生活面とした期間については情報が不足しているものの、柱穴が複数確認されており、屋敷地などとして一定期間利用されたとみられる。

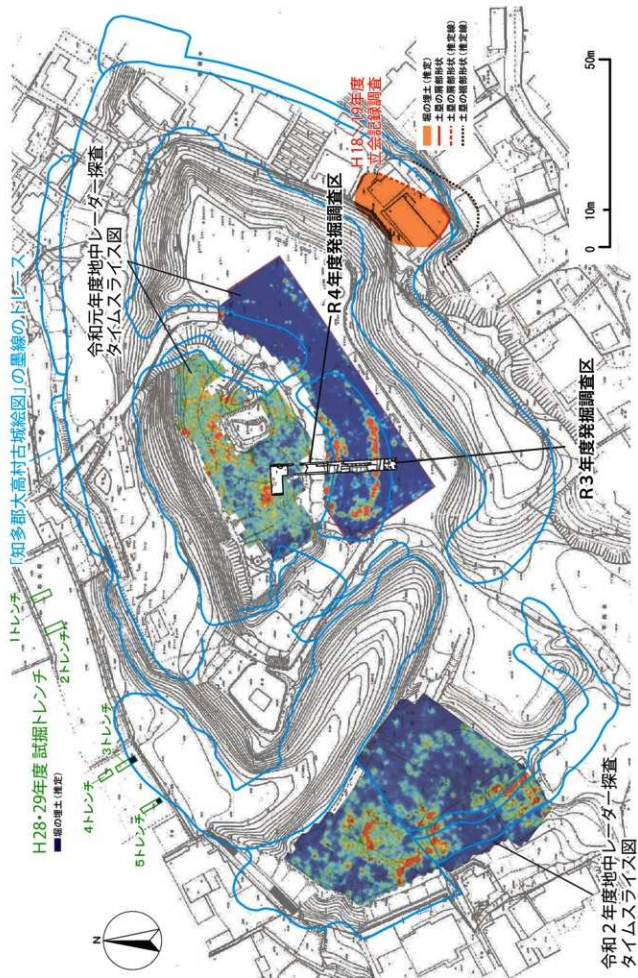
15世紀後半頃から16世紀代には、大規模な堀・本丸が造成され城館機能があったとみられる。「桶狭間の戦い」以降は、堀底は埋められたものの、本丸の状態はよく保たれていたと考えられ、継続して城が使われていた可能性は否定できない。江戸時代前期には、本丸部分に残存した廃材や遺物を灰白色粘土の盛土を壊しながら清掃して堀を埋めた可能性がある(堀土層Ⅱの堆積の由来)。

明治期に茶席や山荘ができ、堀の窪みはさらに埋められた。昭和以降の土坑の痕跡や土の堆積が比較的少ないのは、昭和13年の史跡指定を受け、城跡が保護された結果と推定される。

(3) 「知多郡大高村古城絵図」及び地中レーダー探査成果との整合性について

地中レーダー探査では、特に堀の平面規模や深さを捉えることができた。発掘調査成果と重ね合わせると堀の強い反射は斜面部分(掘り残された地山部分)に反応したものと考えられる。また、本丸地区では、他の地点と比べて全体に反応が強い。草や根の影響も大きいと思われるが、突き固めた盛土に反応した可能性もある。

地中レーダー探査及び発掘調査の成果と「古城絵図」に描かれている城跡の姿が整合し、大高城跡においては「古城絵図」の正確性、地中レーダー探査の有用性を示したと言える。



第3-6-2図 調査成果とレーダー探査成果図・知多郡大高村古城絵図墨線 重ね合わせ図

第4章 丸根砦跡

第1節 経緯および現況

丸根砦跡は、JR東海道本線大高駅西側に広がる丘陵の南端、標高約35mに位置する。丘陵は宅地化が進んでいるが、砦跡周辺は山林として保存されている。なお、史跡指定地範囲は、指定された地番の変更などがあり現時点で明確でない。砦跡の周囲には道路が巡っており、これより内側約2,478㎡を名古屋市教育委員会が所管している。この道路は、史跡指定以前の大正9(1920)年4月に認定された道路で、耕地整理8号線支線16号という(以下「周回道路」)。道路の一部は史跡内に含まれると思われるが、現在も生活道路として利用されている。大高町から名古屋市に合併される以前から、砦跡には人の出入りがあり、現在、擬木の階段が整備されている。

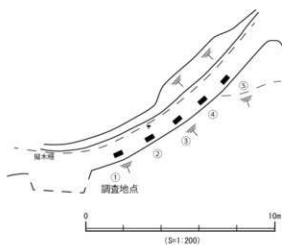
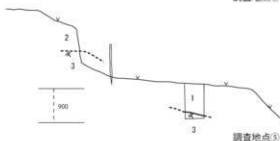
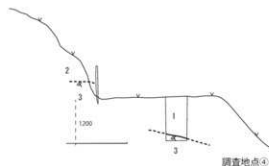
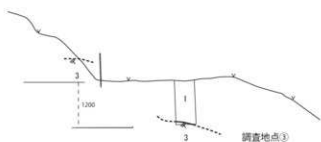
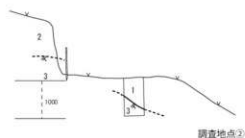
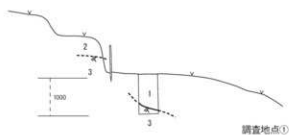
昭和43(1968)年5月に、丸根砦戦死者慰霊奉仕会により砦跡頂部に地上2.1mの高さの木製慰霊墓碑が設置されている。昭和48(1973)年9～10月に、砦跡北側(現在の北側擬木階段入口付近)にテレビ受信アンテナが設置されている(現在は撤去)。昭和54(1979)年5月、丸根砦戦死者慰霊奉仕会により慰霊石碑が建立される。翌年5月にその周囲に竹囲が設置される。なお、昭和63(1988)年5月には、竹囲は石製玉垣へと改修されている。周回道路は、平成元(1989)年4月1日時点では幅員平均2.5m・約209m延長の道路で、砂利敷きの道であった。前年の昭和63年には、道路上に散水栓等が暫定的に設置されている。

砦跡は、これまで発掘調査は行われていないが、名古屋市教育委員会は平成2(1990)年9月に周回道路において試掘調査を実施している(第4-1-1図)。隣接する住宅建設に伴う道路内管路工事に伴い行われたもので、道路上に長さ1m×幅0.5m試掘坑5か所を調査した。当時の道路面から約50～100cm下までは道路造成土(碎石)が堆積しており、その下で基盤層とみられる黄褐色シルト礫混入層が確認された。また、山林部分は擬木柵で囲まれ、その内側は崖状部分に地表面が露出していた。試掘記録では基盤層の上位には灰褐色土層が堆積しており、砦構築時の土層の可能性が指摘されている。基盤層の確認レベルにより、砦跡地点の丘陵は、南端は急傾斜となっていることが理解できる。

平成7(1995)年3月、名古屋市教育委員会は填丘測量図を作成している。平成11(1999)年10月、名古屋市教育委員会は環境整備工事を行い、樹木の枝伐採ほか、擬木柵、擬木階段の改修を行っている。

現在、砦跡には周回道路の北から擬木階段で頂部に上がることができる。頂部は南北方向に長い楕円形の平場があり、この中央に石製慰霊碑がある。平場は南に向かって緩やかに下がり、擬木階段により周回道路の南に出ることができる。西から南側にかけては犬走り状の平場が2～3段めぐる。砦跡内西部に、史跡標識が設置されている。なお、東側については樹木・下草が繁茂しており、地表面の状況はにわかには観察できない。

昭和初期まで堀の痕跡がみられたという記録が散見されるが、現在は確認できない。



- 1 道路造成土層
- 2 製薬造土層? (灰褐色土層)
- 3 地山 (黄褐色シルト雜混入土層)



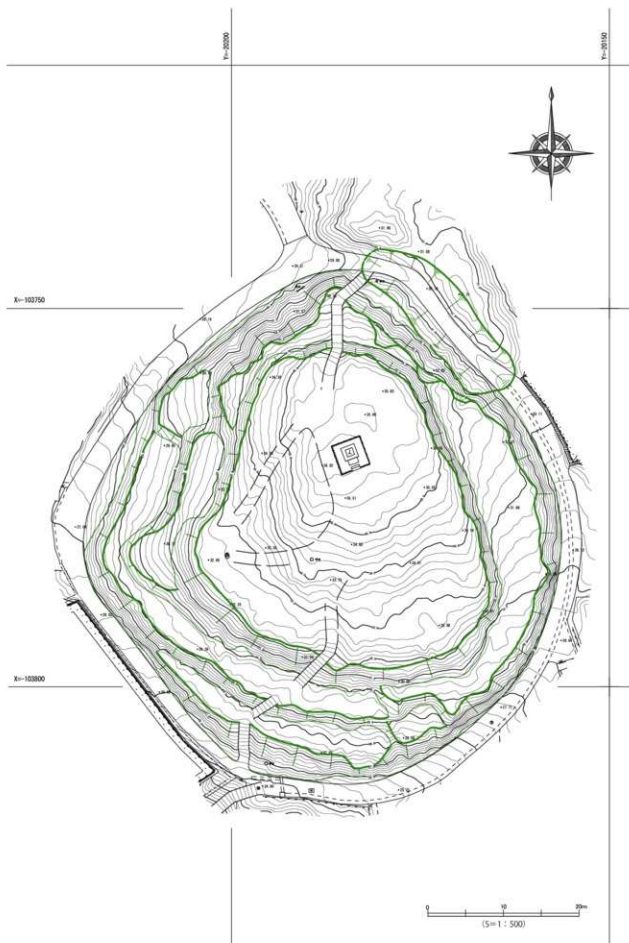
第 4-1-1 図 平成 2 年度試掘調査 位置と土層断面図

第 2 節 地形測量

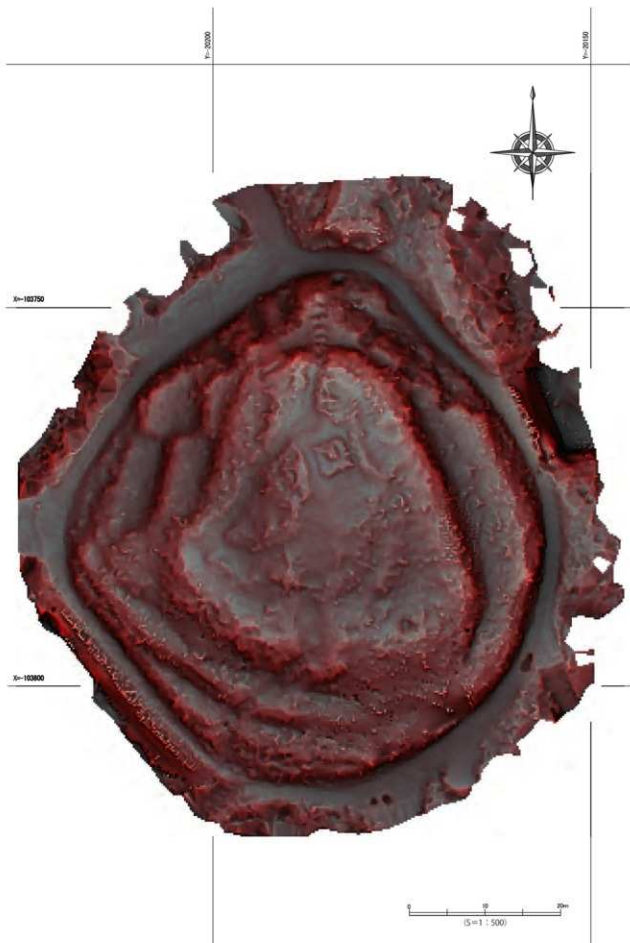
令和 3 年度、名古屋市教育委員会はより詳細な地形状況を把握するため新たに地形測量をおこなった。若跡周辺を含む約 3,500㎡を対象に、地上レーザーにより三次元データを取得し、地形図および着色立体地図を作成した。また、現地を踏査し、残存する傾斜変換の上端・下端ラインを加筆した図を作成した。



第 4-2-1 図 丸根砦跡地形測量図（令和 3 年度名古屋市教育委員会作成）



第 4-2-2 図 丸根砦跡地形測量図 傾斜変換ライン加筆 (令和 3 年度名古屋市教育委員会作成)



第4-2-3图 丸根砦跡着色立体地図（令和3年度名古屋市教育局委員会作成）

第5章 鷺津砦跡

第1節 経緯および現況

鷺津砦跡は、JR東海道本線大高駅の西側に広がる丘陵の、北西方向に伸びる支丘の頂部近く、標高26m付近に所在する。史跡指定地は、都市公園「鷺津砦公園」内にあり、南から西向き斜面を中心とした場所である。

鷺津砦公園は、昭和41（1966）年10月13日に2.4haを都市計画公園として告示され、昭和48（1973）年10月20日付告示第379号で都市公園を設置すべき区域が決定された。昭和52（1977）年8月～12月に公園築造工事が行われ、都市公園法に基づき昭和53（1978）年1月28日付告示第24号で都市公園が設置された。なお、その後昭和62（1987）年3月にかけて区域変更や面積修正等がなされている。

公園の入口は丘陵下となる西部と丘陵上の北部にあり、この入口をつなぐ園路は蛇行しながら丘陵斜面を通る。園路の始点から終点までの比高差は約27mに及び、勾配は大きい。標高約26m付近に石製慰霊碑が設置されており、この慰霊碑と園路を挟んだ東位置には史跡標識がある。慰霊碑の裏手は、東南方向の短い谷が入る。なお、北部入口付近に設置されている遊具やベンチのある広場は、およそ半分が指定地内に含まれる。

園路周辺以外は、鬱蒼とした雑木林である。なお、公園南部に、東西方向の谷が認められる。この谷は人工的に開削された道で、長寿寺の裏手の平場に終着する。大高城主を務めた水野家の墓地の跡という。

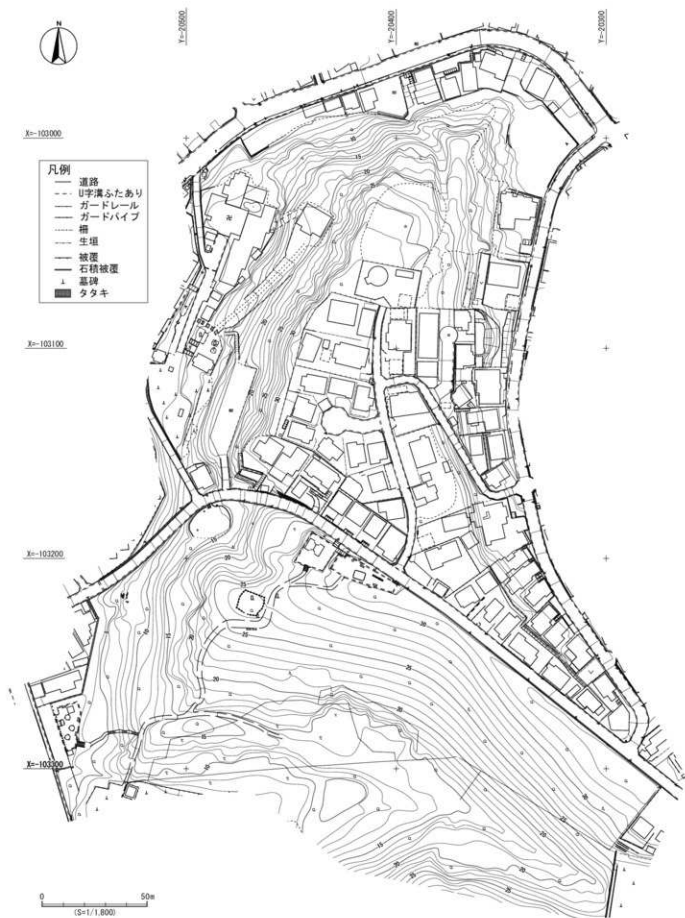
鷺津砦跡 本来の位置について

現在、鷺津砦跡は大高城跡に対峙する位置ではあるものの、尾根の中腹を中心とした場所であり、城館に直接伴う遺構は確認できない。一方で、現段階で砦跡として最も有力であるのが、公園より道路を挟んで北方にある字「鷺津」地内の住宅地である。

若山善三郎氏が『愛知県史蹟名勝天然記念物調査報告』第7に記述しているように砦跡は「大体の想像位置」であり、昭和4（1929）年当時から遺構は明確に残っていないようである。なお、水野家の墓地跡へとつながる谷について、若山は「鍵の手に濠隙及び土塁と思はるるものあり、古城絵図の蒲鉾形の堀の一部分」にあたる可能性があると指摘している。高田徹氏の研究によれば、「尾州知多郡大高之内鷺津丸根古城図」（参考図版2）に描写される特徴から、砦跡は従来の指定地より北東約100mの地点、鳴海方面に向かって北側が突きだす尾根頂部付近と考えられる。尾根は一定の平坦面があり、大高城方面、鳴海城方面に見通しが効く場所である。なお、宅地化されているため、痕跡は残されていない。

第2節 地形測量

名古屋市教育委員会は、令和4年度に、より詳細な地形状況を把握するため新たに地形測量をおこなった。砦跡及び砦跡指定地の北側住宅地付近約13,662m²を対象に、既往の地形図データをベースとしつつ地上レーザーにより三次元データを取得し、地形図および着色立体地図を作成した。



第 5-2-1 図 鷺津砦跡地形測量図 (令和 4 年度名古屋市教育委員会作成)



第 5-2-2 図 大高城跡周辺着色立体地図（令和 4 年度名古屋市教育局委員会作成）

第6章 総括

本書では、令和元（2019）年度～令和5（2023）年度に行った「大高城跡 附 丸根砦跡 鷲津砦跡」に関する各調査の成果を報告した。

3か所とも、現況の地形測量図、着色により高低差を示す立体地図を作成し、今後の基礎資料とした。大高城跡では、地中レーダー探査ののち発掘調査を行った。大高城跡は戦国時代の城館跡とみなされていたが、発掘調査により戦国時代の遺構が実際に確認された。また、確認された堀は「桶狭間の戦い」時に機能していた可能性がある。

城は、本丸を灰白色粘土で盛土し、その南側に幅約15m、深さ4m以上の堀を掘削した。現況地形測量から確認できる外堀も規模が大きく、築城には大きな人員の投入があったと思われる。これらの土木工事は時期の限定は難しいものの15世紀後半頃から16世紀代の行為と推定されている。記録類ではこの頃、大高城周辺地域において今川や織田など諸勢力が攻防をくり広げており、城が防備を固める必要に迫られていたことは想像に難くないが、今回の発掘調査で確認された本丸の造成や堀の掘削がそれらの事柄とどのように関わるのか（直接的に関連するのかなど）を明らかにするのは今後の課題となる。

丸根砦跡は発掘調査は行っておらず構造等は不明であるが、地形測量により長楕円状の曲輪を確認し、着色立体地図でその周囲、特に東側に堀状の落ち込みが巡る可能性が推定されるようになった。

鷲津砦跡は、砦跡の本来の位置は現況の史跡指定地より北側と推定されており、この部分を含めて地形測量と着色立体地図を作成した。宅地化されており地形の読み取りが難しいが、今後の取り扱いを検討する上で重要な基礎資料となる。

本調査で、大高城跡では地下遺構が良好に保存されていることが判明した。また、地中レーダー探査及び発掘調査の成果と、「古城絵図」の描写とは整合することが確認された。今回の調査で堀が「桶狭間の戦い」の時期に機能していたと推測できるようになったことは意義深く、史跡の価値の一端が明らかになった。今後は保存活用計画を策定したうえで史跡の適切な保存・活用につなげていきたい。

参考文献

- 若山善三郎「知多郡大高城跡附鷲津砦跡、丸根砦跡」『愛知県史蹟名勝天然記念物調査報告 第7巻』愛知県 昭和4（1929）年
- 大高町『大高町誌』昭和40（1965）年
- 大畑伸監修『日本城郭全集7』新人物往来社 昭和41（1966）年
- 児玉幸多・坪井清監修『日本城郭体系9』新人物往来社 昭和56（1981）年
- 遠藤文之・川井啓介・鈴木正貴「尾張国古城絵図考」『愛知県中世城館報告（尾張地区）』愛知県教育委員会 平成3（1991）年
- 『鍋と壺 そのデザイン 第4回東海考古学フォーラム』東海考古学フォーラム尾張大会実行委員会 平成8（1996）年
- 新修名古屋史編集委員会『新修名古屋史 巻2』名古屋 平成10（1998）年
- 高田徹「桶狭間合戦時の織田氏陣城」『中世城郭研究』第14号 中世城郭研究会 平成12（2000）年
- 愛知県史編さん委員会『愛知県史 資料編11 織豊1』愛知県 平成15（2003）年
- 名古屋博物館『名古屋博物館企画展 城からのぞむ 尾張の戦国時代』平成19（2007）年
- 愛知県史編さん委員会『愛知県史 別編 窯業2 中世・近世 瀬戸系』愛知県 平成19（2007）年
- 愛知県史編さん委員会『愛知県史 資料編12 織豊12』愛知県 平成19（2007）年
- 高田徹・岡村弘子「蓬左文庫蔵古城絵図に関する検討（その1）―作成過程を中心に―」『城館史科学第6号』城館史科学

会 平成 20 (2008) 年

愛知県史編さん委員会『愛知県史 資料編 10 中世 3』愛知県 平成 21 (2009) 年

愛知県史編さん委員会『愛知県史 別編 窯業 3 中世・近世 常滑系』愛知県 平成 24 (2012) 年

新修名古屋市史資料編編集委員会『新修名古屋市史 資料編 考古 2』名古屋 平成 25 (2013) 年

名古屋博物館『平成 26 年度名古屋博物館特別展 三英傑と名古屋』平成 26 (2014) 年

愛知県史編さん委員会『愛知県史 別編 窯業 1 古代 猿投系』愛知県 平成 27 (2015) 年



中世包含層 A 検出状況 (東から)



中世包含層 A 検出状況 (北西から)

写真図版 2



本丸西壁土層断面 (1)



本丸東壁土層断面 (1)



本丸東壁土層断面 (2)



本丸東壁土層断面 (3)



本丸東壁土層断面 (4)



堀完掘状況（北から）



堀完掘状況（北西から）

写真図版 4



堰断面北側（南西から）



堰南肩（北西から）



堰北肩平坦面（北東から）



堰断面下位北側（西から）



堰断面下位南側（西から）



掘埋土下方北側（北西から）



鐺鉢（48）・徳利（52）出土状況（北西から）



漆膜①出土状況（南から）



俎板（73）出土状況（西から）



帯曲輪（北西から）



堀 出土遺物



擂鉢 (28・48)



有耳壺 (56)



土師器 (60)



石飛碟 (43)



本丸出土遺物



堀土層1出土遺物(1)

写真図版 8



堀土層Ⅰ出土遺物(2)



堀土層Ⅱ出土遺物



堀土層 II 出土遺物 (2)



堀土層 II 出土遺物 (3)

写真図版 10



堀土層Ⅲ出土遺物(1)



堀土層Ⅲ出土遺物(2)

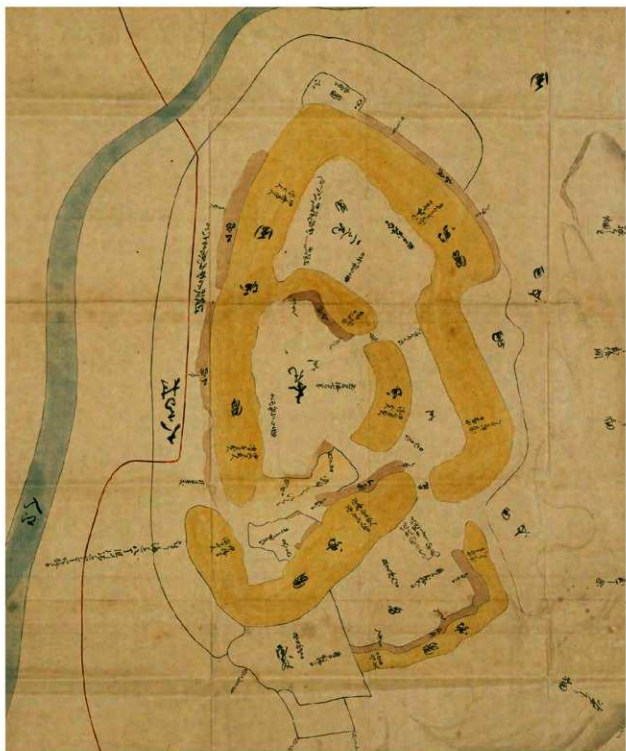


堀土層IV出土遺物

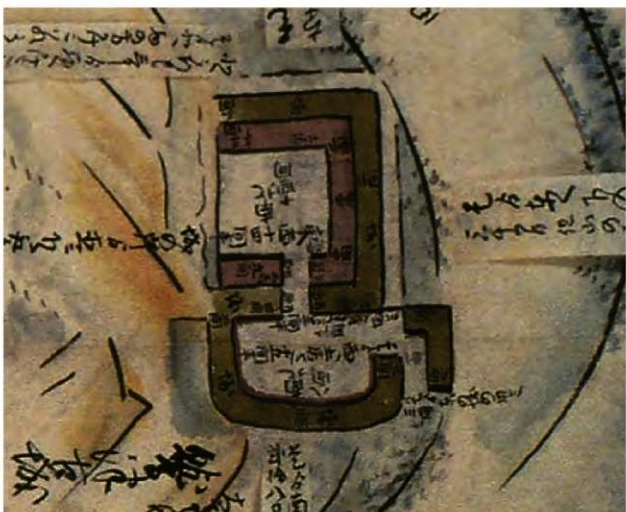


堀土層Vほか出土遺物

参考図版 1

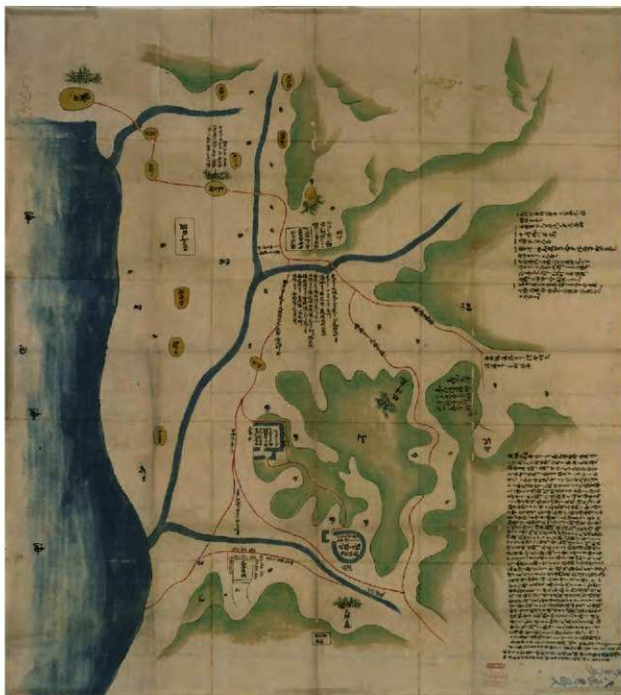


知多郡大高村古城絵図（部分）名古屋市蓬左文庫所蔵



尾州知多郡大高之内鷺津丸根古城園（大高兵糧入）（部分）名古屋市蓬左文庫所蔵（上：丸根砦跡、下：鷺津砦跡）

参考図版 3



桶狭間合戦之図 名古屋市蓬左文庫所蔵



報告書抄録

ふりがな	まいごうぶんかざいちょうさほうこくしよ
書名	埋蔵文化財調査報告書
副書名	国史跡 大高城跡 附 丸根砦跡 鷺津砦跡
巻次	100
シリーズ名	名古屋市文化財調査報告
シリーズ番号	117
編著者名	岡 千明・小林由典・清水理史・伊藤 茂・加藤和浩・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・Zaur Lomtadize・小林克也・竹原弘展・藤根 久・米田恭子・三谷智広・森 将志
編集機関	名古屋市教育委員会 生涯学習部 文化財保護室
所在地	〒460-8508 名古屋市中区三の丸三丁目1番1号 TEL (052) 972-3268 FAX (052) 972-4202
発行機関	名古屋市教育委員会 生涯学習部 文化財保護室
所在地	〒460-8508 名古屋市中区三の丸三丁目1番1号 TEL (052) 972-3268 FAX (052) 972-4202
発行年月日	令和6年3月29日

所収遺跡	所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
大高城跡	名古屋市区大高町 字城山・田中・本町	23100	14-144	35° 03' 51"	136° 56' 10"	2021.01.21 ~ 2021.03.31	1,800㎡	(地中レーダー 探査)
						2021.12.15 ~ 2022.03.31	1,800㎡	(地中レーダー 探査)
						(第1次) 2022.01.17 ~ 2022.03.11	54㎡	保存活用目的 調査
						(第2次) 2023.01.16 ~ 2023.03.10	65㎡	保存活用目的 調査
						2023.11.21 ~ 2024.02.29	26,578㎡	(地形測量)
丸根砦跡	名古屋市区大高町 字丸根・西丸根	23100	14-145	35° 03' 51"	136° 56' 43"	2021.08.18 ~ 2021.12.28	3,500㎡	(地形測量)
鷺津砦跡	名古屋市区大高町 字鷺津山	23100	14-138	35° 04' 10"	136° 56' 32"	2022.12.27 ~ 2023.03.31	13,662㎡	(地形測量)

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物
大高城跡	城館跡	戦国時代	本丸(主郭)、堀、帯曲輪	古瀬戸製品、瀬戸美濃大窯製品、 内耳鍋、笄、硯 等
要 約	<p>大高城跡は、永禄3(1560)年「桶狭間の戦い」で松平元康(徳川家康)が兵糧の運び入れを行った城跡として知られる。国史跡 大高城跡 附 丸根砦跡 鷺津砦跡の保存活用計画策定に向けた内容把握のために調査を実施した。</p> <p>戦国時代の堀が確認され、この堀が「桶狭間の戦い」時に機能していた可能性があることが判明した。堀の規模は幅約15m深さ4m以上で、堀埋土から15世紀半ばから16世紀半ば頃の土器・陶磁器類が出土した。本丸(主郭)は灰白色粘土による盛土で造成されていることがわかった。丸根砦跡、鷺津砦跡の地形測量成果も合わせて掲載した。</p>			

名古屋市文化財調査報告 117

埋蔵文化財調査報告書 100
国史跡 大高城跡 附 丸根砦跡 鷲津砦跡

2024年3月29日発行

編集 名古屋市教育委員会文化財保護室

TEL (052) 972-3268

発行 名古屋市教育委員会

印刷 西濃印刷株式会社